
新・幻想の零戦

栗林

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新・幻想の零戦

【Nコード】

N8540J

【作者名】

栗林

【あらすじ】

多世界大戦終結から5年、幻想郷に平和が訪れたもののそれは束の間の平和にすぎなかった。新たな大戦争、いつもどおりの異変、そして外の世界の幻想郷感知危機、最終的に幻想郷に平和をもたらすのは外来人か、それとも東方陣か。

（幻想の零戦の続きです、前作を読まないといけないかもしれませんが）

第一話 幻想国現状（前書き）

今回キャラのセリフがありません。ただ5年経った幻想国の様子です。

本格的な物語は次回からです。

第一話 幻想国現状

幻想郷……そこは人間と妖怪が共生し、妖怪は自存の為時には人間と決闘し人間も自存の為に頭を使い活動していた。長年平和だった幻想郷の平和は6942年5月1日から6945年6月12日まで行われた多世界大戦によって一時奪われてしまったが同盟国陣営の勝利によりその平和を再び手にする事に成功、以降も国は発展していく今までどおりあらゆる手段をつかって人口は大幅に増加、終戦時よりも当然多くなっている。

今日は5年が経過した年の7月1日であった……

さて、幻想国も今年で建国8年目、その発展ぶりと国内、そして世界のちよつとした問題を紹介しよう。

現在幻想国の人口は約893万人、その民族構成は日系幻想人45%、妖怪45%、地底人3%、月人2%、その他5%と大半は日系人と妖怪である。公用語は従来どおり日本語で国歌も愛国行進曲の替え歌であった。

人間と妖怪の力関係を保つために定期的に決闘が行われ1年に一度、夏に「天下一人妖武道会」という大会が開催され予選は各地で、本選は京都南部にある国立競技場で行われ優勝者には賞金として50万円、2位が300万、3位が100万、4位が50万、5位が10万と上位5位まで賞金がもらえる事になっている。

ルールは相手を殺したら失格、場外になったら失格、武器の使用は刃物とか銃などは流石に禁止である。6946年から行われているこの大会、第2回以降参加者の増加により制限時間30分が設けられ制限時間オーバーの場合は審判の判定で勝敗が決まるという、某漫画のあの大会を真似たようなルールであった。

政治の面では「君臨すれども統治せず」という事と憲法により天皇である紫は政治に関わっていない、あるとすればちよつとした国事行為ぐらいである。

立派な立憲君主主義国家である。衆議院と貴族院があり2院制でありそれぞれちゃんと任期も決まっている。国会議員は総選挙によって選ばれる。

現在の内閣総理大臣は第一党である幻想党の三千院有朋さんぜんいんありともである。

海軍大將でもあり大幻想戦争中は第3艦隊の司令長官を務めていた。その海軍の大臣は現在小沢大將である。戦争中は連合艦隊司令長官として艦隊を指揮し多大なる戦果を挙げている。

陸軍大臣には栗林忠道大將が選ばれ空軍では山口大將が大臣に選ばれていた。

その他の省庁でも世代交代が行われていたが開戦から終戦まで幻想国を指導した亀梨は今もいろいろやっており幻想国にとって欠かせない存在であった。

また省庁とはちよつと違うが山本五十六は既に高齢であるにも関わらず未だに軍令部総長として活躍していた。

このように国では世代交代が行われているといつても過去の者達もなんらかの形によって国家に貢献していた。

また、政治家の汚職が少ない国であり世界的にも注目されていた。地方行政区画では10つの州に区分されその下にいくつかの府県が存在している。また南洋には委託統治領としてミヤコフ諸島、ボストーク島の西半分、コーネフ島、レオニード島がある。かつては関係者以外立ち入り禁止であつたが今ではかつての島民も戻り軍民仲良く生活していた。

経済面では戦後になつて失業率がちよつと上がるも今は改善傾向にある。

その高い技術を生かして数々の製品を世に送り軍事面でも密かに儲けており経済は良好な様子、義務教育9年に高校、大学などもあり教育水準の高さはそこの小国よりも高い。日本語はもちろんこれからの国際社会を生きて行くべく英語も必修でありさらにドイツ語やロシア語なども教育されている。

外国語に対する関心も高いため中には4〜5ヶ国の言葉を話せる者もいるといいまた幻想人は勤勉で働き者で海外でも「幻想人はよく働くし使える」と評判になりつつある。そしてなによりこの国は前の大戦での勝利に大きく貢献した事から多国連の常任理事国になつており単純に小国とは呼べないほどになっていた。

ちなみに週休二日制、土曜と日曜には休みがあるが休みがない職業もある。

文化面では音楽は力が入っているらしいが美術、芸術はそれほどもない。ただし誰が持ち込んだのか外の漫画やアニメ、ゲームが人気であつたり自国でもそういったものが作られ人気を集めており「幻想国のアニメは質がいい」と外国にも評判であつた。ある意味では悪い結果かもしれない。

スポーツでは先ほどのように妖怪の都合により大規模な武道大会が行われかなりの賑わいを見せ外国からも参加者が来る程である。ある評論家は「国際的な大会になるのも時間の問題だろう」といつている、他には6956年の夏季オリンピックが幻想国の迷林市で開催予定である。

交通などでは航続距離の長い旅客機が就役し国際線で活躍、車も終戦時と比べて普及し京都、千鳥の間で初の高速道路が開通、現在迷林市と妖怪の山への延長工事が行われていた。

ほぼ同時期京都―千鳥に「幻想郷新幹線」が部分開通、0系新幹線が再び勇姿を見せびらかして走っていた。在来線も一部が複線化されまた全線が電化、さらに非電化ながら要所を繋ぐ新たな路線も開通しそれらの中には特急列車が走る路線もあった。

軍事面では天界での緊張や以前までは多国連軍として南口マノフに進駐する人員を必要としていた為、また南口マノフから撤退しても天界や近年のロマーニヤ等との緊張により廃止の方針であった徴兵制がまだ存続となっていた。

軍縮方針だったのだが強力な天界、そして大戦を倒して工業化が進み強力な陸軍、そして艦隊を編成してしまったロマーニヤとの緊張により軍縮が行えなくなってしまった。

その為現在陸軍60万人、海軍30万人、空軍8万人と人口のわりには多い。さらに予備役に約50万人ほどがあり動員可能人員は100万人を越えている。銃所有率も高くハルシュタットの軍事評論家によれば「軍人でも予備役でもない者達が銃を持って戦えば200万人は越えるだろう」と推測しており結論として「この国に侵攻するのはやめておいたほうがいい、兵士、兵器の質も高い」という事らしい。

陸軍は大幻想戦争期と比べると編成がかわり師団定員は12000人、連隊も3000人となる。師団の数を減らしながらも人員数はそれほど変化していない。むしろ増えている。

海軍はなんと30万人もいる。これは日本海軍開戦時の人員より僅かに少ない程度である、しかし予備役から引っこ抜けばさらに11万人の増員が可能だという。もっともそれは戦時のみの話だが。

大和は一月島に再び記念艦として飾ら遠軽は予備役に（ただし魔改造中だとか）、その他の戦艦群は銀色艦隊の金剛を除いてすべてがロマンフに売却され金剛を含む数隻の戦艦は予備役に編入され紺碧諸島で保管されていた。

現在幻想海軍はジェット機用に大型空母を2隻（名前は飛龍、蒼龍）。近代化改装を行いジェット機に対応した千鳥型航空母艦2隻、同じくジェット機に対応できるように改装された元南ライデンブルク艦「信濃」、その他レシプロ機搭載の瑞鶴、龍神型1隻、蒼鷹型2隻、さらに戦艦から空母に改装された「武蔵」1隻と実に大小10隻もの航空母艦を保有していた。そのほかに予備役として瑞鶴を始めとする空母8隻が保管されている。

それを護衛するのは巡洋艦や駆逐艦、そして眼下には潜水艦である。また幻想海軍は有力な航空隊を保有していた。小規模ながら陸戦隊も存在する。

一方8万人も人員がいる空軍は多数の航空機を持っていた。しかしこれだけでは現在の仮想敵である天界やロマーニヤ等と戦うには不十分であった。そこで幻想国はアメリカス、ハルシュタット、イングラント軍の駐屯を認めさせそれらで戦力不足を補っていた。

また東方連合（略してＴＵ）加盟国との共同行動をとることも視野にいれ主に陸軍と空軍は訓練していた。ちなみにＴＵでは通貨が東に統一され好影響と悪影響両方をもたらしっているが最近になって安定してきた様子である。ほかにもいろいろあるがこっぴつた事により最近では「ＴＵが一つの国」とまで言われるようになっていた。

その主なメンバーは東方議会議長に元首相の亀梨三朗、東方理事会議長に南天界の永江衣玖。東方委員会委員長は西幻想国出身の栄田早雲えいだ そつうんとなっている。

話は戻ってこのＴＵは軍事面でも一緒になっており加盟国が外部からの攻撃をうけている場合、共に協力しあって戦闘に参加する事になっている（ただし参戦するかどうかの会議はある）。

また兵器の共同開発も行われている。

このように幻想国は奇跡の大発展を遂げた、今も発展中であった。しかし天界側は息を吹き返し始めロマーニヤ側の動きも最近怪しい。多世界大戦後の世界は再び混乱を見せようとしていた。

第一話 幻想国現状（後書き）

御意見、御感想等お待ちしております。

第二話 発生危機

明治9年7月1日。

この日元山空軍基地に1機の航空機が降り立った。

ス式重爆撃機、かつてライデンブルク軍が使用していたスパシーチエリの事である。

塗装を変更、また多少の改良が加えられて終戦から5年が経過した今も使用され続けていた。今も数の上では幻想空軍戦略爆撃部隊の中核を担ってる。

ス式重爆撃機は綺麗に整備されている元山の滑走路に降りそこで停止する。

中から降りてきたのは士官服に身を包んでいる海斗であった。38歳となった彼は現在少将に昇進、第1航空団司令官として活躍していた。その為既に自らが前線で戦うという事はなくなった。ただし何かあれば自ら操縦桿を握って現場に向ったりした事もあるという。

「閣下！お疲れさまです」

「うん、諸君らのお出迎えに感謝したい」

すっかり偉くなってしまった海斗に対し兵士達は敬礼をする。海斗もそれに答礼した。

敬礼する人の中には武藤と朱鷺子の存在もあった。

「それにしても織本少将、貴方だけ随分と偉くなりましたね」

「いろいろあってな、その分書類と格闘さ。2人はまだいいなあ」

「そ、そうですね？」

海斗はいざとなれば実戦で戦う事になる2人を見てそういった。

朱鷺子にとっては意外である。昇進すれば給料があがっていいじゃないかと思っていたからである。

「では自分はこれで」

「どちらにいかれるのですか？」

朱鷺子は海斗にそう訊いた。

「ん？ちよつと仕事でな。博麗神社まで」

「お気をつけて」

武藤と朱鷺子は海斗に対し敬礼する。海斗もそれに答礼した。

海斗は着替えた後、一度基地を出て自宅に向った。現在博麗神社までは道路が整備されておりだから移動時間を節約する為に海斗は車を使うことにしたのである。

彼のトヨペット・スーパーはまだ健在であった。

しかし、仕事へ向う前に海斗は自宅に入った。鍵をとるためというのもあるのだが家族と会うためである。

「ただいま」

「あつ？おかえりパパ！」

海斗を出迎えてくれたのは7歳になる玲奈である。

現在小学2年生で成績は中の上ぐらい、流石に赤ん坊の頃と比べると

と格段に成長しており少し目を離せばまたかわってしまつのではない
う感じである…とはいふもののやはりこの年齢は普通に子供であ
る。

「お、玲奈か。咲夜は？」

「街に買い物、私はお留守番」

「そうか、偉いな」

海斗は玲奈の頭を撫でた。しかし玲奈はあまり嬉しそうではない。

「私子供じゃないもん！！」

「お、悪い悪い、じゃあこれお土産だ。さっき仕事で南天界に行っ
てきけどそのついでに買った地元特産のお菓子だ」

「ありがとパパ」

「これは咲夜の分……よし、お父さんこれからまだ仕事があるから
いい子でいるんだぞ」

「うん！」

この様子から見ても、織本家の皆は大変仲良しであるようだ。

そして海斗は車の鍵をとって車庫へと向い、鍵をあけて車に乗り込
むといつもどおり「コーンタック」と叫びエンジンをかけた。目的
地は博麗神社である。

（……………栄えたな…この国も）

彼は街の中を走っていたつくづくそう感じていた。

商店街には大勢の人がおり、自動車の数も増え、一方で古臭い路面電車や馬車があったり、伝統行事が行われていたりなどかわらない場面もあった。

彼の理想に近い方向に幻想国は発展したのである。

京都を出て博麗神社までの道路を走る。この区間は人家もなくただ森の中を走るのみ。7月になり気温もあがってきて彼は窓を全開にして走っていた。対抗車線からは博麗を観光した人を乗せた観光バスが走ってくる、森のほうを見れば妖怪達が道路を渡る機会を窺っている、幻想国では当たり前前の風景……

やがて街になってきた。温泉街である。

ここでは8月にお祭りが開かれる、現在博麗神社の近くに幻想神社たるものが建てられた。これは内戦以降の事変、戦争等国事に殉死した幻想国の軍人、軍属等を主な祭神とする神社である。

幻想国の戦没者は宗教関係無くすべてここで英霊として祭られるのである。つまりここは外でいう靖国神社だ。博麗神社に行く前に海斗は幻想神社に立ち寄り参拝した。

ここには彼の仲間が大勢眠っている。

その後、海斗は近くにある建物に向った。ここは資料室、様々な資料が存在し中には実際に戦争でつかわれたものまで展示してある。その一つにかつての海斗の愛機『零戦』があった。

戦後空軍からは退役した零戦……そのうちの織本機はここ幻想神社の資料室に飾られる事になったのである。

「……………」

海斗はじつとそれを見ていた。

しかし零戦が消滅したわけではない。このように静態保存されている機体もあれば動態保存されている機体もかなりの数がある。それに零戦の名を継ぐ航空機も誕生した。

それは今年1月に採用された新鋭機『ふんれいせん またはふんぜろせん噴零戦』である。

もちろん零戦をジェット化したわけではなく、新たに開発された機体であるが6950年ということ、名機を継ぐものにふさわしい性能を示した事によりこの名になったという。

その後、海斗は博麗神社に向った。

ここは相変わらず、古臭い雰囲気を放っており海斗が始めて訪れたときから大した変化はなかった。そして霊夢の見た目にも変化はない。

「久しぶりね」

「お前はかわらないな」

「そっちこそ、偉くなっただけで大して変わってないんじゃないの？」

「それは言えている」

今回海斗が博麗神社を訪れたのも仕事の為、その仕事とは5年間平和であった幻想郷に再び異変が起こり始めているという。海斗は軍から代表として博麗神社に来て霊夢からそれが一体何なのかを聞くため来たのである。

「それで、異変ってなんだ？天界やロマーニヤ、及びロマーニヤの同盟国はかわっているのか？」

「いいえ、天界やロマーニヤ、そしてその同盟国とは一切関係がないらしい。ただ大きな異変だから一応軍にも教えたほうがいいかなと思っただけよ」

「軍が動かなければならないほどか？」

「多分……」

霊夢は何時もにまして真剣そうな表情であった。

「情報本部や東機関でも発見できず霊夢には発見できた……一体相手は？」

「いや、諜報機関は知っている。私と一緒に発見した。って相手は新たな勢力よ。ついでにいえば異変はまだ起きていなくてこれから起きるものだと思うわ」

海斗は不思議に思った。

諜報機関が新たな勢力が異変を起こそうとしている事を隠している事に。

「一体何故諜報機関はそれを軍にも言わずに？」

「おそらく混乱を避ける為」

「なるほど……それで新たな勢力について何か知っているのか？」

「少しだけ、相手は月のスパイよ」

「月のスパイ？」

海斗はそれを聞いた瞬間空を見た。今は見えないが夜になれば見える。まさか今度の相手は月だとは誰も思っていなかった。

「これは極秘、決して余計な人には教えないで。私と東機関の調査によれば輝夜に永琳、そして優曇華ら月から来た者と月から来た者を庇う幻想国の上層部の暗殺を狙っている。クーデターを装って」

「クーデター！？……そんな事をする必要があるのか？」

「あくまで私の推測だけど。多分月の仕業にはしたくないんでしょうね。だから人間の仕業にしようとしているんだと思うわ。海斗に来てもらったのもこれを密かに首相の所に持っていったらどう？」

すると霊夢は1冊の本を渡した。今回の事でわかっている事が一通りかかっている本である。直接渡せば良いものの情報本部や東機関とて元々幻想郷にあった組織ではない。なのでこういう事には詳しい霊夢の協力が必要であった。実際今回わかった事の大半は霊夢が解明した事である。

霊夢は諜報機関の人間ではない、ただの巫女に過ぎないものの幻想国にとって非常に重要な人物であった。

「わかった」

「っじゃあ行くわよ」

「……あれ、お前も？」

「当たり前でしょ、異変解決は私の仕事。貴方には手伝って貰うだけよ」

ここで海斗は頭の中で文句を言った。

「自分で首相に届ける!」と。

第二話 発生危機（後書き）

御意見、御感想等お待ちしております。

第三話 報告とロマーニヤの戦争計画

その後海斗は霊夢を乗せてスーパーを運転し首相官邸へと急いだ。クーデターを装って政権をぶん取り月から来た者達を肅清しようとする月のスパイがいる事を知らせる為である。

これも今までの幻想郷からしてみれば一種の異変である。最もその異変自体はまだ発生していないもののこの異変は発生前に阻止する必要があつた。

でなければ幻想国は月の配下になってしまうからである
数十分後……

「敬礼!!」

首相官邸を守る幻想兵が車の中の海斗に対して敬礼した。

海斗はその後霊夢と一緒に首相官邸に入り首相と面会する事を要請した。

「幻想空軍少将の織本海斗、こちらは博麗の巫女霊夢である。三千年首相との面会を許可されたし」

「これより身体検査を行う」

海斗と霊夢は怪しいものを持っていないかを調べられた。海斗は軍隊手帳を見せ空軍軍人である事を証明し霊夢も証拠となる物を見せたが十四年式拳銃とスペルカードは殺傷力があるものとして幻想陸軍が一時的に保管する事になり、海斗と霊夢は面会を許された。

「……」

海斗は扉をノックする。すると扉の向うから声が聞こえてきた。

「誰か？」

「空軍少将、織本海斗」

「博麗霊夢です」

「入れ」

海斗は扉を開ける。そこには現役の海軍大将で同時に政治家である三千院有朋内閣総理大臣の姿があった。マイナーな存在であったもののそれでもかつては第3艦隊の司令長官で戦場にもいった事があるぐらいである。

「織本少将か、久しぶりですな」

「こちらこそ。お久しぶりです」

海斗は国家将校であり三千院首相とは何度か会った事がある。だから2人は知り合いであった。

ただし霊夢とは初対面でお互いに自己紹介をする。ただ三千院は首相なだけに知名度も高く改めて警戒するような人ではなかったが。

「お2人は本日どのようなご用事で」

「はい…実はこれを」

海斗は例の本を渡す。

三千院はそれを読み始め10分ぐらいが経過した頃に喋り始めた。

「な…なんという事でしようか…まさか月が我が国に対して…いや、可能性はあると読んでいましたか…」

「それで私達は、すぐに行動に移るべきであると思って来たのです」

「なるほど、確かに放っておけば国が月にとられてしまう………了解したが居場所は？」

「それは私も諜報機関も調査中です」

「諜報機関？既に知っていたのか？」

「ええ、諜報機関と一部の軍人のみは。だからかい…織本さんが軍から送られた代表として私の所に来たのです」

「なるほど…」

三千院は考え始める。

予想していた事が現実になろうとしていたからである。

「うーん、私は仮にも軍の最高司令官…しかし一部の軍人しか知らなかった。つふふふ、私は首相として失格かもしれないですな。しかしほぼ明らかになった以上行動に移るほかはありませんな。とにかく私としては居場所を突き止める事が最も重要だと思います。それと帝都の警備を強化する必要がありますな」

「…という事は許可を？」

「もちろんです」

この後、ようやく主要人物がこの事を知る。

この一週間後には霊夢も交えた御前会議が開かれる事になった。霊夢がなぜ招かれたかという幻想国にとっては重要人物で最強の異変解決者である事、そして今回の件で最も多くの事を説明した人物であるからだ。

そのほかには各閣僚、一部軍人、そして国家将校である。

現在国家将校は2人、織本空軍少将と関海軍少将である。関はかつて通信参謀であつたが今はある部隊の司令官になっている。それは各国から退役した艦をかき集めて編成された艦隊である。

旗艦は米戦艦「米利蘭士」^{メリランド}、さらに軽掘尼亞^{カリフォルニア}、西処女阿^{ウエストヴァージニア}、手音使^{テネシー}、

「筆汁芭斤」^{ネバダ}（ペンシルヴァニア）根婆太^{ネバダ}など既に使い物にならない

^{コロラド}

いはずの旧型戦艦である。しかし最近大改装を受け速力は赤帯型は最大27ノット、根婆太^{ネバダ}は25ノットまで向上している。またどの艦も3番砲塔が撤去された変わりに八式巡航誘導弾及び九式対艦誘導弾が搭載された。砲撃戦もできればより現代的な戦闘もできる旧型ながら優秀な艦に生まれ変わったのである。これぞ河童の技術の賜物であつた。

このほかに巡洋艦2隻、駆逐艦5隻がある。

普通は中將が司令官になりそうだがお下がりなうえに元の運用者が退役させた旧型艦ばかりという事と関の有能さから彼が艦隊司令長官に選ばれたのである。

この艦隊の名前は「独立下艦隊」^{どくりつげかんとたい}である。「下」はお下がりを示している。

つまり艦隊所属艦はお下がりのお古ばかりですよという意味を示しているのだ。

さて話は戻ってこの御前会議では異変の詳細と発生の可能性についてが語られ多くの閣僚や軍人達はその深刻さを考え始めた。また同時に中尾大將は地底でも異変が発生する可能性を訴えた。

このように幻想郷のみならず、地底でも異変が起きようとしておりまたこのほかにも皆が知らないだけでちょっとした異変の火種があった。後に同時多発異変と呼ばれる出来事である。

さて、場所は変わって神聖ローマニア帝国の首都、ローマニアにあるサンタンジェロ城。

今では元はドゥーチェで今は神聖帝国の皇帝であるエンヴェル・ムツソリーニ皇帝も住む所である。

その横にいるのはアルフレド・チュザーレ。彼の側近である。

「チュザーレ君、予の神聖大陸神聖化計画は順調かね？」

「はい、軍は2ヶ月あれば作戦行動を開始できるとの事、我が国は大戦を通して旧同盟国からの支援により工業化を果たし万が一幻想国やアメリカクスが参戦した場合に備えて「アクイラ」「スパルヴィエロ」「サヴォイア」「アメリカ・ヴェスプッチ」「フラヴィオ・ジョイア」「カンディア」などの空母6隻、そして数多くの戦艦、巡洋艦、駆逐艦が揃っています」

「問題は空母だ、幻想海軍や米海軍には劣る…っという事は大規模な海戦は……」

「避けるべきですね。私は海軍軍人ではありませんのでその辺は詳

しくありません。海軍の規模からいって幻想海軍だけでもフルボッコにされるのはほぼ間違いないでしょう。しかし防ぎにはなりません。海軍には悪いですが堤防になってもらいましょう。我が国は半島、陸軍力は我がローマニアの同盟国のおかげで豊富でありますから最悪半島の付け根で食い止められますがその強力な陸軍は海では活動できません。だから海軍には堤防になってもらうのです」

ローマニア海軍が以前よりも規模が圧倒的に大きくなっているとはいえ、その規模は明らかに世界を相手に戦うには小さすぎる、かつてのライデンブルクや南ライデンブルクよりも小規模な海軍に過ぎないので真正面から戦うのは難しい、さらにそれ以前の問題もあった。

「エルサレムがさつさと油田地帯を攻略してくれなければ我が国は2年で石油が尽きてしまいます」

「つまり短期決戦にする必要があるというわけだな？」

「その通りです。その事から考えて私は一月島を攻撃するのがよろしいかと思えます」

「なるほど、敵の軍港を叩く……すぐに海軍に教えてやらねばな」

「ええ……とにかく、最初のうちに幻想国の艦隊を全滅させて大西洋の制海権を確保しなければならないと思っています」

「我が神聖ローマニア帝国が底力を見せれば。かつてのローマニア帝国のようにあつという間に勢力を拡大できる。元々我が国は同盟国、従ってモスクワ条約機構軍のようなへまはせんぞ……ふふふふ！」

皇帝、ムツソリーニによるローマニア帝国再建は着々と進み、そしていよいよ神聖大陸神聖化計画が発動しようとしていた。その為に幻想国のシーパワーを封じ込めようと、ローマニアは一月島軍港の奇襲攻撃計画を立案していた。

一方で天界でも……

「ハイルユルゲン！」

「ハイルユルゲン！！」「」

2年前、カステヤノスは謎の死を遂げる。

その結果自らを天人と偽りユルゲンが神として台頭、こちらも天界奪回作戦と世界征服を行おうと、今にも作戦行動を起こしそうな様子であった。

多世界大戦終結から5年、早くも世界中が戦争に巻き込まれそうになっていた。

第三話 報告とロマーニヤの戦争計画（後書き）

御意見、御感想等お待ちしております。

第四話 タラント偵察

一方で、異変が発生しそうだという事で慌てている幻想国でもどうやって戦うかという計画があった。まずロマーニヤや天界が侵攻を開始すれば多国連軍は動くに決まっているので他国の軍隊の支援を受けられるのはほぼ確実であったが問題はどの軍を展開させるかだ。

地上戦の主力、幻想陸軍は60万人に過ぎない、これでは特に東部戦線のような戦いならば一回の戦いで消耗して戦闘が続行できなくなる。しかも相手は天界とロマーニヤ及びその同盟国であり、しかも本土及び外洋諸島防衛の為に最低限度の戦力が必要である為兵力を分散する必要があった。

この日、アリス・マーガトロイドが派遣され遠軽にある石原家へと向った。

「ほお、お嬢ちゃん陸軍中将なのか、いやあ若いねえ。私の頭とは全然違うよ」

「…」

アリスは一瞬石原の頭を見て、失礼だと思って表ではただ見ているだけであったものの内心は確かに炎が扱える妖怪同士が決闘した後草原だった所のような頭だなと笑っていた。

「それで、今日は私みたいな老いぼれになんの用かね？」

「はい、開戦が予想される天界及びロマーニヤと戦うのに緒戦でどのように兵を…」

「動員兵力ですな」

「鋭い、そうですよ」

「んー」

石原は腕を組んで考え始めた。

1分ほどが経過して石原はどうすればいいのかわかったのか、喋り始めた。

「今の軍の規模がどれくらいかはわかる。その事から考えて自分なりに振り分けて見た。もちろん私のような老いぼれではなく今の正規軍人のほうが有能だとは思ってから参考程度にだけしておいてほしいと思ってますが」

「それで、だいたいどんな感じですか？」

「まず天界に30万、ローマニア方面に25万、残り5万は本土及び外洋諸島の防衛だ」

「えっ？本土はそれだけでいいのですか？」

「うん、正規軍も大事だが民兵組織が沢山あるだろう、しかも大幻想戦争経験者が沢山いるわけだから錬度も高い…はずだ。ここ遠軽の遠軽郷土防衛隊の兵士は人数こそ少ないがよく訓練されている」

「なるほど…」

幻想国は正規軍の他に市民の市民による市民のための軍隊が数多く存在する。よく訓練されており軍人の他にもだいたいは副業があったりなど働き者で強くそして社会に貢献している。

ところが、ロマーニヤ方面に25万というのは海軍としては困る事が一つだけあった。それは艦艇不足である。

確かに海軍は多くの艦艇を保有しているものの陸軍の兵士や装備を戦地まで輸送する艦艇が不足している。艦艇が不足しているからといって輸送が不可能というわけではないものの迅速さに欠けてしまふ。

今度の戦争は、全開は陸戦及び空中戦が主体であったが今度は海戦も視野にいれなければならない、幻想国の外洋諸島を守るには海軍力が必要であった。

そこで幻想海軍は多世界大戦に勝利して以降着々と人員を増やしていき今では開戦時の日本海軍より僅かに劣るぐらいの人員を抱えても大きい海軍になっていた。

さらに有力な海軍航空隊と小規模だが海軍陸戦隊も持っていた。そんな海軍は本日、危険な作戦を行っていた。それはタラント軍港の偵察であった。もちろん夜間にやる事である。

夜……

伊25潜水艦はこっそりタラント軍港に迫っていた。

艦長である村紗水蜜少佐も潜望鏡でその姿を確認していた。

「ようそろ……」

「どれ………おお……」

潜望鏡から見えるのはタラントの明かりである。そこその人口が

あるタラント、さらに軍港もありとても明るい街といった感じである。

「艦長、この事からロマーニヤは…」

「対潜警戒を怠っている見たいね、潜望鏡で見えるぐらい近づいているっていうのに駆逐艦や哨戒機がこないわ」

タラントはロマーニヤ海軍の要所である。

ここには大規模な軍港があり幻想海軍が機動部隊を率いて攻撃するならここは確実に目標となる場所である。しかし直接機動部隊による攻撃は損害が大きくなるというデメリットもあった。そこで夜間に潜水艦数隻で奇襲攻撃をし掛け翌日に機動部隊の航空兵力をもつて攻撃する。

だがこの作戦もデメリットはある、潜水艦による攻撃が成功すればロマーニヤの戦力は消耗するがその分、潜水艦が到着前に撃沈される可能性が高い。

その為に、ロマーニヤがどの程度警戒しているかを今回調べたていのである。もちろん戦時になれば今よりも警備が堅くなるだろうがこれは立派な領海侵犯であり幻想海軍なら既に出動して呼びかけ、威嚇射撃、どうしても応じなければ撃沈といった行動に出るあたりだ。

しかしロマーニヤはなにもしてこない、駆逐艦も哨戒機も飛んでこないのだ。

もちろんこれは万が一開戦となった場合の作戦である。

「電探に感!!!3隻!!!」

「駆逐艦かしら？お出でなさったわね。これよりマサール島に帰投する」

「了解！！面舵いっぱい！！」

「おもーかーじー！！」

伊25潜水艦はタラントから離れ始めた。

電探が捉えた駆逐艦らしき艦につかまってしまえばすべてが水の泡、この偵察作戦は失敗してしまう。（潜水艦乗りつて、思ってたよりも大変だわ…… 本当にお風呂つてなにそれみたいな感じね、しかも半分ぐらい男でなんだかやらしい目で見られているような感じがするし）

「もどーせー！」

針路をマサール島方面へ向けた伊25、その中で水蜜はそう文句を頭の中で言っていた。

「よーそろー！！！！」

その頃、ロマーニヤ軍は……

「不明艦、針路を北西へ、逃げるつもりです」

「艦長、どうでしょうか？相手は潜水艦です。ヘッジホッグを用いて撃沈しましょうか？」

「……いや、帰投する。どうせ幻想国の潜水艦だろう、まだ戦争するには早すぎる」

「了解」

「よし、母港に引き返そう。万が一という事があっても島にいる奴らにやらせればよい」

この時、幻想軍とロマーニヤ軍が手を交える事はなかった。

しかしロマーニヤ軍は相手の潜水艦を幻想軍のものとするでにわかっていた。もちろん正確ではないが。

この艦長の感はあたっていた。

実際に幻想海軍所属の潜水艦である、その潜水艦はというとなんとか母港への帰投に成功し海軍軍人達が軍港までかけつけ、乗組員達を歓迎した。

「村紗少佐、どうだった？」

つただいさ

「津田大佐ですか、ええ。思っていたよりも無防備で、最後はロマーニヤの駆逐艦に終われましたけどそれまで結構時間がありました」

「つという事は潜水艦による奇襲攻撃は可能という事ですな」

「ええ、おそらく」

ロマーニヤ海軍が思っていたよりも無防備である事はすぐに海軍上層部にも知れ渡る、畏かもしれないという意見が多数であったし警戒するに越した事はないので結局は警戒を厳とせよとの事になったのだが今回の偵察でタラントがどういう所かという事と潜水艦による夜間に奇襲攻撃は可能である事がわかった。

一方、翌日ムツソリー二は……

「幻想海軍の潜水艦が!？」

「正確ではありませんがおそらく」

「するとマサール基地にいる潜水艦のうちの1隻か……マサール島は確か、今度の聖戦で攻略予定だったな？」

「はい、一月島への足がかりとしてマサール島とモホール島は占領予定です」

「つつふふ、今にみている幻想国、一時は同盟を結んでいた事、そしてタラントに潜水艦で侵入した事を後悔させてやるぞ、つつふふ」

両国の対立はさらに激化する。

一方で幻想郷や地底などでも、この戦争とは関係のない、別な異変が起ころうとしていた。

第四話 タラント偵察（後書き）

御意見、御感想等お待ちしております。

第五話 大異変の予感

7月20日……

この頃になり、ようやくつきから送られた月人がどこにいるかが判明した、それはなんと迷林市であった。ここは確かに迷いの竹林に近く着きからつてきた僅かな月人も住んでおり月人はそう珍しい存在ではなかった。

ここ、迷林市に駐屯する兵士は総人員3000人と1個連隊に過ぎない。

対して月人グループは1万近いとの噂でありこれでは人員不足であった、そこで幻想軍は安藤大佐率いる安藤支隊5000人を派遣、迷林市の警備が固められる事になった。

「各員、トラックに乗れ！！」

森近自動車は4年前に開発した森近AB型トラックに兵士達が乗り込む。

「な、なんだ？」

「く、クーデター！？」

車両の数に圧倒された国民は思わずクーデターではないかと思うものすらいたと言う。迷林市に突入するとそう思う人々はさらに増えた。現在迷林市は人口120万、同じく人口が90万の京都よりも多く幻想国最大の都市であり政令指定都市であった。

仙台より都会で昨年幻想国初の地下鉄、迷林市営『南北線』が開通、車両は営団500形電車を模したもので今年3月に開通した帝都鉄

道『南霞線』と直通運転を行っているとか。
市電も延長、ラバウル王国との貿易の要衝で街中でもラバウル人は
良く見かける。

それだけではなく東京のように中央に集中しすぎないようにという
事でここ迷林市は第2の幻想経済の中心地であった。なのでラバウ
ル人のみならずアメリカス賢イングランド人など様々な国の人間が
普通に街の中を歩いておりそれらは決して珍しい光景ではなかった。

ここに住む著名(?)な人は宇佐見蓮子、メリー、清二、さらに楽
だからという理由で妹紅も住んでいたりする。さらに永琳は自社の
本拠地を迷林市に構え幻想国はおろか世界中に展開させこの会社が
開発したいいわゆる「すごい薬」は世界中に出回り薬という一つのも
のだけで世界を支配しようとしていた。

竹林内にはてあやうどんげ、輝夜などお馴染みのグループもお馴染
みの「永遠亭」に住んでいる。

幻想国最大の都市、迷林市は奇跡の大発展を遂げた。幻想国東部に
は迷林市や京都には少なくとも260万人という人が住んでいると
いう、もちろん他の場所も人口増加と同時に発展していき外洋諸島
すべてには12万人が住み、さらにほとんどが外洋諸島の住人では
ない海軍軍人も入れれば40万を越える。

そして今まで軍の施設があるだけでほぼ未開であったが西幻想国と
の国境にある上新幹線も開通し空の便も活発である千鳥市は人口3
0万人にまで成長していた。

この日の夜……場所は変わって妖怪の山、軍工廠。
ここでも異変が起こるかもしれないと不安にさせてしまう、異変の
予兆が起こっていた。

夜間になると大トンネルから怨霊が時々でてきて主に夜間に周辺の
人間や妖怪に迷惑をかけるという、1カ月に1人は魂を奪われ二度
と動かないという事もあるらしい。

「……………」

にとりは1人、外に出て風景を眺めていた。

警備も兼ねて気晴らしの散歩であるが、夜の妖怪の山はまた雰囲気
があつていつオバケが出てくるんだろかと期待させてしまうよう
な雰囲気であつた。

「あらにとりさんお久しぶりですね」

「あ、貴女は早苗？」

突如にとりの背後に現れたのは東風谷早苗であつた。

風神の湖にホテルが出来てそのすばらしい風景である事と外洋諸島
との連絡路に近い事から春夏秋冬、常時人々にぎわっていた。も
ちろん幻想人だけではなく世界中の人々がこのホテルに宿泊、その
際に早苗の守矢神社に参拝する人が多くなり彼女も当分はここでや
つていけそうと考えている様子であつた。

「今日はお2人は？」

「お酒の飲みすぎで…お腹出して寝てるわ」

「はは、2人らしいかも」

神奈子と諏訪子は今も守矢神社に住んでいる……っというのもあたりまえであろう。表では神奈子、正式は諏訪子が祀られているわけだから。

「ところで、最近地底から怨霊が来ているらしいけれど、どうなの？」

「うーん、うちの軍工廠には現れないわねえ、まあ河本達が私の知らない所で戦って撃退しているのかもしれないけど」

「き、近代兵器って霊に通じるの？」

「時と場合によつては……らしいね。だから冥界は慌ててるの」

つい最近の研究によればたとえ霊でも時と場合によつては近代兵器でもダメージを与えられるらしくもしやられてしまえば死ぬ事はないが霊としては消えてしまい、あの世でも存在しなくなってしまうのである。

その時と場合だが相手が人間の場合は通じないようで妖怪でも一部、天人の場合は通じるという。人間や一部の妖怪なら効果をあたえたとしても何度でも霊は襲ってくるというが天人の場合は近代兵器を用いる事によつて霊の存在を消すことができる。これは近代兵器の力によるものではなく天人に働いているなんらかの力が影響しているものと幽々子は説明している。

つまり、霊にとって最大の敵は天人であり天人を相手にすればたと

え霊だとしても敗れてしまう。霊は通常攻撃が全く効かない無敵の存在というわけではないのだ。

その為幽々子は近代軍隊の創設を行うことにした。

最初是否定的であったが部下や幻想国などの働きかけにより決断したそうだ。

冥界は高い工業力を誇るロマノフの支援により、冥界に集まっている戦死した兵士の霊による軍隊を編成して来るべき対天界戦に備えて軍備を拡張していた。

ロマノフの支援を受けている為兵器は外の世界でいう旧ソビエト製の物が多い、陸軍では銃ならばPPSh-41短機関銃など、戦車ならばT-34-85やIS-3が配備され一方の空軍でもyak-9PやLa-11などのソ連機、ライデンブルクのオリジナルE.V-1戦闘機やスパシーチエリ重爆撃機が配備されていた。

さらに最近になって流石に大戦中の兵器ではこの後すぐに力不足になるだろうと戦車部隊には最新鋭戦車T-54が配備され始めさらにライデンブルクで開発中だったmig-15も実戦配備され一部の防空隊に配備されていた。

冥界軍は文字通り元兵士の霊を集めて創設されたのだが錬度が低く天界軍と真正面から戦えるほどの火力もない、力となるのは数と高い工業力、そして豊富な人的資源とバックの同盟国のみである。

幽々子も次の戦いで戦死者が軍民合わせて1000万を超える事を覚悟していた、一方で天界はというとそんな冥界を過小評価しており現在の陸軍総兵力700万のうち300万を天界へ侵攻させ1年で決着をつける計画を立てていた。独ソ戦の再来のような戦いが予想された。

にとりも自分の下にいる技術者を冥界へ派遣している身でその実状をよく知っているお方である為、冥界の存亡が非常に心配であった。

「…最近、変だよね、何かするのか迷林市に大量に軍が移動したり、博麗大結界に少しだけ異常が見られるようになったり、地底から霊が出始めてきたり……なにか、予想されているロマーニヤと天界との開戦以外にあるのかな？」

ここの所博麗大結界にも異常が見られるようになってきている。その理由は幻想郷の急激な発展にあると多くの者は見ている、その為秘密裏に大結界問題対策委員会が設立され異変に備えていた。なおこの委員会の委員長は霊夢であった。博麗の巫女として全力で取り組む必要があるのだ。

「わからない、ただこの幻想郷で何かが起こっているのは間違いないわね。そうそう、私は明日から冥界の視察に行くから」

「へえ、よりによって冥界？」

「ええ、もちろん私以外にも総理の側近とか、第1師団の師団長様とか第1航空団司令官の司令官様とかその他軍の参謀や諜報機関の人間とか」

「って第1師団の師団長様とか第1航空団司令官ってアリスと織本さんだよな？」

「よく知ってるね…ってそれぐらいは皆知っているか。2人とも前大戦の英雄みたいな存在だからね」

アリスはライデンブルク攻略戦や天界戦で師団を率いてほかの部隊よりも少ない損害で大いに暴れ回り戦果を挙げ海斗も開戦から戦い続け終戦時には大佐になり航空隊司令官であったのに自ら戦闘機を操縦して戦うほどの男であった。

アリスも海斗も前者は陸軍、後者は空軍から、そして一般の国民から前大戦の英雄としてもてはやされていた。最も2人にそんな気はないが。

「まあ、がんばってね」

「うん、河城にとり！全力をあげて視察に行って参ります！」

「それを私に言っても無駄だけどね」

これまであまりスポットがあたらなかった天界、はたして現在どのような発展を見せているのか、そして妖夢達は元気なのだろうか。

この翌日より約1週間の冥界視察が開始される。

第五話 大異変の予感（後書き）

御意見、御感想等お待ちしております。

第六話 冥界へ！

冥界はかつての異変がきっかけで拡大が行われ非常に広大な敷地を有する場所である。60年に一度霊がやってくるらしく中には第二次世界大戦の戦没者達の姿もあった。

日本兵を始めドイツ兵、ソ連兵、アメリカ兵など世界中の国々、陣営も関係なく戦没者がここに集まっていた。幽々子は最近天界に対抗すべく彼らを召集して近代軍隊を編成した。

高い工業力を誇るロマノフが支援を行っている為服装は少しロマノフ風つまりロシアっぽいで使用兵器もロマノフ（ソ連のもののかかつてのライデンブルク）のものとはほぼ同一である。

おまけに寄せ集めである為錬度までソ連並である。

戦没者の数的に元ソ連兵の数が多いという理由もある。

死後の世界とは第二の故郷、彼らは存在自体が消えるのが嫌なように自分の為にも戦う気は満々であった。つまり錬度は低くとも士気は高い、ライデンブルクよりは遥かにマシという事であった。

その天界へ今回、幻想国の者達が視察へ行く事になった。視察目的は来るべき開戦へ向けて、現在の冥界の状況をこの目で見て知る事である。それによっては戦略を変更する必要があるからだ。

この日、妖怪山空軍基地には数名の人間、妖怪が集まった。まず最初に来た車からは海斗が降りてきた。

「あ、久しぶりね海斗」

「元氣そうで何よりだ」

久々の再開、2人は握手をした。その後ろで参謀長のフランコ・ルツキー二中佐がかわいい女の子を見る目にとりの事を見ていた。

その後、さらに車が走ってきて三千院首相の側近の1人である川島^{かわしま}
^{ともあき}知章、もう1人の側近である早川^{はやかわしゅんすけ}俊助、陸軍中将アリス・マーガト
ロイド、第1師団参謀長^{どいたくま} 土井卓磨大佐、部下の参謀である近藤^{こんどう}
^{かつまさ}勝正陸軍中佐、「東機関」指揮官、臼井^{うすいりょうま}龍馬陸軍少佐、その他護衛
戦闘機隊には武藤金義空軍少佐と朱鷺子空軍兵曹長を始め6人。

この9人（護衛機隊6人を除く）が冥界へ視察に行くメンバーである。
る。

「海斗は冥界には？」

「ある、戦闘まで体験して我が軍最初の戦死者が出た場所でもある
よ」

「ああ、小谷さん。あの人が建軍以来最初の？」

「ああ、あいつが最初の死者だ」

あの事件の事をまだ海斗はしっかりと覚えていた。
思えばこの世界に来て始めての空中戦であつた。

「航空機の用意ができました」

「了解……って」

海斗はそこに見える航空機を見て用意が出来たと伝えにきてくれた男に少しばかり文句を言った。

「移動に爆撃機って？」

空軍が用意したのはス式重爆撃機であった。

確かに15人乗りの大型機であるがただの移動に使うのは少し窮屈な機体である。

「はい、速くて長く飛べて丈夫で比較的安全……… といったらあれでしたので……」

「なるほど、まあいい。一式陸攻よりは遙かにマシだ」

ス式重爆撃機はなんでライデンブルクに造れたのかわからないほど優秀な機であった。

流石にジェット機の前では劣勢だがそれでも幻想国は爆撃隊の主力として本機を3年前まで生産し使い続けている。昨年からはジェット化、航続距離延長改良を施したス式噴進重爆撃機を生産し置き換えを行っている。

最高速度は982.3km/hまで上がり近代化によって搭乗員の数を15人から10人へと減らすことにも成功した。ただし離陸に3km近くも必要とする為相当整備された滑走路が必要であった、その代わり長大な航続距離と恐ろしいほどの爆弾搭載量を誇っており登場時期からジェット化したとしても旧式化しておかしくないはずなのに未だに第1線で通用する力を秘めていた。

幻想国の技術者はこれの元であるスパシーチェリの設計主務者、アレクサンダー・ペトロヴィッチ技師を尊敬していた。こんな怪物のような航空機を開発したのである。

6 発の発動機が調子よく始動する。
滑走路へ行くとフルスロットルになり十分な速度まで上がればス式
重爆撃機は空に浮き上がる。それに続く形で武藤率いる護衛機隊（
瑞雷 6 機）が離陸した。

7 機は冥界目掛けてそれほど長くはないフライトを続けた。
「高い所にいるよりには随分楽ね」

そう言うのはアリスであった。
5000m を越える大気の希薄な場所なのに彼女は楽であると感じ
ているようだ、もちろん全員何事もなさそうにしている。

疑問に思っているアリスに対し、海斗はその答えを言っただけだ。

「与圧されているからだよ」

「与圧？ なによそれ？」

「圧力を与える、今回の場合は航空機の内部を一定の気圧に保つこ
とだ。室内全体が加圧されているから高度 1 万でも機内ならどこに
いても生きていられるぞ、一応な」

「ふん、常時一定の気圧を保っていられるのね。よくはわからな
いけどすごいんじゃないの？」

「そうだな、ただ常に同じ気圧を保つ事はできないから降下する時
とかは注意したほうがいい、目とか耳とか痛くなるかもしれないぞ」

「ふん」

海斗は簡単に与圧について説明をする。

しかし彼はそんな事よりもライデンプルクに与圧されている航空機を造れたことが信じられず自分がペトロヴィッチ技師に質問したいぐらいであった。

「これより冥界に突入します」

やがて外の風景が変わり、冥界の暗い風景が広がる。

機長と副操縦員の表情が一変、始めて見る冥界の姿に圧倒されていた。

「これが……冥界……」

7機はその後、白玉楼はくぎょくろう付近にある冥界防空軍の基地に着陸、彼らを出迎えてくれたのは幽々子自らであった。

「お久しぶりであります」

最初に冥界に降り立った海斗は幽々子に対して敬礼を行った。

「こちらこそ、皆様お元気そうで」

「そちらはどうですか？」

「妖夢が相変わらず元気がなくて、まあ仕方ないといえば仕方ないかもしれないけれど」

「そうですか」

妖夢は前大戦では軍人として戦ってきたもののあの正確から精神的にダメージを受けて軍から退きここ冥界に戻っているのだが以前よりも元気がないのだという。

「…ん？」

海斗はふと後ろを振り向くと臼井少佐が幽々子から離れるようにそこそと移動していた。

「どうしたのですか臼井少佐」

「うつ！いやあ私は、その西行寺さんがなんというか……ひ、人を死に導くという噂を、ほら、自分東機関の指揮官ではありませんか。そういう情報が以前入ってきたのでありますよ」

「そ…そんな事ですか……」

臼井が幽々子を避けようとするのも幽々子の能力と前科を恐れての事であった。

幽々子は人を簡単に死に導く能力があり亡霊となった後では命を奪うことすら楽しくやっているのだという。そんな事は皆さんご存知の事であるが臼井少佐は今まで知らなかったため諜報活動の際にたまたま入手たこの事を聞き、それ以降冥界にある西行寺幽々子をひじょうに恐れるようになってしまった。

海斗を含む多くの者は呆れた、少なくとも今はそんな事をしないからである。

しかし今もすると思っている者が海斗のすぐ隣にいたのだが…

「えええ！？今は人殺ししないの！？」

それは技術者であるにとりである。

にとりの驚く様子を見て、幽々子は少し彼女をいじめてみる事にした。

「奪ってあげようか？貴女のお・い・の・ち！」

「ひええええ！！！ごめんなさいごめんなさい！！！」

「どうか私の命は！！東機関が無くなったらＴＵ全体に影響が！！」
にとりに対しての言葉なのに何故か臼井までにとりと一緒に謝っていた。

「冗談よ、冗談。少なくとも『今は』やらないよ」

（…じゃあ明日とか明後日とか未来ならやるのか…やばくないか？）

『今は』という何気ない言葉に海斗も背筋が凍る。
幽々子の事だから冗談でも本当に聞こえるのである、だから余計皆恐れているのである。

しかし、今の所はそんな事をするつもりはないそうだが、天界との戦いが近いという理由もあるが。

こうして、多少の混乱がありながらも幻想国の冥界視察は始まったのである。

第六話 冥界へ！（後書き）

御意見、御感想等お待ちしております。

第七話 冥界視察

海斗達は白玉楼を会合地点としていくつかのグループに別れた。政府の人間である川島、早川、東機関の臼井は官庁街のほうへ、陸軍のアリス、土井、近藤は近くの陸軍基地へ、海斗とにとりはそのまま白玉楼の中に入った。

「相変わらずかわりませんな、この屋敷は」

「そうそう変わるものじゃないわ」

しかし建物など8年も経てば細部は変わってしまふ。

存在していれば嫌でも老朽化してゆく、ましてや白玉楼は築何年かは不明だが総統前から存在するお屋敷であり汚くなってもおかしくはないはずなのに以前、何年も前に見たときと全く変わりはなかった。

「ところで何か飲む？」

「お茶さえあれば自分は」

「じゃあ私はりんごジュース」

「了解…う。ち入りの水にお。っこ…ぐふふ」

何か企む幽々子、にとりと海斗は恐怖を感じた。

「まっってください幽々子さん！！絶対おかしいですよ！！そんなキヤラじゃないでしょ貴方！！」

「そ、そうですよ、もちろん冗談ですよ。」

「当たり前じゃないですか」

海斗の答えには笑顔で答えた、しかしその笑顔が逆に怖く見えたのは海斗もにとりも同じだ。

その後、3人は重要な話をする。異変の事もそうだがなにより重要なのは対天界戦についてである。海斗は直接幽々子から冥界の現状を聞きにとりも冥界の技術レベルについて幽々子に聞いてみた。

冥界は現在、少なくとも1950年前後のソ連レベルの技術がある。幻想国の水準から見れば特別高いわけではないがなんとって冥界は質より数なのでこれで問題はないのかもしれない。

「…そうですか。ところで西行寺さん、もし天界が攻めてきた場合どのような作戦で戦う予定なのですか？」

「そうね、資源は以前幻想国に言ったとおり冥界と幻想国の分があれば足りる、工場の疎開は完了、軍の話によれば冥界軍は広い平原での戦闘が得意、つまりここから北西に80kmの地点にある夜桜平原が冥界における戦いの勝敗を決める場所だと思っわ」

「会戦を仕掛けるのですか？」

「ええ……それに私戦略家じゃないしそれに軍だって私はあまり信用できないからどうなのかわからないし、失礼だけど織本少将、私にそんな事聞かれてもちよつと困る……って事」

「なるほど、ではもし負ければ？」

「決まってるわ、幻想国に逃げる」

「…我が本土が決戦場と？」

「そういうわけですね」

やはり最悪の場合は幻想国本土決戦を行う事になる。

もちろん幻想軍だってまったく対策を建てていないわけではない、それこそ根こそぎ動員を行って最後の決戦に挑むのである。作戦名はやはり『決号作戦』であった。

「…まあまあ心配しなくても、絶対冥界で敵軍を食い止める……そういう自信を持って戦うのが戦争じゃないかしら？」

「うん、最初から負ける気であればやってはいけないでしょうな」

「いざという時はこの私が…天人の命を………」

「自分もいざという時は自ら航空機に乗り敵陣に突っ込む覚悟です」

「なるほど、送られてきたのが貴方である理由がなんとなくわかった。ただの軍人じゃないって事ね」

「自分は国家将校も兼務しております」

「お互い頑張りましょう」

海斗と幽々子は握手をする。

死人でありながらも一応触れ感触もする幽々子、その手はやわらかく、そして死人であるにも関わらず暖かい感じであった。

海斗はその後2歩下がり幽々子に対し敬礼を行った。

「……ところで、この後仕事は？」

「防空軍の基地を、こちらの河城にとりは近くの研究所へ」

2人の仕事はまだ終わっていない。

部屋を出て2人は次の仕事場へ行くべく玄関へと向った。

「あゝあ、結局私が来た意味って」

「これからじゃないか？」

「そうね…はあ…あの人が苦手、冗談きついし……」

「まあまあ、確かに変わった人だしそもそも死人だけど決して悪い奴ではないだろう」

それは、海斗のいう通りなのかもしれない。

やがて2人は階段を降り始める、2階まで降りると地上が近く見える、2階も怪しげな雰囲気放っていたが1人それを打ち消すほどのかわいい子が歩いていった。

「奴は」

「あれみよんじゃないの」

「みよ、みよん!？」

「あれ？知らない？巷じゃあの子みよんとも呼ばれているって」

「ほお」

妖夢はそれこそ戦場の華であるかのような活躍をしていた為有名人であり見た目のかわいさから人気もあった。なのでみよんとも呼ばれているが元々みよんは彼女が発した謎のセリフである。

「元気なさそうだねえ」

「そりゃあ戦場において精神的に傷ついたらなかなか治らんぞ？」

「よし」

「あれ？おい仕事は？」

「後で！」

そう言うてにとりは海斗を差し置いて妖夢の後をつけていった。

海斗はしょうがないと溜息をつき、そのままにとりをおいて外に出て最寄の冥界防空軍の基地へと向った。一方にとりは妖夢が部屋に入る所を目撃、部屋の場所がわかった所でノックもせず彼女の部屋へと突撃した。

「うわっ！！びっくりした……誰？」

「うっ、ひどいわね忘れるなんて。河城にとりよ」

「に、にとりかあ」

妖夢は正体を知りほつとした様子であった。

にとりは妖夢のベットに座り、妖夢の顔を見つめた。

「ちょ、勝手に人のベットにー！」

「いいじゃないの、まあトラウマなのはわかるけどいつまでも気にしていると本当に病んじゃうかもしれないわよ？とりあえず元気でしたら？」

「そんな事言われても…なにもしなくても目に浮かぶ…：やつぱり外来人って最低、あいつらの常識で物事を考えると本当に危険な気がする。貴女はよく外来人に兵器なんてものを提供したり…：とにかく協力できるわね」

「前までは貴女も協力していたじゃないの？私は結構楽しんでやってるけど？外来人が使うものは複雑で造るのが楽しいし」

「……」

妖夢は戦後、反外来人を唱えるようになっていた。

河童同様高い技術を持ち、そして河童にはあんまりない野望に満ちている外来人こそ幻想郷やその他、それどころかすべての世界の平和をぶち壊しているのではないかと考えるようになったのである。

…っと思うのも仕方ないかもしれない。ちょっと引き金を弾けば何人が死んでしまったりする近代戦を経験したし、その近代戦を今までなかった世界に持ち込んだのも海斗を始めとする外来人だ。

「大体…こんな所に生きた人間が来るのもどうかと」

「って私は河童だし、しかもさっきの話題と全然関係ないような」

「そ、そうね。とにかく私は外来人を憎む。もう死んだボグスロフスキーだって外来人だし…天界のユルゲンだってあんな事考えられるの外来人だけだよ…」

ユルゲンは元ナチス党の黨員、自らやりたい事を果たすためにナチスとは縁を切りあえて天界を利用している。確かに彼は外来人で、考えだつて幻想郷やここ冥界の者だつたらそこまで広い事は考えないだろう、妖夢の予想は正解であつた。

「外来人は楽と同時にそれよりももっと大量に悲惨という言葉をもたらす……」

「妖夢……何もすべての外来人が悪いわけじゃないと思う。中には極悪人もいるでしょうけれど少なくとも幻想国を動かす者の中にはそんなに悪い奴はいないと思う」

「本当？……嘘を言つと殺すよ？」

「嘘かもしれないし本当かもしれない、微妙だから殺せない」

「っ！」

にとりは妖夢の頭の上に手をおいて頭を撫で始めた。

「ああ、感触いいかも」

「ちょ、触るな！」

妖夢は恥ずかしそうにそう言つて嫌がつた。

しかし心の中では別な事を考えていた。

（……言われてみれば、こっちの妖怪や人間、それに霊も同じで極悪人もいるけど中には善人も……外来人もそうなのかな？）

妖夢はこの時から徐々に考え方を改めてゆく……

この後、各員冥界を視察、1週間が経過した所で再び式重爆撃機

に乗り込み冥界を去った。

さて、この1週間の間に幻想国ではほぼ同時に多数の異変が起っていた、次回の時系列は今から1週間前に遡る。

第七話 冥界視察（後書き）

御意見、御感想等お待ちしております。

第八話 迷林事変

時系列は今から1週間前に遡る。

丁度その頃、迷林市が戦場になろうとしていた。

いよいよ月からの使者達が決起をおこうとしていたのである。

「我々の目的は迷林市を確保、これによって竹林を確保しこの者達の暗殺を行う、続いて京都に進撃し要所を占拠、幻想国を我々の物とする。なにか質問は!？」

月人達はそれで納得しているようであった。

「よし、戦闘始め!!」

ここに、迷林事変とよばれる戦いが勃発したのである。

最初に目標にされたのは迷林市の庁舎であった。

正門では幻想兵が警備にあたっているものの月人はその目を盗み、庁舎の中に侵入し事件爆弾をセット後、さっさと逃げていった。
1分後………

グワーン!!!!

「!」

「何事か!？」

幻想兵達は爆音を聞き建物の中に入る。

そこにあつたものは死体と負傷した者、そして爆風で舞った加味何かの残骸であつた。しかし爆弾自体大した大きくもないものだった

ので庁舎は機能を失う事はなかった。

その点からこの庁舎爆破は失敗といえる。

「ついにやったか？」

「やられたようですな……」

そう彼らが呟くと後ろから上官が現れた。

「おい！！すぐに来い！！中央通りに武装集団が多数だ！！」

「了解！！」

「い……いよいよか……」

その頃、中央通りでは文字通り虐殺が行われていた。

武器を持たない市民達を月人は銃撃してゆく。「月人よ出て来い、でなかったら市民の命はない」と叫びながら月人達はまるで狂ったように銃で撃つていった。

銃といっても幻想国で使っているような古臭いものではなくいかれもそれらしい近未来的な銃であった。

…っとはいってもレーザーとかではなく銃弾なのは変わらないが。

「奴らか！！！」

パン！パン！

タタタ…

ドド…ドドド…

月人と幻想軍はすぐさま交戦状態に突入した。

それと同時に市民にすぐに避難するようにと誘導を行う、とても手際がよく、事件に巻き込まれた外国人は非常に錬度の高い軍隊だと評していた。

「あんな後れた奴らに負けるな!!!」

「どうでしょう？隠密である為にはこの銃以外持ってきていませんから…」

「だ、大丈夫だ!!!奴らが使っているのはいいところ地球でいう第二次大戦レベルの銃さ!問題ない!」

彼らはなるべくバレないように、そして身軽になるために軽装備しか持っていない。

最も幻想軍もこんな所に戦車を持つてくる事はできないのだがあれなら持つてくる事ができた。あれとは迫撃砲である。

幻想軍は多世界大戦では迫撃砲を使用していなかったものの戦後余裕が出てきたため、五式十二糎迫撃砲というソ連の120mm迫撃砲PM-38に新しい素材を用いるなどの改良を加えただけの迫撃砲が現在配備され主力となっている。

幻想兵は素早く迫撃砲をセット、砲身に砲弾を入れ兵士すぐに味方に新しい砲弾を貰い同じ事を繰り返し続けた。その間に何十という砲弾が放たれ、銃しか持っていない月人達を苦しめた。

「敵の迫撃砲をどうにかしろ!!!」

「くそ、奴らあんなものをすぐに展開させるほどの能力が…」

「……違う、我々の行動は敵も知っていたのでは……でなかったら迫撃砲が到着するのが早すぎる」

迫撃砲は10門近くが並べられ、街への被害を気にせずただ決起した月人を倒すべく砲撃を続ける。なお幻想兵の服装は基本的にはあまり変わっておらず相変わらず日本陸軍風であった。

しかし流石にこの先もこの服装……というわけにもいかない、回りの軍隊は日に日に進化しているのに自分達だけそれらには劣る大戦中の服装でいるのは後れた国というイメージを植え付けさせてしまう。なので現在、服装を自衛隊の物にしようという計画があるらしい。

こんな反撃を受ける前に迷林市の要所を占領する予定であった月人達は迫撃砲の前に苦戦、さらにもう少し後になると九〇式機動野砲も到着、月人達に砲撃を開始、歩兵も到着したトラックから降りて戦闘配置につき月人との戦闘を始めた。

一方、商店街に突入しようとする月人部隊はまだ抵抗を受けていなかった……しかし彼らも1人の少女の手によって血祭りにあげられる。「なんだ？お祭りか？」

魔理沙であった、迷林市にて薬品を買うべく本日この商店街にいたのである。

やがて彼女の前に武装している月人グループが到着した。

「な、なんだ！？」

月人達はいきなり発砲し人々を殺していった、そこから魔理沙はまぢがいなくあれは敵だろうと判断し、倒すだけだろうと考えた。

「しょうがねーな………恋封！！」「マスターパーク」！！」

魔理沙の代名詞。超極太レーザーを発射して敵を殲滅する……っと
某wikiにはあるがまさにそうである。魔理沙の必殺技といえば
これだろう。

眩い光を発生させながらとても太いレーザーが高速で敵に向って飛
来、あまりの衝撃に建物は無事でも品物が横に、つまり店内にぶつ
飛び後でパニックを起こすほどであった。

月人達はこの必殺技には耐えられずあっさりと敗退してゆく。

しかし後方からも敵が来る事に気がついた魔理沙は威力は劣るもの
の別な技を使った。それは魔符「スターダストレヴアリエ」である。
周囲に星屑をばら撒きそれで月人を攻撃、威力はマスタースパーク
に劣るものの広範囲に攻撃でき地味に痛い攻撃である。

魔理沙は1人で大勢の月人を撃退してしまい、最後の生き残りで魔
理沙を殺そうと銃剣突撃してきた月人も魔理沙に葬られてしまう。

「天誅！！！」

「……ていつ！！」

魔理沙は顔を赤くしながらスカートの中に手をつ込みある物を取
り出す。

それを思いつきり月人のほうに投げた。

「な、なんだ……？……！！！！」

突如、小規模ながらそれは爆発した。

魔理沙が帽子やスカートの中に隠し持っている危険物『魔法の燃料』
である。

投げたら爆発するようなものもあるという、今回魔理沙が投げたの

はそれだ。

爆発により月人は死にはしなかったものの火傷を負い先ほどのような身動きはとれなくなる、そこへ突然決起して人々を殺していった月人を憎む一般市民達が襲いかかり結局この月人は帰らぬ人となる。「ふう…また魔法の燃料が1個なくなっちゃったぜ、帰ったら作らないと」

魔理沙はそう言って商店街から去っていった。しかも申し訳なさそうであった。

なんとたつてこの戦闘で商店街の一部が、建物は無傷でも品物が床などに散乱して滅茶苦茶になっていたからだ。さっさと逃げたほうが勝ちであると彼女は思っただろう。

一方幻想軍も果敢な攻撃を繰り返し戦死者123人、負傷者89人を出しながらも月人達と戦い続け、夜になって月人の総司令部へ1個小隊が突入し司令官を捕らえる、翌日には戦闘停止命令が下り戦闘は終結、幻想国を甘く見すぎていた月は作戦に失敗、しかも今回でさえバれてしまったのだからどうすればよいのかわからなくなってしまう。

一方の幻想国の被害も決して軽微ではない、軍民合わせて400人近くが死亡、全壊する建物はなかったものの半壊する建物が若干、窓ガラスが割れるなどの軽微な損傷をうけた建物は何十とあった。この2日の戦闘は『迷林事変』と呼ばれ、戦後幻想軍が体験した初めての戦闘でもあった。

月が起こした異変として報道され後の世にも語り継がれる事になるが異変はこれだけではなかった……

戦闘停止のその日の夜に妖怪の山方面にて異変が発生する。
さらに……一番やばい異変かもしれない、博麗大結界に異常が見られる。

第八話 迷林事変（後書き）

御意見、御感想等お待ちしております。

なお明日より数日ほど作者、ちよい用事の為次回更新は土曜か日曜になりますのであしからず。

第九話 怨霊異変 1

その頃、この妖怪の山ではいつもどおり、人間も妖怪も何も変わらない日常を送っていた。たまには外来文明を排除すべきという頭の固い妖怪が騒いでいる事もあるのだが建国から数年、年月が経つにつれてそれらの暴動は見られなくなっていった。

いい加減頭の固い妖怪も慣れてきたのである。決して好意的とはいえなくとも普通に生活するぐらいなら許せるレベルになったのだらう。

そういつたものが激しいのは排他的であつた天狗だ。天狗は今でさえ外来人が持ってきた文明を信じず旧来の生活を続ける頭の固いものもいる。

さらにそれを他人に押し付けようとする者や観光客を襲うものもあり幻想国も天狗が住む集落への観光は極力避けるようにと国内だけではなく世界各国に注意している。

（いつでも自己責任で精々病院に運ぶぐらいだとか）

そんな天狗達であるが一方で情報を一般国民に伝える重要な役割を担っている。

たとえば国内発行部数が最高である『文々。新聞』はまさに天狗である射命丸文らが執筆し発行している新聞である。ただし社員には沢渡などの人間も存在している。

しかも文は最高責任者でありながら自らテレビに出ていたりし、そのかわいらしい見た目から絶大な支持を受けている。一方新聞のほうも評価されている。

右にも左にも特に偏ってはいなくとも中立的な新聞であり執筆している者の知識も豊富で特に間違いがないからだ。そこが他の新聞社とは違う所である。

しかし幻想国の場合、日本と違うのは右も左も愛国者で国の事を考えているという所である。なので戦時になったり大異変が訪れたら右も左も固まって喧嘩しつつも協力しあう、それが証明されたのは大幻想戦争であった。

あの時は国中が一つになってライデンプルクや天界に立ち向かっていた。亀梨元首相も「あの時が我が国で一番誇れる瞬間だった」と回想録で語っている。

さて、この日、文達は例の迷林事変の記事を執筆していた。
「え〜っと……………よし！できました！！」

女性社員が文にその記事を渡す。

「う〜ん……………多分完璧」

「た…多分ですか？」

「堅い事は気にしない！いつもそれで大うけしているでしょ？」

「まあ…確かにそうですけど」

「じゃあ早速夕刊の為に発行を」

「は、はい！！」

ちなみに天狗は以前から印刷機類を持っておりここ最近はその数が増えて楽になったぐらいでたいしたかわりはないそうだ。河童が住む場所に比較的近い事から天狗達は外から流れ着いたものや河童がつくったものを使って生活していた。特に新聞社はその恩恵を受け印刷機を使って大量に印刷していた。だから以前から新聞は出回っていたのである。

だからといって楽になったわけではない、むしろ仕事は増えて忙しくなっている。幻想国の人口が急激に増え購読者が増えたからである。さらに電話に出る回数も増えていた。

「…です、はい、はい、はい了解しました。はい」

文は電話を切る。

「はあ、疲れた……まだ外みたいにパソコンが普及していないから大変だわ……」

外の世界であればニュースぐらいパソコンで見れるので購読数も減ってきているそうだが幻想郷においてはパソコンなんて国や地方自治体、企業、一部の裕福層、オタクぐらいしか持っていないわけで一般人の多くは新聞かテレビが情報源であった。

河童が造ったものや外から流れ着いたものなどが電器屋で売られており一部の家庭ではパソコンが使われていたりするもののそれでも外には及ばない、またスペックも外のものには劣っている。

ケータイも同様であるにはあるのだが完全には普及しておらず街中に公衆電話が沢山ある、さらにテレビだって一昔前のものであり薄くなくデジタルってなんですか？という代物であった。

ただカラーテレビではあり色はついているうえそこまで古いものではない。

しかし、そういったものはまだマシな部類だ。幻想国の場合車が昭和であった。現代のような車なんて未来の車であり流れ着いて来たものが博物館で展示されているぐらいである。

鉄道車両だって一部を除き国鉄時代のもので迷林環状線（幻想国唯一の環状線）を走る車両もウグイス色の103系電車である。

地方の鉄道はもっと悲惨で吊り掛け駆動方式の車両が走っていたり非電化でも今外では引退している車両までもが走っている。ただし鉄道ファンからしてみれば聖地である。

航空機に至っては軍用機は他国同様ジェット機になりつつあるが民間用の航空機は未だにレシプロ機であった。しかもアメリカス製の機体の数が多くDC-6などは幻想国の空でもよく見かける。

幻想製航空機は性能はよいものの大量生産向きではなくおまけに大量生産するほどの工業力も十分ではない為、TU加盟国が使用しているに留まっている。

艦船は一月島、マサル、モホール、紺碧諸島、レオニード島などにある造船所（一部は海軍工廠）で建造されたものと海外から購入した艦など様々なものがあるが民間用の艦船は概ね40〜50年代ごろのものである。ただし幻想国の艦船は電探類の質が他国のものに比べてよい。

軍艦は未だに戦艦が現役、最もこれは幻想国だけではなかった。たとえばハルシュタットやロマノフは艦艇不足から戦艦を現役にしておりロマーニヤもあまり積極的に参加せず機動部隊の有効性を熱

心に知ろうとしなかったため、未だに現役艦がある。戦艦の数なら多分一番現役数が多い海軍を持っている。

幻想海軍はほとんどの戦艦を予備役に回しているが巡洋艦の不足とそもそも幻想国の造船能力ではアメリカスみたいにいっぱい建造する事は不可能である為、やむなく戦艦を現役にさせている。挙句の果てにはおさがり艦艇をもらうほどであった。ただし戦艦は費用がかかるものの艦体が巨大でしかも丈夫でありミサイルを搭載すればそこそこの戦闘力を誇る。地上に対する艦砲射撃をするにも有効であった。

まだミサイルが完全には普及していない時代だからこそである。建物は雪に強く地震にもある程度耐えられるように工夫がなされている。それは幻想国は冬になれば特に千鳥方面で大雪が降り九州地方などの家では耐えられず、かつ地震もあるのである程度地震に耐えられる建物でなかったら阪神淡路大震災のような惨状になってしまう。その教訓を生かしすこしは丈夫になるように工夫されていた。…とはいってももの古い木造建築が大多数を占めておりこれで大丈夫なのやらと不安にさせてしまうような建物も少なくはない。

「はあ、何かいいネタないかな？」

さて話を戻すと文は最近大きな事件が希少でいつものように少しでもおもしろいネタを捜し求めて今日も夜中に歩き回ろうとしていた。

夜……

「はあ、仕事終わった……いや、仕事はこれから、ネタを探さね

ば」

文は支度を終えたらすぐに外へと飛び出していった。
…しかし平和な今の世、特に変わったことはなにもなかった。

「あゝあ、本当に平和ですねえ…むしろ暇になる」

戦後5年、文のような庶民には今の時代、何事もない本当の平和であると誰もが思っている。ただし各国の政府や軍部は束の間の平和にすぎないと認識している。

ただどちらにしてもあまりにも平和なのはむしろ危険である。暇になった妖怪達が異変を起こす可能性が高くなるからだ。今の所大異変を起こそうという野心を持つものにはいるが異変を起こせば最終的には軍と戦う事になりその軍と戦うには皆力不足で仕方なく従っているという感じである。ただ、誰も望んでなくても、妖怪が起こそうとしなくても、今異変は起きようとしていた。

ササッ！！

「?……うわっ！！！」

文は突然攻撃を受ける、天狗でも最強クラスの彼女は驚きはしたもののあっさりと攻撃をかわした。

「だ、誰!?!」

文がそう言つと攻撃を仕掛けてきた相手が現れた。その相手は文はおろか幻想郷に住む者達が一度も会った事がない一人の少女であった。

第九話 怨霊異変 1（後書き）

御意見、御感想等お待ちしております。

第一〇話 怨霊異変 2

「…何者ですかお嬢さん？」

文の前に現れた謎の少女は微笑みを浮かべていた。

少女…っといつても幼女に近い感じのその少女は熊のぬいぐるみを抱き白いワンピースを着用していて黒くそして綺麗で長い髪をしていた。

さらになによりもすごく不思議なオーラを放っていたのである。

いすみかわみなつ
「泉川深夏、半鬼半霊だよ」

「その半鬼半霊の深夏ちゃんが何のご用？」

「自分達の都合で条約を締結しておいて鬼に私達霊を封じ込めさせておきながら地底に妖怪を入れないという約束を破った地上の妖怪に復讐するの。だって私達ずっと閉じ込められてたんだよ？」

「…おお！！もしかして最近妖怪の山で起こっている殺人事件って！？」

「仲間、本当に封じられている時は辛かったんだから、私は半分鬼だからなんとかなったけど仲間はみんな閉じ込められちゃった……気持ちにはよくわかる。でも妖怪は約束を破った。じゃあ私達だって封じられている意味はない…だから解放してあげたの」

「おお！！これは大スクープです！メモメモ……」

文はそこから取り出したのかメモ張を出し深夏の発言をメモしてい

た。自分の話をあまり真剣に聞いていなさそうである文の姿を見て当然深夏はいいものを見たとは思えないわけで少し怒っている様子であった。

「…あの？聞いてるんですか？」

「えっ？はい！なんたって記者も担当しているのでお相手様のお話はばっちりきかないといけません」

「……とにかく、貴女達地上の輩は報復される運命…貴女も私の手で葬りさつてあげる……」

すると深夏は突然消え、突然文の前に現れた殴りかかってきた。

「！！！」

パシッ！！

文は間一髪で深夏の攻撃を受け止める。

「霊なのに肉弾戦？」

「ええ、白兵戦が得意なので………」

「ふーん…どうでもいいけど触れられるんですね？」

「ええ……魔力切れになれば最後は白兵戦…でも透き通ってしまつたら攻撃できない……だから攻撃を食らつた痛いけどその分長く相手と戦える…どう？」

「……残念ですねえ、そのやり方だと一つ問題があるわけですよ？」

文は瞬時に見切った。

触れられる霊など怖くない、軍隊でも対処が可能であると。しかも封じられていた影響で力が衰えているらしく一度設定してしまえば3日間は別な設定にはできないというのだ。

ただ問題は怨霊の数が多い事である。

しかしそれだけでそれを除けば幻想軍でも対処は可能だった

幻想陸軍……妖怪山駐屯地……

「くそっ!!」

ここではすでに戦闘が始まっていた……しかし機関銃や迫撃砲による攻撃で怨霊達はなかなか幻想兵の下にたどり着くことができなかった。まさに文の言う通りであった。

その文は今、深夏との戦闘を行っていた。

「えいつ!!」

「っ!!」

深夏のせい、戦いは白兵戦であった。

文はスペルカードを使って遠距離から攻撃をしかけようとすれば深夏は近づいてきて攻撃を行う深夏の動きは素早く文の動きについてこれるほどであった。

（っ…強い！こんなやつ、今までインタビューとかでいろいろな人達と出会ったけど始めて）

文は今まで戦って相手でも最強クラスかもしれないと予想した。しかし、相手は肉弾戦を得意とする。ならば文にも防御手段はあった。

(…仕方ない…あれをやるわ……竜巻「天孫降臨の道しるべ」！)

文が竜巻に包まれる。

「えっ？……きゃああああー！！」

その竜巻はたちまち深夏をも巻き込む。しかも深夏はフルヒットを食らってしまった。一端彼女は消えてしまいが突如として再び現れる。これは東方でおきまり、アレである。

「ぜえ…ぜえ…」

「あら？コンテニューしたのですか？」

「当然！当初の目的遂行の為に私はいくらでも蘇る！」

「なるほど、これは翌日のネタに使えそうですね、ふむふむ」

「うつ！うつさい！今度こそ…今度こそ！！」

「今夜は楽しめそうです…」

文は、某漫画でいうオ。ワクワクしてきたぞという状態であった。近代化により出すことができる機会が減ってしまった己の力を全力で出し切る時がまさに到来したのであった。

その頃、この非常事態を受けてさとりは飛び起き、地底中を駆け巡っていた。

「はぁ…はぁ…」

「お姉ちゃん！」

「こゝ、こいし？」

「どう？」

「なんとか鬼さん達とも共同で怨霊を封じ込めるのに成功したけど、問題は地上にいる奴らよ」

「どうするの？」

「倒すか再び封じるに決まっているでしょ？とりあえず討伐部隊は編成したから行こう」

「はい！」

地底では討伐部隊が編成されていた。

それは怨霊の管理を行っているさとりやその妹のこいし、さとりのペット達や星熊勇儀率いる鬼の義勇兵による特設部隊であった。

装備：つといえは特にない、頼れるのは己の力のみ、つまり彼女達は旧来の戦法で戦うのである。怨霊相手にはそれが一番であるからだ。

さらにたまたまこちらのほうに戻っていた者がこの部隊の指揮官であった。それは海軍少将の関である。さとりの同族である事と現役の軍人である事からこれから外洋諸島に帰ろうとしている所をお憐が無理やりつれてきたらしい。

しかし関もさとり達とは長い付き合いになるので一応の知識は備えていた。さらに現役の軍人で元通信参謀ながら作戦参謀としてもやっといけるほどの頭を持つ彼だから力不足であるという事はないようだ。ましてや今や小規模で旧型艦ばかりながら艦隊の司令長官である。しかも連合艦隊司令長官と共に作戦の立案を行ったりするほどの頭の持ち主であり海軍内でも次期連合艦隊司令長官候補と謳われもし現実のものになれば歴代最年少連合艦隊司令長官となる。最も特別若いというわけでもなくもうすぐ四十路であるが。

「本隊は地上にいる怨霊の封印、もしくは撃滅を狙って行動する。敵は夜間に活発に行動するものである為討伐作戦は翌日決行とする」

「なんで？」

「それは簡単、準備が整っていない」

「確かに…夜明けまではもうすぐだわ……」

「地上の奴らには悪いが…今夜は耐えてもおう……」

突然の出来事ゆえ地底の者達はまったくといっていいほど準備ができておらずようやく初期段階が終わったにすぎないレベルであった。なので作戦を今から決行する事は不可能であった。関少将も泣く泣くの決断であった……

一方、地上でも長き戦いが一幕を閉じようとしていた。

日がのぼりだし、一端怨霊達がどこかへ身を潜め始めたのである。文と戦っていた深夏も……

「まずい！日が！」

「やっぱり日光に弱いのですか？」

「ちっ…覚えていなさい！今夜また遊んであげる！」

そう文に言い残し、深夏は目の前から姿を消した。

「はあ、確かにあの子強かったけど全力で戦ったら魔理沙以下だった……遊ばれていたのはどちらかし？」

文に最強かもしれないと言わせた女であつたが文が全力で戦つてみると以外に弱く魔理沙以下であると称した。それでもかなりの実力を持つ女の子で事実朝になり深夏が行動できなくなる時間帯になつて深夏が撤退したから戦いが終わった。もしそうでなかったら深夏と文の戦いは昼まで続いていたかもしれない。

さらにこの日から博麗神社のほうでも異変が起こる……つがまずはこの怨霊異変を描く。この異変は妖怪の山駐屯部隊や地底人、そして文達地元人が解決しなければならない。国はもう一つ本日起こつた異変への対処に全力を尽くす事になったからである……幻想郷の大異変はまだまだ終わりそうにない。

第一〇話 怨霊異変 2（後書き）

御意見、御感想等お待ちしております。

第一一話 / 怨霊異変 3

国がもう一つの大異変に必死になっている頃、妖怪の山でも地底から湧き出た怨霊が暴れ回るといふ異変をどうにかすべく、あちこちで会議が開かれていた。

特に地底では本格的な討伐活動を行うに従ってこの日は誰一人と休まず異変解決の為に働いていた。また地上でも文がこの事を新聞記事にしたりしていた。

ところがこの異変はあまり目立たないらしい、もう一つの異変のほうにより深刻だからである。

その異変はまた後々、「怨霊異変」と名づけられたこの異変により、幻想国東部を中心に怨霊警報が発令されたのであった。

怨霊警報とは万が一怨霊がどこから沸き出てきた場合に発令される外の世界ではありえない警報であるが幻想郷においてはとても重要な警報である。

「…との事です。昨日の妖怪の山の事件では死者3名、負傷者5名、行方不明者8名を出しました。怨霊は夜間のみの活躍ではありませんが今回のように我々地上で暮らす者にとっては大きな脅威ともいえる存在であり妖怪の山を始めとする幻想郷東部及び一月島には怨霊警報が発令されました」

この異変の並は一月島にまでも及んでいた。

妖怪の山には一月島と幻想郷を結ぶ通路がある為、そこを怨霊達に通って一月島の人々に危害を加える危険性があるからだ。一月島はあらゆる面で幻想国の重要拠点で外洋諸島の中でも最も人口が多い島である。それだけに怨霊警報が発令された今、厳重な警戒がされ

ていた。

一月島…呉軍港……

一月島の軍港は幻想海軍の重要拠点である。名前は日本の呉にちなんで呉と名づけられ軍港や造船所までもを構え平時は主力艦が集結する軍港であつた。

ただしそれだけに攻撃される心配もあり連合艦隊司令部などは現在ミヤコフ島に存在している。

この呉軍港でも怨霊の襲撃を警戒し陸戦隊がいつでも戦闘が行える状態で待機、さらに一月島を守る陸軍8000人も待機していた。

「長官！」

「何事か！？この騒ぎは！？」

ミヤコフの司令部より飛んできたのは連合艦隊司令長官である伊藤整一大将である。

「はっ！妖怪の山方面にて怨霊が沸き出たという騒ぎで、夜には一月島にも怨霊が出る可能性があるという情報により島内では怨霊警報が発令！我々は警戒を強めております！」

「怨霊？噂には聞いているがこの世界に来てからというものの私は見た事がない、その怨霊というものは本当に存在しているのか？」

「はい、なんでも噂では今夜から地底の輩が怨霊を地上に出してしまった事を反省して討伐部隊を出すとか何とか？」

「なるほど、しかしそれでは今夜出航の船が危ないのではないか？」

「止めるわけにもいかないでしょうしな……っというか今夜に限ってここ一月島を出航する船ってあるのでしょうか？」

「軍艦なら新鋭巡洋艦「愛宕^{あたし}」、民間の船は知らんが一月島は貿易の拠点だ。いくらでもあるだろう」

……そして、運命の時が訪れる。
いよいよ夜が来たのであった。

一月島では今の所怨霊の目撃情報がないとの事であるが街の各地で兵士が見張りを行い幻想海軍も念の為に艦艇を疎開させた。機動部隊艦載機と一月島の海軍航空隊、空軍の基地航空機は万が一に備えていつでも出撃な状態で待機していた。

妖怪の山……

そこをある集団が移動していた。

「……怨霊達……あんまりいないなあ」

例の討伐部隊である。

しかし昨日ほとんどの怨霊を幻想軍が撃退してしまった為、怨霊は地底人が思っていたほどの数がいなかった。あれほど警戒されていた一月島も貨物船『東進丸』が襲撃に遭い1人が重傷を負ったのみでそれ以外の被害報告はまったくといっていいほどなかった。

妖怪の山でも本日1人が殺害され4世帯が泥棒に遭った以外、被害という被害はない。

怨霊退治に特にはりきっていた勇儀は退屈そうにそう言っていた。

「……うつ!!」

「せ、関少将!!」

その時、関は背後から何者かに蹴られ地面に倒れこむ。
「誰!？」

「あれ? 昨日のお姉ちゃんじゃない……って…えっ？」

「あれ? ……あああ!! あいつは!!」

さとり達は深夏の正体を知っていた。
勇儀は叫びながら彼女を追った。

「待てええ!! 深夏、お前が犯人か!!」

「ま、まずい!! よりによって勇儀お姉ちゃんがいる!!」

「ゆ、ゆうぎお姉ちゃん?」

さとり達はよくわからなかった。

少なくともさとりは深夏という人物を知らない、しかし勇儀は知っており深夏も勇儀の事をお姉ちゃんと呼んでいた。10秒後……

「ほれ、捕まえてきたぞ」

「いてて……このちっこいのが犯人か?」

関は起き上がり勇儀が捕まえた犯人の姿を見ると我が目を疑った。

相手は少女、しかも相当の実力の持ち主で閑でさえ、軍で鍛えていたとはいえずぐには起き上がる事ができなかった。

「ねえ勇儀、あんたとこの深夏って子、どういう関係？」

「え？こいつ？10年前に死んだ私の従姉妹」

「……ええええ！？」

勇儀はさとの質問にそう答えた。
当然一同は驚く。

「ごめんなさい……だって……地上の妖怪達が条約違反しているから……」

「……それはわかるけど、でもそれ締結したのって何年？」

「えっ？確か……うん」

「っで、それって3年前に失効したはずだけど？」

「……あぁっ！！」

なんと鬼達と紫の条約は3年前に既に失効していたのである。

だから以前は人間と一部妖怪のみとい制限つきだったのだが今は自由に入りが可能であった。すでに失効している条約なので守る必要もない、つまり深夏は無駄に仲間の霊を消しついでに地上の者達に無駄に危害を加えただけであった。

しかし本人は正しいと思ってやったそうであた、根はただの女の子なので深夏は一生懸命に討伐部隊のメンバーに謝罪をしたのであつ

た。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい！」

「…別にいいって。深夏は正しいと思ってやったんだろ？私だっ
かつては秩序を守る為に本当に武装蜂起しようって考えてた、でも
新時代の到来を実感しこれからは地底も地上も関係なく仲良くすべ
きなんだろうなと思った…まあ今も地上は嫌いだから地底から移住
したいとは思っていないけど」

「…お姉ちゃん…ごめんなさい…」

「いいっていいって、もうしないんだよ？」

「うん…」

「じゃ、帰ろう」

「うん！」

勇儀は手を繋ぎ、深夏と共に地底へと帰っていった。

「っで…なにこのオチ？」

「さあ？とりあえずお姉ちゃん、私達も帰りましょ？」

「そうね…」

あまりにひどいオチに呆れたさとり達も地底へと帰っていき、やが
てほかの鬼達も帰っていった。1人残った関も一月島で部下達が待
っているの帰る事にし、この場所を去った。最終的に怨霊異変は

その後、さとの指示により東機関によって怨霊は幻想軍と地底の討伐部隊による果敢なる攻撃によって全滅、異変は解決したという事にされた。

こうして怨霊異変は迅速な行動によって比較的少ない被害で事を終えた……。つが、異変はこれだけではなかった。この日の早朝、霊夢は通常ならありえないものをみてしまう。そしてそれがいかに大変な異変であるかも後に知る事になる。

第一一話 怨霊異変 3（後書き）

御意見、御感想等お待ちしております。

近頃いろいろ忙しく執筆速度が低下中ですが地道に投稿していきま
すのでこれからもよろしくおねがいします。

第二二話 博麗大結界の異変 1

怨霊異変解決の日の朝、この時別な方面でも異変が起こっていた。それは朝起きて、外を見た時に霊夢が始めて気がついた。

「な…なによこれ…？」

霊夢の目の前に広がるのは人ゴミだ。

博麗神社の敷地は決して広くはないのだがそれでもこんなに人が集まり向こうの通路が見えず精々鳥居が見えるぐらいになる事なんてめったにない。

ところが本日は違った、博麗神社の敷地はどこかの報道陣と野次馬によって埋め尽くされていたのであった。

「あっ！この謎の土地で唯一取材に応じてくれそうな人が、私山田が行って来ます！！！」

1人の女性がカメラマンなどを率いてやってくるとそれに続いて霊夢の下に多数の報道陣が駆けつけてきた。

「失礼します！日本テ。ビの山口と言う者ですか…」

「えっ？」

「あの！こちらはフ。テレビです！」

「お願いします！！是非朝。に！！」

「N。Kです、少しよろしいで………」

「えっ？えっ？えええ！？」

霊夢は混乱してしまう。

どれも今まで聞いた事もない放送局ばかりである。しかしどこの国の報道陣かはすぐにわかった、最初に訊いてきた放送局の名前の最初に『日本』という名前があった。日本とは幻想郷でいういわゆる外の世界である。つまり彼らは日本の報道陣なのである。

（これって…異変！？）

霊夢は即座にこれがなんなのかがわかった。これは異変以外の何者でもない、そう霊夢は思った。

「失礼ですがこちらはどこでしょうか！？」

霊夢は困った。これがたまたま迷い込んだ者であればここがどこなのかを教えてあげるべきなのだろうが彼らは日本の情報を操るマスコミである。こうなったのもおそらくは博麗大結界の異常と霊夢は考えている、霊夢はもし日本のマスコミに幻想郷についてを教えしまえば幻想郷の存在が日本国民全員、それだけではなく外の世界のあらゆる国家の人間が知ってしまう事になる。

しかし嘘をついた所でこうなった以上、いずれはバレてしまう。

「……ここは、幻想郷よ」

「げ、幻想郷？」

「そう、それだけ」

「…そ、それだけですか？」

「失礼ですがお名前をお伺いしてもよろしいですか!？」

「博麗霊夢……」

霊夢は心の中で「何よこいつら、うるさい奴らね」と思っていた。しかしマスコミがうるさいのは幻想国もそうであるので人の事を言えるかと聞かれたらそれはNoであった。

「あの、博麗さん、幻想郷ってどういう所なのか教えていただけませんか?」

「外とは違う」

「…それ? 答えですか?」

「答えよ、だって貴方達が来た場所とは明らかに違うでしょ?」

場がざわめく。

確かに日本風の風景ではあるが雰囲気は日本のものとはまるで違う独特の雰囲気がある。

「と…ところで我々は戻れるのでしょうか?」

「さあ? ……ん? ちょっと待ってなさい!」

霊夢は嫌な予感がした。報道陣を差し置いて彼女は1人、山道のほうへと向った。霊夢が走る道には大名行列のように日本人が並んでおりとても普通の事態とは思えない状況になっていた。そして霊夢は事の重大さを改めて知るのであった。

「なにこれ!？」

博麗大結界があるあたりでとても大きな穴が空いていた。

しかも霊夢にはすぐにわかった。以前のように自分達が意図的にあけた穴ではなくなんらかの異変によって自然にあいた穴である。

つまり、これは異変であつた。

幻想郷の外に見えるのは東京の六本木であつた。幻想郷にはない、見慣れない大都会を見て霊夢は一瞬だけ感激するもそんな事を思っている場合ではないとすぐに心を切り替える。

「一体……これって……ん？」

霊夢の目の前に黒い車が止まる、しかも警察付きであつた。

中から降りてきた男は報道陣や一般の人と比べてなにか違和感のある男であつた。

「……あ、あんたは？」

「おお……ついに我が国が捜し求めていたものがはつきりと……」

私は日本国内閣総理大臣、石岡安二郎ですいしおかやすじろう

「な……内閣総理大臣！？」

まさに最悪の展開であつた。

とうとう幻想国の正体が総理にも、そして公にもバレてしまったのである。オマケに何故か報道陣が撮影する映像は外の世界でも生放送で見れるようになっていた。ついに……幻想郷の存在が外の世界にバレてしまったのである。

「は……博麗霊夢よ……それで、日本の総理大臣さんが何か？」

「我々があなた方と出会えたのも何かの縁でしょう。是非とそちら

の国の上部の方々に我々のことを教えていただきたい」

「それってつまり国交を正常化させ幻想郷も地球の一国として加える事？それとも服従を求め最悪の場合は武力侵攻するって事？」

「まさか、我が国には憲法9条がありますので侵攻なんてできませんし誰もしようとは思ってないでしょう。ただ、最終的には国交を正常化させたいですな、我々も以前よりこの事を期待し調査を続けていたわけですから」

はつきりいつて外国との国交を樹立してしまうのは+の面もあるが-の面も多い。外交上で何か間違えば日本には侵攻されなくともアメリカなどの国々には侵攻される上に相手は現代、幻想郷や南洋の国々と比べたら絶対的に進んでおりその分監視も厳しくなりそうである。

軍縮に傾いている外の世界の監視があるとこれまでのように天界戦やローマーニヤ戦に備えての軍拡ができなくなるし下手すれば嫌でも外の世界に合わせなければなくなる可能性だってある。

幸いな事に幻想国は無資源国家ではないため経済制裁程度なら問題にはならない。また日本の高い技術が入ってくる可能性があるなどの利点もある。

「…私はただの神社の巫女、私の判断だけではすべてを決める事はできないわ……まあ見つかった以上は無視するっていうのもできないと思うし、そちらが全権大使を送ってくればこちらも応じてくれるかと思うけど？」

「了解しました。いきなりというのは流石に無理があるという事は

私も理解しているつもりです。それでは後日……」

こうして、この異変により日本側から全権大使が派遣される事になった。そしてこの情報はすぐに幻想国の政府にも伝わった。

首相官邸……

「予想はしていましたが……とうとう来てしまいましたな」

海軍大将でもある三千院首相はこの異変を予想はしていたようだ。この翌日には日本側から使節団の受け入れを許可を頼む親書が届き幻想国側もすぐに返信、日本に9条があるとはいえ侵攻してくる可能性が0とはいえない、戦争をすれば絶対に勝てない、幻想国側はこの内容を快く受け入れた……というより受け入れざるを得なかった。

それから一週間後……

7月30日……

博麗神社の後ろの山道に日本の使節団を乗せたバスが入ってきた。その道をふさぐように幻想兵は立っていた。

「止まれー！！検問だ！」

「け、検問？」

「……よし！……よし！……よし！では通ってよい！」

「敬礼！！」

バスは再び走り出す。

一方中の人々はここには軍隊があるのかと思った。しかも彼らが見た軍隊とは60年ぐらい後れた軍人であった。

バスは博麗神社の麓の街を出る場所でも幻想軍に止められた。

「これより首都『京都』までご案内、護衛いたします」

（京都ねえ…… ややこしい… 後で改名してもらうように頼んでみよう）

日本の全権大使はそう思った。

京都は日本にもある地名でしかも有名な場所である。それだけにややこしい、改名してもらいたいという気持ちはあって当然だろう。

バスは九二式重機関銃の改造型を搭載したジープ2両、兵士を乗せたトラックに護衛されつつ京都へと走っていった。

第二二話 博麗大結界の異変 1（後書き）

御意見、御感想等お待ちしております。

第一三話 博麗大結界の異変 2

日本の使節団を乗せたバスはやがて帝都『京都』へと到着した。そこはまた日本的な街であつた。もちろん目に映る文字は日本語であつた。

ちなみにバスの中には幻想国の人間が案内役として乗っていた。

「あちらが宮城であります」

「日本的な城ですな」

「幻想郷はかつてはもっと狭く、結界が張られる前は日本の一部でした」

「なるほど」

（結界？頭でも打ったんだろうかこの人？）

日本人には結界などという存在は信じられない。

当然妖怪なんていうものも存在しないものと多くの日本人は思っていた。幻想郷の事が忘れ去られた拳句に近代文明が発達してしまつたためである。

「あちらが帝国ホテルです。皆様の今夜の宿泊場所でもあります」

「どこかで見た事あるような？」

「気のせいです」

本日は三千院首相らが南天界訪問の為、不在なのでこの後日本から

送られた使節団のうち、防衛省の人間と陸海空自衛隊の人間は幻想国の軍事力を一部でも見るべく、すぐさまホテルの部屋を出て幻想軍に案内された。

ちなみに三千院首相らの帰還は3日後。

まずは陸上自衛隊の2人が幻想陸軍の元山駐屯地へと向った、元山駐屯地には第1師団と第2師団が駐屯しているほか、第1軍司令部も存在している。

現在の第1軍総司令官は多世界大戦でも活躍した江成大将（昇進）である。彼は陸上自衛隊の陸上幕僚長と名乗る本田ともう1人の陸自の人間を快く駐屯地に招き入れた。

「幻想陸軍第1軍総司令官の江成です」

「陸上自衛隊、陸上幕僚長の本田です」

双方とも片方は本物の軍人、片方は自衛官ながら共に似たような存在であり、すぐに心が通じ合った。

「我が幻想陸軍は旧日本陸軍及びそちらの陸上自衛隊を参考とした軍隊でありその主な任務は国土防衛が第1であります。また治安維持任務や災害時の救出活動も行っております。現在の人員は約60万人、しかし最終的に動員可能な人数は100万人を越えます」
江成は簡単に幻想軍について説明をする。

「つまり新興国のわりには大きな軍隊……というわけですね」

「ええ、最も装備はいい所大戦中から朝鮮戦争、最も進んでても60年代初頭ぐらいですがね。なんたって回りの国がまだ大戦中の戦法が通じるレベルですしそもそも外の世界の国家など仮想敵である

以前にこのようにお話をする機会すらないものと思っておりますのでそちらと戦う準備などまるでできてません、最も戦うつまりなといっさいありません」

あれから5年が経ったとはいえ一部の国を除けば大戦中の戦法でも十分に戦えるレベル、つまり朝鮮戦争ごろとほとんど同じである。(幻想国とハルシュタット、天界についてはミサイルも配備されておりそううまくはいかないが)

「それはよかった…っで、その装備を見せてもらってもよろしいでしょうか？」

「勿論、貴方達に隠して意味のあるようなものは持ってません」

その後、江成は2人を外へ案内し、一部ではあるが今の幻想軍の兵器を一通り紹介した。

「こちらは二式戦車、隣が三式戦車、違いは三式は120mm戦車砲搭載型で速度も多少上がっている事です。二式戦車は7年前、三式戦車は6年前採用の車両です」

「なんというか…見た目が74式にそっくりなような…」

「自分は開発に直接携わっていたわけではありませんのでその辺はわかりません。ただし戦闘力は高く今でも…もっともこっちの世界に限っての話なのですが火力、防御力共に十分に通用します、また50t以下と比較的軽いのも特徴です」

この二つは戦闘能力の高さが現在幻想陸軍の主力戦車となっている。もちろんあれからエンジンの性能を少しあげたりスタビライザーを搭載したりなどの多少の改良が加えられている。元々の戦闘力と改

良によって二式戦車は天界軍の戦車と互角でロマーニヤ軍の戦車と戦うには十分すぎる性能を秘めている。三式戦車は天界軍の戦車を比較的遠方から撃破しうる力を秘めていた。

「こちらは？」

「これは八式戦車、島の戦いを想定し輸送艦の積載量の問題からより小型で軽量でそれでも敵の戦車を撃破しうる砲を搭載した戦車を開発する事になりこの戦車が生まれました」

八式戦車は重量3.5tと比較的軽量で二式戦車の105mm砲や三式戦車の120mm砲には劣るもののそれでもロマーニヤ軍の戦車と戦うなら十分である90mm戦車砲を搭載、装甲は砲塔が最大14mm、車体最大が55mmであるが避弾経始も少しは配慮しておりただの55mmよりは丈夫である。

最高速度は45km/h、乗員は4名である。

…っとはいうもののこの新戦車はまだ数が足りない為四式中戦車もまだ現役であった。続いては戦車以外である。どれも陸上自衛隊が現在配備している兵器に比べれば見劣りするものだがこの世界では十分通用するレベルである。

戦後誕生した幻想陸軍の新兵器：4年前に採用されそれまでの貧弱な自走砲を置き換えるべく開発された五式十五糎自走砲、機械化部隊を増やす事を目的としている幻想陸軍が同じく4年前に採用した五式装甲兵員輸送車、2年前採用、陸軍がかねてより欲しかった七式自走高射機関砲。どれも外のものには劣るが本田は未だに明治期の日本陸軍レベルであると思っていたので予想外に幻想軍が保有している兵器のレベルが高くて驚いていた。

さらに戦いぶりを見て貰うため、江成は本田達を建物の中に入れてあるビデオを見せた、それは大幻想戦争での対ライデンブルク戦の映像である。

「もう実戦は経験済み…という事ですな」

「そういう事です、ちなみにこの戦いの結果相手のライデンブルクは敗戦、我が国に対する空爆で始まった戦争は終結し、祖国防衛に成功しました」

「そうですか…やはり国の歴史には必ず血を流す場面というものがあるのですな…」

「そういつは避けては通れないものですからね」

映像は初期の本土防空戦から祖国防衛の為の地上戦、ライデンブルク海軍や南ライデンブルク海軍との海戦、敵の島の攻略、激戦でありライデンブルクが幻想国に対して最後に仕掛けた大攻勢である第三次千鳥攻防戦、緒戦の痛手から戦力を立て直しライデンブルク本国に進撃しそして勝利したライデンブルク本国の戦いのボゴスロフスキーグラード戦までが入っている。

特に後半の映像になるにつれて大東亜戦争の映像よりも激しくなっていた、動員兵力があつた戦争での一回の戦いで動員数よりも多い上に兵器もより火力のあるものを双方が使用していた為である。

「しかし…この戦争に勝てたのは奇跡としかいえない…今でさえ国力不足でどうなるかわからないというのにあの時の開戦は我が国建国から僅か1年、その時の軍の総兵力は10万にも満たない、人

的資源もない、絶望的でしたよ……」

「しかし勝ったと、すばらしいですな」

おまけに幻想軍の戦死者はほかの国に比べて少ない、そのせいか今世界では幻想人最強伝説というものが広まっている。ただしこの伝説では国家が強いわけではなく人が強く人が故郷を守る為に戦いその人が勝利をつかんだという事になっている。

確かにあの時は国……というよりは幻想人のほうがやる気になって戦っていた、国民は政府よりも好戦的であった。あの時の幻想人のやる気から今でも幻想人は「戦闘民族」であると言われている。

一方ほかの自衛隊関係者も幻想軍を視察、やはり戦後のものがあり予想以上に進んでいる事を知り驚いていた。ほかの使節団のメンバーは幻想郷を視察、そうこうしているうちに3日が経過し、三千院首相との会談が行われようとしていた。

第一三話 博麗大結界の異変 2（後書き）

御意見、御感想等お待ちしております。

第一四話・博麗大結界の異変 3

その頃、霊夢は今回の異変の原因を探るためにいろいろと活動をしていた。

その途中、彼女は陸軍省にお呼ばれされたので陸軍省の建物に足を踏み入れた、霊夢を迎え入れたのは栗林忠道陸軍大臣本人であった。

「ようこそ、陸軍省へ、ささ中へ」

栗林に案内され、霊夢は陸軍省の建物の地下へと連れて行かれる。防諜の為であるらしい。

「それで、何の用？」

「我が軍の諜報員が今回の異変に関して有力な情報を掴みまして、それを異変解決者である貴女にお知らせしようと思ひまして」

「つで、地下にいく意味ってあるのかしら？」

「防諜の為です。この地下室はかつて空爆に遭った際にも政府の施設として使用され世界の人間はおろか国民ですら一部の者しか知らないほのです」

「軍でも？」

「大臣や参謀、ここで働く兵など一部でしょうな。現に目立たない所に入り口があつたでしょう。ここは防諜には丁度よいですし万が一京都が爆撃されたとしても一度ぐらいなら核爆発にも耐えられるように設計されています」

「だからあの時国が減びないで機能し、戦い続けたわけ？」

「そついう事ですな」

この地下施設を知るものは本当に幻想国でも少数しかいない。

政治家ですらよほどの者にならないと知らないほどである。しかも知っている人間は軍のものか情報本部や東機関などの諜報機関、さらに選挙で勝ち続けずと政権を握っている幻想党の一部のみとここで働く公務員のみである。

「…そういえば今思ったけど、もし何かあったら軍つて何人動員できるの？」

「ん、我が国の人口は外のベナンとほぼ同等、若者は多い、錬度を期待しないなら我が国の徴兵制は平時のみには良心的兵役拒否があるが戦時となれば根こそぎ動員も可能、男150万、女145万だ」

幻想国では18歳〜49歳の間に何度か徴兵される。ただし平時だと3回されれば多いほうであった。そもそも建軍からそれほど時間が経っていないので多くてまだ2回目の者がほとんどである。徴兵期間は約1年。なお幻想国では男性のみ徴兵を課すというのは男女差別であるとしてイスラエルやマレーシアのように女性にも兵役を課しているが期間は男性に比べて短い。

根こそぎ動員が行われればできるだけの人間が徴兵される、大幻想戦争中も本土で待機してただけでかなりの人数が兵として待機していた。そして今、今までのような経緯で人口も増え平時でさえ今にも勃発しそうな戦争に備えてかなりの無理をして100万近い兵士を抱えているというのにさらに300万近い兵士を動員できると

いう、これができるのも幻想人の働きぶりと外国人労働者のおかげである。

外国人労働者は主に仕事のない国からやってきた人々でそれだけに最初は不安だがよく働く人達でその元々人員不足である幻想国を影から支える存在だ。なお給料はもちろん払うが利益は幻想国企業のものである。さらに人不足ゆえに求人もあるのでホームレスの数は比較的少ないので今が丁度いいぐらいであった。日本のように発展しきったわけでもなくこれからという国家なので仕事はまだまだ山ほどあった。

ちなみに人口は今も急速に増え続けている、西幻想国同様大量移民のせいである。主に異世界からの大量移民で毎年10万人が移民してきて住宅が不足するという社会問題も発生しているがとにかく人が欲しい幻想国は必死であった。そして出生率をあげるための努力も行われていた。

今いる人が全員爺婆になり少ない子供が大人になると今の日本の比ではない少子高齢社会が生まれてしまったためである。この時点から大量移民を受け入れている幻想国はそれを恐れていた。ちなみに移民してくる者は異世界人とはいえたとも深い理由があつて日本を失った日本人と迫害されて逃げてきた日系人である。

「やりすぎではないか？」という意見もよく頻繁に聞くが移民してきた者にとってはようやく衣食住がちゃんとある場所で暮らせるという理由で人々は喜んでいた。しかしこれだけ人を引き抜くと向こうの世界の人的資源が枯渇してしまう、幻想国はそれを覚悟しすまないと思いつつ何気なく悪い事をしていた。

どんなによく見せようと結局悪い事をするのが人間、いやそれなりに頭のいい生物ならば妖怪だろうがなんだろうがそうなのかもしれない。ちなみに今年はまた住宅が不足する見込みである。なんでも異世界で東京が陥落したらしく大勢の人間が難民になったという、ソビエトが攻めて来ている世界らしく幻想国はそれを利用して「人が消えているのはシベリア送りかその場でのソ連兵による虐殺」という嘘の情報を流しこのような活動を行っている事を隠した。

そんな感じで今年は推定200万を越えるらしく幻想兵に誘導されつつ、安全に暮らせる場所を求めて人々は境目を通っていた、大行列であつた。それでもその世界の日本の人口は1億を越えている為それぐらいなら大丈夫だろうと幻想国は考えていた、栗林はその事も霊夢に説明した。

「ってそれっていろいろと犯罪じゃないの？」

「それもそうだしもし知られたら国は潰されるでしょうな。まあ幸い日本人は洗脳が簡単だから。噂ではマスコミが扇動しそれに多くの日本国民が騙されるというからな」

まさに幻想国はそれを利用していた。

いけない事であると知りつつもそれをやっているのであつた。

（つてすっごいご都合ね……）

誰もが思う文句を霊夢は頭の中で密かに言うがそれを言ったら国力の差から幻想国に勝ち目がなくなってしまうので霊夢は心の奥底にその気持ちをしまうことにした。

「こちらです」

鉄製の緑色の扉で塗装がはげかかっている。いかにも怪しげな所に
霊夢は足を踏み入れた。するとそこには電算機が沢山並んでいた。

「何これ？」

「高速電算機です。その名の通り通常の電算機よりも高速であります」

パソコン……という表現はあまり幻想国では使用されない。幻想国ではパソコンを示す言葉として電先が用いられている。敵性語でもなんでもないのでが最初に言った人が影響でそれが広がってしまったのだらう、レーダーも同様に電探と未だに言われている。

「あ、閣下！…それに博麗さん！お待ちしていました！」

「紹介する。本郷少佐だ」

本郷はどこにでもいそうな軍人である。

しかし人は見た目で判断するものではない、その能力はすばらしいものであった。

「どうぞ、こちらへ」

本郷はさらに霊夢を自室へと案内する。話はそこまで重大であった。

「どうぞ、お掛けになってください」

話は本郷と霊夢のみで行われた、栗林は外で待っていた。既に事前に聞いているので改めて聞く必要がないからである。

「それで、一体どんな情報を掴んだの？」

「はい、実は今度の異変についてなのですが……どうもこの幻想郷の急速な発展に原因があるそうです」

「…やっぱり博麗大結界に？」

「既に郷ってりましたか。そのまさかです、今回の異変は博麗大結界に異常があったからなのです。偶然にも諜報活動を行っていたらこの情報を入手しました」

「やっぱりねえ……すると解決にはより強力な結界を張る事、さらに外との連絡用の穴にもまた別なし掛けにする必要があるわね。それと幻想郷の非常識が常識になりつつあるからそれについてもなんらかの対策をうたないと後々面倒な事になるわ」

「しかしそれをするのは簡単ではないと思うのですが？」

「簡単じゃないわ、でも出来ないことはない。外での非常識は変えなくてもいいけれど幻想郷での非常識を外の何かに変えればいいのよ」

博麗大結界とはそもそもは「常識の結界」である。

外の世界と幻想郷の「常識」と「非常識」とを分けて外の世界の「常識」を幻想郷の「非常識」にし、外の世界の「非常識」を幻想郷の「常識」の側に置くというのが「博麗大結界」である。

すなわち幻想郷での非常識が常識になりつつある今の時代では単に結界を強力なものにするだけではダメなのである。幻想郷の非常識を何かに変える必要があるのだ。

「しかし…何に変えれば？」

本郷少佐はそれがわからない。

当然ながら霊夢もそれはわからない。

「わからない、だからこそ外へ調査に行くべきなのかと思って
いるわ。ただこうすれば可能だと思うわ。外にあつて幻想郷にないも
のを非常識とする。つまり外の科学力でしか作れない、いずれ作れ
るようになったとしても幻想郷は外に比べて一步も二歩も遅れてい
る。つまり定期的に幻想郷の技術では作れないものを非常識として
設定すればいいのよ」

「なるほど！確かに作れないものでしたら非常識で済みますな！」

「ええ、問題は何が作れないかよ」

「だとすれば後は簡単ですな。外にスパイを送り込みそれを調査、
情報を持ち帰りそれを調査する。そうすれば作れるかどうかかわか
ります」

「ただそれも問題があるわ、にとりとかだったらそれを参考に本物
そっくりなものを開発してしまう可能性がある、だから開発できな
い程度にしておかないといけないわ」

「わかつております、一部の大事な資料は捨てるという事ですな」

「そうよ」

もつともそれでも危険ではあつた。

僅かな資料だつて十分開発の参考にはなる。それでも作らせないと
いう方法はある、にとり達も馬鹿ではないので事の重大さは教えれ
ばすぐに真に受け止めるはずである。なので開発しようという気持
ちを思いとどまらせる事も可能ではあつた。それにわざわざ河童に
持つて行かなくても陸海空軍には優秀な技術者がいる。軍機にする
事も可能である。本郷少佐は防諜の面から軍機として軍の技術者に

研究をさせたほうがよいと考えた。

「よし！大体の作戦は決まった、後は承諾を得る事と準備だ！作戦名は「博麗作戦」だ」

今まさに、幻想郷に住む者達は難関に挑もうとしていた。

第一四話・博麗大結界の異変 3（後書き）

御意見、御感想等お待ちしております。

第一五話 博麗大結界の異変 4

博麗大結界の修理、強化と非常識変更の為の情報収集の為に立案された「博麗作戦」はすぐに許可がおりて発動となる。その一方で三千院首相は使節団との会談を行った。

日本側は正式な国交の樹立などを要求してきたが幻想国側は幻想郷とはあくまで外とは縁を切った存在であり外の国家との国交を正常化する事はできないと拒否、日本側はマスコミの報道は馬鹿な誤報という事にしあくまで日本のみとの国交を要求するが幻想国はそれを拒否した。

最も幻想郷は怪しい、本当に異世界なのか、妖怪なんてありえないなどの外の常識で動く日本の使節団のメンバーも国交を結ぶのは危険ではないのかという声が大きくなり同時に日本で密に行われた会議でも怪しすぎるなどの理由で国交を結ぶのは危険という判断が下されている。

しかし秘匿性の高い幻想郷に拠点を築けば日本の国力も上がるかもしれないという期待が日本にはあり幻想国側も高い技術が入ってくるのではという期待がある為か、両国間の国交を正常化させる事に肯定的な意見を述べる者も少なくはなかった。

外交とは難しいものである。2、3日の会談では中々物事は決まらない。相手が日本だからいいがこれが中国とかであれば武力で幻想国をねじ伏せる可能性だってある。幸い相手は一応平和主義を掲げる日本であるが自衛隊は強力で国民も半数は「何が9条よ」という人である為、やはり慎重に行かなければならない。なんらかの形で幻想国が危機に陥る可能性も0ではないのである。

一方の日本も慎重だ。幻想国は後れているとはいえ立派な軍隊を保有している。しかも兵器は戦争後半から戦後のものがほとんどで国民の士気も高いようであり兵站もしっかりとしており、さらにはまだ不安が残るものとはいえミサイルやジェット機なども保有、核兵器すら保有しているのではないかと噂されていた。

（実際実験用と万が一の外交用に数十発ほど核兵器が存在している）

資源もあり単純な数ならば自衛隊の総数よりも多い、境目を越えて幻想軍艦艇が外の世界に現れる事だってできる。その装備は旧式でとても自衛隊に及ぶものではなく真正面から戦えば3日もたないレベルではあるものの日本は先制攻撃ができず大量のミサイルを撃ち込めばなんらかの打撃を与え、混乱している隙に地上部隊を日本本土に展開させる事は可能であった。

その為日本側は幻想国を北朝鮮よりかは手強い相手で一時的に日本が不利になる可能性があるとし、自衛隊は警戒をしていた。

それに幻想軍の一部の参謀は目先の情報だけで物事を判断、「幻想人が本気を出せば大幻想戦争の時同様、勝てる、日本人も精神力は高いが我々が一番である」という精神論で対日開戦を主張する無能も存在している。幻日開戦の可能性は0とは言えない。

ただし幻想国の政府としては日本と戦っても勝てないしそもそも理由もないのに戦う必要などないとし、あくまで平和的にこの問題を解決する姿勢であった。

「博麗作戦」の許可がおりて1日、未だに交渉は行われていた。しかし多少の進展はあり日本とは秘密に外交を行う方針で話は進ん

でいた。公にはせず、日本とのみ極秘で国交を行うというもの、日本側は日本製の製品、幻想国側は食料、石油を輸出し共に技術者を派遣し合うという所までは話は進んでいたのだがどうやって秘密にするかという問題で現在もめている。

そんな中、この異変の原因である博麗大結界を修復、今後このような事がおこらないにするための改良を施すべく、霊夢達は行動に移っていた。

「ええ！？１人で？」

「悪い？陸軍兵士が数名ついてくるよりは遥かに安全だと思うけど？大体怪しいでしょ？」

霊夢の護衛の兵士は要らないという発言は本郷少佐を驚かせた。確かに日本において幻想兵が歩いているのは怪しすぎる、それならばまだ霊夢が歩いたほうが怪しまれないだろう（十分怪しいが）。

それに霊夢は陸軍兵士数名を遥かに越える力を持っているので１人でもさほど危険ではない、だが本郷少佐は作戦行動を行うにあたって単独での行動は危険極まりないと考え、不安で仕方がなかった。

「しかし……作戦は１人では……」

「そんなに不安だったら外の技術レベルの情報を掴むのに技術者１人、ついでの護衛に１人でいいわ。でも正規の軍人だったら普通の服装でも怪しい、ましてやだらしのない人が多い現代日本ならバレバレだと思うわ」

「確かに、軍隊のような言葉で話す人はいないでしょうな。それにこういった異変は我々よりあなたのようなお方のほうが慣れていきます。了解しました、自分はこっちはこっちで諜報活動を行います、

あと博麗さんと数名だけでは行動範囲が限られてしまうので白糠の東機関にも協力を要請します」

「わかったわ、じゃあ適当に仲間を集めて行ってくるわ」

「健闘を祈っております！」

本郷少佐は起立し、霊夢に対し敬礼する。

その後霊夢は陸軍省を出ると、本郷達を不安にさせない為に早速協力してくれる仲間を探すべく幻想郷を歩き回る。まず霊夢が訪れた場所は魔法の森の霧雨魔法店に向った。そこで霊夢は魔理沙に協力を要請する。

「お、久しぶりじゃないか」

「ねえ魔理沙、ちょっと外の世界に行かない？」

「え？なんで？」

霊夢は防諜の為に、魔理沙の耳元に口を近づけひそひそと理由を説明した。

「外の技術か、おもしろそうじゃないか。ここよりも進んでるんだろ？私も行くぜ！」

魔理沙にとって外の世界とは未知の世界、今の幻想郷よりも進んだ世界が広がっているわけだから興味があって当然といえる、またこの話を聞いて1人、ある男が現れた。男は外の世界に興味津々であった。

「外の世界か、俺もついていきたい」

「あら？霖之助さん？」

森近霖之助、東方project原作に登場した人物では数少ない男性キャラクター、森近財閥の当主で自動車から家電、食品、軍需産業にまで手を出す大企業を抱えているがその店は元々は道具屋「こつりんどう香霖堂」という小さなお店であった。

彼は外の世界と外の技術に憧れており外の技術が入ってきている今でさえも、より進んだ外の世界に興味を持ちいつかは外の世界に行き、自分の知識を試したいという夢を持っている。そんな彼、今はお偉いさんではあるものの未だに魔理沙や霊夢とは仲がよくお払い棒や巫女服、ミニ八卦炉、作成・補修・改良もまだやっているという。そんな彼が珍しく魔理沙の家に現れたのである。

「何の用？香霖？」

「いやあ、外の世界に行きたくて」

「つまり誘ってくれて事が、どうする霊夢？」

「いいんじゃないの？丁度技術者探してたし、霖之助さんは技術者っぽい人だけれど私達よりは機械に強いでしょ？」

「よし！今こそ俺の知識を試すとき！外の世界だ外の世界！！」

霖之助はまるで子供のようにはしゃいでいた。
よほど外にいけるのが嬉しいのである。

「…問題は移動ね」

「箒に乗ったりしたら流石に怪しいか……」

「ならば任せろ、俺が車ぐらい用意する」

「あれ？香霖運転できたっけ？」

「もちろんだ、神社の方向にいけば境目にいける道路があるんだっけ？」

「そうよ」

「わかった、じゃあちょっと待っている。車を持ってくる」

霊夢、魔理沙、霖之助は外では常識で今幻想郷では非常識である進んだ技術を探すべく、日本へと出発した。

第一五話 博麗大結界の異変 4（後書き）

御意見、御感想等お待ちしております。

第一六話 非常識探しの旅 1

やがて霖之助の車が霧雨魔法店の前に到着し、2人を乗せると霖之助は車を動かす。霊夢に道案内を任せ、首都である京都を越えると再び田舎道となる、森の中を走りぬけ、今度は博麗の街を通り抜け、博麗神社付近の駐車場に車を止めた。

「なんでここで降りるの？」

「理由は簡単、この車じゃ外は走れない。ナンバープレートからして無理でしょこれは」

「なるほど」

やむなく一行はその後徒歩で外へ向う。

「あそこよ」

「あれを越えれば外の世界……いよいよ知識を試す時が来た！」

霊夢達は軍も幻想国企業も使っている道を通る。すると目の前には森が広がる。ここは鹿屋である。日本から幻想郷への人の流れを支えるルートの一つである。

鹿屋は一応市であり日本では田舎だが幻想郷だと都会の部類に入る……が今では京都や迷林のほうが巨大な都市となっておりそこまで大きな街であるといった感じはしなくなっていた。

一行はその後、下の街のほうへと歩いていった。

「ここが外の世界か……」

「車の形が違うわね」

「そりゃあ違うだろ、それに思ったよりも田舎だな」

もつと期待していたのに思ったよりも田舎である事に一行は失望していた。

「…誰かこっちに来る！」

魔理沙は怪しげな気配を感じ、後ろを振り向いた。

その先には正装をしている怪しげな男の姿があつた。なんとなくではあるがその見た目は老人なのかそうでないのか、老けてはいる感じであつた。

霊夢にはその正体がわかつた。

「…本郷少佐ね、あの男を送ってきたのは……」

「どういう事だ？」

「魔理沙、霖之助さん、あの男は亀梨三朗よ」

「亀梨？それってあの時の総理の？」

魔理沙がさういうと男は帽子を取った。そこで2人も男の正体に気がついたのである。

「いやいや、お久しぶりです博麗さん」

「どうしてここに？」

「陸軍の諜報員の本郷少佐に頼まれたもので、自分は外出身でありますので」

亀梨三朗はかつて内閣総理大臣を勤め幻想国をリード、見事に戦争を幻想国の勝利へと導いた人の1人である。また今では予備役であるが陸軍大将でもありあの戦争でも幻想軍の作戦には彼が関与している事が僅かながらにあった。

現在では現役からは退いたもののそれでもあちらこちらで活動をしており特に現在、ＴＵの東方議会議長を勤めている。

昨年からの幻想国の教科書には既に載っている人物である。年齢も思ったよりも高くはなく一部では独裁的な男と批難を浴びる事があるものの今に至るまで亀梨人気は絶えず文々。新聞が行った首相にふさわしい男はランキングでは見事に1位に輝いていた。

「仕事はどうした？まさかクビになったか？」

「いやいや、そりゃあないですよ。ただ強いて言えば戦時中や戦後の国連創設の後仕事、ＴＵ創設までの大仕事に比べれば仕事は減りましたね、忙しい事には変わりありませんがね。本日も実を言えば仕事なのです、ただ旅行的な意味合いもありますがあなた方を案内するのです」

「確かに、我々は日本の事をまったく知らないな。道案内をしてくれるなら大歓迎です」

霖之助は亀梨という幻想国では偉大な男が目の前にいるというのにまったく動揺していなかった。最も亀梨にとってはそれでいいようだ。むしろ目の前にいる人が緊張していたら何事もやりずらいというのが彼の本音である。

「ささ、こちらへ。とりあえず東京へ行きましょう」

「東京？」

「あそこは日本の首都です。初めての方でしたら行くべきでしょう」
確かに幻想人のような田舎者ならば一度は東京へ行ったほうがいいだろう。ついでにいえば東京の街中を歩いていれば幻想郷の非常識が見つかるかもしれない。その事を考えれば3人の中で誰も東京へ行く事に異を唱える者はいなかった。ただ気になる事は交通手段である。霊夢はそれを気にして亀梨にどうやって東京へ行くのか訊いてみた。

「交通手段は？」

「時間はかかりますが車を用意しました。なんとたつて得に博麗さんと霧雨さんはちょっとこちらの世界ではありえないような服装をしていらつしやるので鉄道や飛行機に乗るよりはいいのではないかと思います」

「私達のせいでわざわざ時間のかかるものに乗るのか、筈はダメか？」

「いやあんた……ここ幻想郷じゃないのよ？」

「あ、そういえばそうか」

一行はとりあえず亀梨に案内され駐車場へ向う。そこには20人ぐらゐの人間が乗れるマイクロバスが止まっていた。中には運転席にいる男とその後ろの席に座っている2人の女性があつた……つが魔理沙も霊夢も霖之助もその3人の姿に見覚えがあつた。

「ええ！？海斗！？ついでに咲夜に織本娘まで！」

魔理沙が声をあげて驚くと咲夜と玲奈がむすつとした表情で文句を言った。

「ひどいですね、ついでって…」

「ひどい！玲奈って名前があるのに！」

まあこの2人がいるのは別にどうでもよかった。

仕事も無いであろうし特に玲奈なんかは初めての日本、遊び程度にしか考えていないだろう……。つが問題は海斗である。海斗は現役の軍人であり仕事があるはずである。

「ちょっとあんた仕事は？」

霊夢は心配そうに海斗にその質問を試みる。

「これが仕事だ、急に言われたものだからびっくりしたさ。最初は俺が関かで論争になったんだが考えてみれば運転歴と大型自動車免許を持ってる奴といったら関じゃなくて俺だったんだよ、だからこれは運転手という仕事で咲夜達は一緒に日本旅行に行くかって事についてきたんだ」

「じゃあ海斗って運転するだけなの？」

「おお、お前と魔理沙と霖之助が何の仕事をするかなんて俺は知らないぞ？」

どうやら海斗も3人と亀梨が何の為に日本に来たかは知らないようである。確かにそれは極秘の任務であった。

霊夢、魔理沙、霖之助は何の抵抗もなくバスに乗った、それは幻想

郷にもありもちろん幻想郷で初めて見た時は抵抗を感じたが数年という歳月が経過している為、既に慣れてしまっている。だからであるが幻想郷には未だに怨霊が操っていると抵抗を感じバスに乗れない頭の固い妖怪がいる。もちろんそんな事はないといろいろな者が説明をするのだがそれを全く受け止めようとしない妖怪までいるのだという。

最も今までの幻想郷の文明レベル人間は明治初期の村、妖怪はそれを基として魔法、精神面での文明を発達させ外での非常識が常識となつてしまいい外の常識が幻想郷では非常識となった。なので車のよくなものを受け入れるというのがそもそも問題であるかもしれないし反乱が起こる可能性さえ想定していた。

現に一度だけ内戦が勃発した。

その後も細々とした事件は発生しており特に古参妖怪が数多く住む妖怪の山の奥地の治安は悪い、一時期は軍でさえ殉職者を出すほどの過激な活動が行われていたのである。しかしそれらを乗り越えて今の幻想国がある、伝統と外来してきた物をうまく合わせ、今の幻想郷がある。

魔法などの幻想郷の常識と外来技術が合わさる事によって外の技術では永遠に作れない代物まで完成している。幻想郷は幻想郷なりに発展を遂げたのである。

ただし軍事面についてはあまりそういった伝統を引き継いでいないようである。強いて言えば工兵隊に魔法使いがいるぐらいである。戦場からは近代兵器の発達によって幻想郷の伝統が失われつつある、それでも白兵戦に備えて旧戦法の訓練も行われているという。最後の手段としては敵に対し、非常に有効であるからだ。

やはり幻想郷ではどんなに近代化が進もうと輝く伝統は受け継がれているのである。

マイクロバスは東京へ進む、幸いカーナビが取りつけられており亀梨が直接道案内をするという事はほとんどなかった。バスは東京を目指して進む……つがすぐに東京に行くのも面白くはない上に1週間も期間があるのだからそこまで急ぐ必要はないので観光しつつ東京へ向かう事になった。

観光をしながらというのも海斗は国家将校だからバレても問題はなさそうだが完全な部外者である咲夜と玲奈にバレないようにする為であった。その為、もちろんやるべき事はやらなければならないが任務というよりはほとんどが観光であった。

第一六話 非常識探しの旅 1（後書き）

御意見、御感想等お待ちしております。

第一七話 非常識探しの旅 2

一行は見るものすべてに興味を示した。

初めて見る外の世界、たとえ今の幻想郷に似ている部分があったとしても新鮮である事には変わらない。それに幻想郷では考えられないぐらいの交通量であった。

海斗は現在高速に乗っていたのだが思っていた以上に渋滞していた。一行の最初の目的地は熊本である、一行は九州自動車道に乗っていたが今日はいつもにまして混んでいる日で街に近づくにつれて渋滞しはじめていった。

「こっちの道路は混みますな」

「幻想国の道路とはわけが違いますからな」
つと亀梨は苦笑しつつ言った。

「これなら列車乗ったほうが早かったんじゃないか？」

「しょうがないだろ？鹿屋には鉄道が通ってないわけだし」

魔理沙は文句をたれるも海斗の言うとおり、鹿屋には現在鉄道は通っていないし大規模な飛行場があったというのもそれは昔の話で今は大型の旅客機が降りるような空港もない。あるとすれば自衛隊の基地ぐらいだろう。

「ねえお腹空いた」

「じゃあそろそろお弁当にしますか」

空腹に耐えられなくなった玲奈の一言で咲夜は弁当を出しさらにそ

の匂いに耐えられなくなった霊夢達は各自で持ってきた食べ物を食べ始めた。しかし海斗は運転中故に精々缶コーヒを飲む事で精一杯であった。その為かおいしいものを食べているような音、そして食べ物の匂いを感じるとだんだん我慢ができなくなってきたのであった。

「ほら、ちゃんと用意してあるから怒らない怒らない」

「いや、それはわかってるけどハンドルから手を放せない」

「しょうがないわね」

咲夜は箸でなにかおかずを掴み、それを海斗の口元に持っていた。別に家の中でかつ玲奈がいないのであれば問題はないのだろうがこの中には玲奈がいるかつ他人までいるわけだ。にやにやと見つめる者が大変多くいた。

「…ごめん、やっぱり我慢する」

「なんで？」

「後ろ」

「……うん、理由がわかった。がんばってくださいね」

さて、一行が向っている熊本。

定番といえば定番であるがとりあえず一行は熊本城へと向った。

日本三名城の一つとされ、「清正流^{せいしょうりゅう}」と呼ばれる石垣の上に御殿、大小天守、五階櫓などが詰め込んだように建てられ、一大名の城としては「日本一」であるとの評価があるそうだ。

その後、明治時代に西南戦争で一部を残し焼失してしまうが地道な復元作業が今も行われている。

「これが熊本城……なんか紫の城のほう而立派じゃない？」

「それを言ったらおしまいだと思っぜ、霊夢」

それは紫の城は仮にも宮城、皇居なのである。立派である事は当然で一大名の城ごときが及ぶものではなかった。ただし近年立派過ぎやしないかという話も国内でよく聞く事ができる。

その立派さは一昔前、それこそ日本という戦国時代ならば難攻不落、攻略が果てしなく難しいほどのものであるが和風故に材料は西洋のようにそれほど丈夫なものではなく西洋の城には及ばない物である。

「俺は、俺は科学的なものが見たいんだ！」

霖之助が叫ぶように海斗にそう語りかけた。

「そのうち見れるから叫ぶな」

「しかし、日本は変わりませんなあ」

「亀梨さん、自分は昭和18年より来た者なのでいまいちよくわかりません」

「まあそうですね、しかし自分は戦後の日本を生きた。だから愛着があるしそれなりに詳しいですよ。本当にかわっていない、ある意味ほっとしました」

亀梨は故郷を懐かしむ様子で旅を楽しんでいた。

玲奈は既にあきたで咲夜がお相手をしていた、こんな感じで熊本城

見学は終了した。実際に皆が思っていたよりも規模が（幻想国の宮城より）小さかったため、あんまり面白い旅とはならなかった。

その後一行は市中心部の高層アーケード街に向った。流石にこの店は幻想国の店よりも品揃えが豊富で幻想国にいては手に入らないようなものまで販売されていた。

女子メンバーはやはり服などを見に行ったが海斗達は近くの書店に寄った、なお一時的に二手に別れているが会合地点はあらかじめ決められているのでよほどの事でもなければいつかは再会できるはずである。

「うーん、流石、外の本は幻想郷の本よりも種類が豊富だ」

「最近ようやく追いついてきたという感じですからね」

その豊富さは霖之助も亀梨も絶賛するほどであった。ただ海斗はパチューリが普段いる所に比べれば小規模だなと思いつつ店内を歩いていた。

（…やっぱりこういうのはあるのか、流石外）

彼の視界に入り、彼が呆れてしまったものとはいわゆる萌えキャラがでてくるアレ系のジャンルの物である。小説から漫画、雑誌まで種類は豊富、しかし海斗はそういうのに興味がないので軽くスルーをした。

「おい！海斗！」

海斗の事を大声で呼ぶ男がいた、眼鏡のあの男、外にやたらと興味を持っていた霖之助であった。彼は手に一冊の本を持っていた。

「どうした？」

「これを見てくれ、幻想郷と外では月の事情が違ふみたいだぞ？」

「そりゃ当たり前だろう？外じゃいわゆるファンタジーなものは常識という事になっているのだから。むしろ霊夢みたな巫女や魔理沙みたいな魔法使いや咲夜みたいなどこからともなくナイフとか危険な物を出して戦うメイドさんがいたら恐ろしいわ」

「なるほど、幻想郷だからこそ許される事があるのか、ふむふむ、いや実に外は面白い！いかに我々幻想人が無知であるかよくわかる！これはすばらしい！一生いても飽きないかもしれない！」

霖之助は人が変わったように喜んでいた。

まあ確かに彼のように興味を持つものであればいつまでここにいても飽きないだろう、しかもたかだか書店であるからこれから先いろいろな所に行くのでその際に霖之助がいろいろな物に張り付いてしまい、移動の支障になるのではと海斗は彼の事を危険視し始めた。

「これはこっちの科学の本……何！？こんなものがあるのか！？……これは現在の技術では複製はできないかもしれない」

霖之助は思った、これなら常識に使えるのでは？と。

しかしその為には実物を手に入れる必要があつた、まあ東京なら売っているだろうと彼は期待しつつ本を閉じてほかの2人と共に店を出た。

続いてはとある店に向つた、そこにはなんと日本海軍の第2種軍装が売られていた。

「海軍なき今、こんなの売っているんですな」

亀梨はちらつと海斗のほうを見た、偶然にもこの服を含め数着は試

着が可能であった。そして海斗はかつては帝国海軍の軍人である、当然似合うはずであった。

「自分に着るというのですか？」

「元々はそれだったでしょう？」

「…了解しました」

その後、海斗は第2種軍装に着替え、霖之助達の前に姿を表した。

「流石本物」

「ほお、あんたよく似合ってるなあ」

店の人にまで彼の軍服姿は好評であった、まあそれもそのはず、彼は幻想入りするまでは大日本帝国海軍大尉であった。航空兵ではあったがこの服を着る機会だった当然あった。

「ただし織本さん、その服で街中は歩かないでください」

「わかってますよ亀梨さん、現代日本では冷たく見られるって事ぐらいは」

海斗はすぐに今まで着ていた普通の服に着替え、第2種軍装を元の場所に戻した。その後も熊本市内を散策しあつという間に空が夕日に染められる時間帯になった。そこで海斗達はホテルにチェックイン、ちなみに見た目は豪華だが価格はそれほど高くない場所に一行は宿泊した。

この日の幻想郷で非常識になりそうなものの収穫は霖之助が書店で

発見した見えないものを見る、新型の高感度カメラである。実物は手に入りそうにないし彼としてもできれば実物はほしいがまあ情報だけでも大丈夫だろうと考えた。こうして日本旅行1日目は終了したのであった。

第一七話 非常識探しの旅 2（後書き）

御意見、御感想等お待ちしております。

最近忙しくなり気味でしかもネタ不足という地獄にきまりつつあります……

もしよろしければ感想欄かメッセージにてネタ提供をお願いします。

第一八話 非常識探しの旅 3

翌日以降も一行は日本の視察を行った。

例えば長崎でちゃんぽんというものを食べたりより現代的な路面電車に乗ってみたい、そして幻想国の船舶関係を支える外の企業の一つである佐世保重工の造船所を見学したりなど九州各地を回った。

特に海斗は九州出身であり一度だけ長崎に行った事がある。その際に一度だけ食べたがその味が忘れられなくなり戦争に突入すると「いつか、故郷に戻るかうまいものを食べる旅に出たい」と語ったそう。

長崎ちゃんぽんの歴史は思っているよりも古く明治中期頃に中華料理屋「四海樓」の店主であった陳平順が中国人留学世（その当時は清国人）に対して安くて栄養価の高い食べ物を食べさせるために考案されたというのが始まりであるとされている。

結果的に長崎ちゃんぽんはその後、長崎のご当地メニューとなり全国的に広がり今では多くの人々に愛され続け食べられているほどの有名な食べ物になった。亀梨曰く「長崎に行ったら一度は食べたいもの」だそう。

海斗は再び食べたいという夢を叶え、ほかのメンバーよりもおいしそうに食べていた。

「これおいしいね」

「だろ？俺のオススメだよ、幻想国でも流行らせたい一品なんだけど……劣化する可能性が」

「それなら心配いらないぜ？外から上手な奴を幻想入りさせればいいんじゃないか？」

つと魔理沙は提案する。つまりまた紫の力を借りようというわけである。

「そうやってまたスカウトがあつたわけでもなく幻想入りしてしまつて私の仕事を増やす人がでてくるのは魔理沙のせいなの？」

「そりゃないぜ霊夢、言つとくけど私は今まで一度も野心を持つて誰かを幻想入りさせた事はない…というかできないぜ？」

「まあ…確かにね」

「まあ、その事でしたら私のエージェントがどうかしましょうか？」

「え、エージェント？」

亀梨の代理人、その正体は不明だがかなりの能力を持つ女らしい。その正体は闇に包まれているのだが彼女の活躍によつて幻想入りを決意した日本人は多いとの事だ。しかしその活躍ぶりすら公には出しておらず一体どんな方法で説得するのかは一切不明であつた。

その後も長崎、佐世保を観光し今度はまた高速を利用して佐賀へ向つた。佐賀県は九州の北にある都道府県の一つであり陶磁器の産地として有名な唐津、伊万里などがある。なお現在の名称になつたのは明治時代の事で以前は「肥前」やら「佐嘉」と呼ばれていた。歴史も古く遺跡も存在している。

一行は佐賀であちこちを観光する、もちろん吉野ヶ里遺跡にも足を

踏んだが霖之助は不満を抱いていた。

「さつきから思ってるんだけど全然ハイテクとは関係ない所ばっかり見てないか？」

「まあまあ、東京とかまでは我慢しようぜ？」

「まあ…外は新鮮で楽しい事は楽しいが……どうも目的を忘れてしまいそうな感じがして…」

「心配しなくても霊夢は覚えてるから安心していいと思う」

「そうか？…まあいいか」

吉野ヶ里を後にすれば今日の宿泊地、鳥栖市に向った。

鳥栖市はかつて「鉄道の町」と呼ばれるほどであったのだが今では衰退している、それでも鉄道の姿を見る事はできるがこのほかには佐賀県第3の人口を有する事、歴史がとても古い事以外は特に目だったものなどはない。

その翌日も旅は続いたが特に目だった事はなかった、それよりもタイムリミットが迫りつつあったので福岡で亀梨の部下にマイクロバスを託すと鉄道や航空機を利用する事になり、福岡から今度はいきなり神戸空港へ向いその後列車で広島を目指した。

何故に広島に来たか、それは海斗の要望で呉に行きたかったからである。そのついでに平和記念公園にも寄ったのであった。

一応幻想国でも一部の者と外から移民したきた者であれば原爆という存在は知っている。特に軍部では実際に本物をかつてライデンブルクが健在である頃に実験農場で見たのである。

ライデンブルクで開発された原子爆弾は長崎に投下されたものと同

じレベルのものでありビキニの水爆や「爆弾の皇帝」と比べれば圧倒的に劣るのだがそれでも多数の人間を死傷させ街を壊滅させる事ができるほどの威力は持っていた。ライデンブルクはそれをスパシ―チェリに搭載し京都に投下する予定であった。

これは紫の死を意味するものである為故ボゴスロフスキーにも内緒の作戦であったがあと少し遅ければ幻想郷にこちらの世界では始めてである原子爆弾が投下される所であった。

さて話は戻って平和公園は繁華街から見て少し西側にあり、平和記念資料館を中心にして広がっている。

原爆に関する様々なものがあり、綺麗に整備されている為魔理沙、霊夢、咲夜、玲奈にはただの公園にしか見えなかった。

しかし霖之助は普通の公園とは違う所を早速発見した。

「海斗、あの廃墟はなんだ？」

「確か前に読んだ本によれば原爆ドームというものだそうだ」

「なるほど」

ここで霖之助は戦争関連の場所であると見抜いたのであった。そして中には知らないほうがよかったと後で後悔するかもしれないものがある事にもなんとなく感じ始めていた。

「ところで亀梨さん、咲夜達に館内を見せる必要があるのですか？」

「知らない事に越した事はないとは思いますが、どうせ幻想郷にも南洋界にも核兵器は既にあります。いずれは広く広がるでしょうね、それにアメリカスやロマノフでは秘密裏に核実験がされましたし」

公には知らされていないがこの2国では大規模な核実験を行ったと

いう、最近になつてはハルシュタットやゴールにイングランドもそれを行つてゐるのだという。幻想国も死の灰が降り注がない事を確認して自国の了解で小型のものではあるが核実験を行った、だが既に目撃情報があり被爆者もゐるのだから公に晒される日はそう遠くはない。ならば今知つてしまつたほうが後々楽であるかもしれない。

亀梨はそう思つたのである。それに外では核戦争にはならなかつたがこつちではまだまだ人の心が成長しきつていない為本格的に核戦争になる可能性だつて今の外よりも高いのである。

そうはさせない為にもあらかじめ知つておくべきだろうと、亀梨は考え海斗に説明したのだが海斗はあまり乗り気ではなかつた。咲夜、魔理沙、霊夢の3人ならまだしも7歳の玲奈には早すぎるのではないかと彼は思つたのであつた。

それでも一行は館内に入つた、一つ一つをくまなく見れば2時間ばかりかとされている、2時間後一行は出口にやつてきたが玲奈は顔が青ざめ、今にも泣きそうな表情をしていた。

「おい、大丈夫か？」

「お父さん……」

（ほくら亀梨さん、やっぱやばかつたんじゃないか？）

彼は心の底でそう思つていた。

しかし以外にも霊夢と魔理沙と咲夜は楽しそうではないのだが平気な様子であつた。まあ元々残酷な話も多い幻想郷で暮らしていたし多世界大戦も経験したのだからそれなりに耐性はあるのだろう。

「……海斗、お前は原爆とやらをどう思う？」

そう海斗に質問してきたのは霖之助である。

「俺は空軍の軍人だ、だから絶対ダメとは言えないし落せと言われれば核を街に落す覚悟はできている」

「嫌ではないのか？」

「嫌に決まっているが、やれと言われてやれないのは軍人として失格…アメ公のような事を言っているって嫌われるかもしれないけど事実戦争に正義も糞もない、ただ勝ったものが歴史をつくる。前もそうだったろ？いかにも相手のほうが悪者というふうに歴史は書き換えられたが逆にこっちが負ければこっちが悪者というふうに歴史は書き換えられる。だから本当の悪や正義というものはない、それが俺の考えだ」

「なるほど、兵隊やつてるのも大変みたいだな」

「大変だからこそ遣り甲斐がある、それに守りたい人がいるんだからなおさらやめられない」

「守りたい人が……どこの国にもいるのか？」

「いるだろ、普通に」

海斗はもちろん国防の為もあるのだが国防の為というよりも愛する人を守る為に戦っていた。その為ならばどんな任務でも遂行するという覚悟はあった。しかしここでは語らなかつたが彼は「原爆は一瞬で人を吹き飛ばしたりできるがそれでは卑怯な兵器である。戦とは自らが戦うものでありたつた1発の爆弾で全滅させる事など戦いのうちには入らない、それに後々の処理が面倒であり核など外交上の武器にしかない。しかし幻想国のような小さな国には外交で

勝つためにもそれが必要である」と思っている。

人それぞれ、価値観は違うが海斗にも海斗なりの価値観があるのである。

原子爆弾をどう思つかも人それぞれである。

第一八話 非常識探しの旅 3（後書き）

御意見、御感想等お待ちしております。

第一九話 非常識探しの旅 4

その後、一行が向った先は呉であつた。

呉といえば海軍、ほとんど海斗が来たかつたから来たようなものである。

ただし咲夜と玲奈と魔理沙と霊夢はあらかじめ会合地点を決めておいて広島街を見回す事になった。その理由は「原爆の次にまた戦争ネタ？」と咲夜からクレームを受けたからであつた。軍人の妻といえども子連れでほかにも女の子がいるのでそれなりに咲夜も氣を使っているのだろう。

「ようやくついた、ここが呉かあ」

霖之助は期待していた。

今度こそ非常識が来るだろうかと、まあそんな彼の期待を裏切る場所へこれから行くのだが。

「どうです織本さん？あそこに行く感想は」

「出来る事なら関の奴も連れて行きたかつた」

関はかつて通信参謀であつたが長門に乗り組んだ事もあり山本長官の顔も見た事があるほどである。またそれ以前から呉におり最後も大和に乗り組んでいた（その後水偵で飛行中に遭難、天界でひどい目に遭つてから幻想入り）為呉にはそれなりの愛着があり第二の故郷であると思つているほどである。

そんな彼が呉に訪れたら目の色を変えてあちこちを回るだろう。

呉とは戦前、海軍工廠にて戦艦「大和」などを始めとする大日本帝国海軍の艦艇が建造されさらに東洋一の軍港と日本一の工廠があった。その造船技術は勿論高く軍需鉄鋼研究の拠点でもありその為か戦争末期には目標にされ米海軍に攻撃され、大被害を被りまた終戦間際には空襲を受けて多くの艦艇が呉の軍港で身動きが取れぬ状態で存在していたがそれ以前から燃料不足などで艦艇は身動きがとれなかった。

現在では鉄鋼関係は大手鉄鋼メーカーに引き継がれ軍事面では海上自衛隊の基地があり人員も6000名を超えるほどである。ちなみに旧海軍呉鎮庁舎は呉地方総監部第一庁舎として使用されており日曜日には一般公開されている。

ちなみに幻想国で最大の軍港は一月島にあるもので現在は多数の艦艇が停泊している。また大幻想戦争中、外の世界ではする事のなかった大活躍をした戦艦大和も今では記念艦として軍港の片隅に保存され人々に愛され続けていた。多世界大戦では46cm砲の威力を余す所無く発揮し敵の艦艇撃沈に貢献している。

そんな大和の姿が見れるがやはり艦艇現役で動くものに勝る物はない。建国記念式典の際には軍港の一部は一般公開され観艦式も開催され、前大戦では大西洋の戦いの主役を担った幻想海軍の今の勇姿をこの目で見る事ができる。一月島の軍港は今では幻想国最大の海軍工廠が存在しここで建造された艦艇は今も幻想海軍で活躍している。また関少将の艦隊に所属する艦艇の改装工事も行った。

一月島は軍事はもちろんその他のあらゆる分野で幻想国にとっては重要な拠点となっている。

しかし一月島以外にも幻想海軍にとっての重要拠点は数多い、例え

ば紺碧諸島には予備役艦隊（予備役艦艇が多数停泊）が、さらに多数の駆逐艦も停泊しており空母機動部隊の養成も紺碧諸島で行われている。ミヤコフ諸島も重要拠点で関の艦隊の母港があり中でもミヤコフ島は製油所、工場もある。多世界大戦ではこの製油所を巡り壮絶な玉砕戦が行われた。

さて、彼らが向った先は大和ミュージアムと海自史料館である。中に入ると1人喜ぶ者がいた、確かに非常識ではないものの外の世界がどれほど進んでいるかをこの目で見れる場所であるからだ。

「すごい！この艦は数年前まで幻想海軍では現役ではなかったか？」

（…まずい、ある日突然艦体が行方不明になってしまったとかいう記述がある……）

霖之助が喜ぶ中、海斗と亀梨は気まづくなっていた。

大和の艦体がああ海域から突如消えたという記述があるのである。それもそのはず、大和は今建造された時と同じぐらいの美しさを保ちつつ一月島で身を休めているのである。

しかし逆に考えれば大和はとてでもないが日本人には見せれないものであった。しかしもう遅い、使節団の一部は既に一月島入りしており海自関係者は軍港の視察も行っていた。それに大和は記念艦として一般公開されているので誰でも一目みる事ができる艦であった。

ここにある大和は10分の1スケールではあるもののそれでもかなり巨大な模型であった。それに大和だけではなくその他にも様々な物があるのだ。たとえば海斗には馴染み深い零式艦上戦闘機もこの

ミュージアムの中で見る事ができる。

「噂をすればこれは織本さんのかつての愛機では？」

「うむ、これももう博物館入りか、うちの国でもつい数年前までは前線で戦っていたし海軍じゃ地方の防空隊には未だに配備されているのにな」

海軍の地方の防空隊には未だに零戦が配備されている…っが古参機故に故障も多くなり早く新型機に取り変えてくれという具申が毎日のように届いてくるらしい。

さらに戦後も生産され主に小国の空軍に配備されている。ロマーニヤもファイアットでライセンス生産を行っておりG・O艦上戦闘機として海軍航空隊の主力戦闘機として運用している。なのでもし戦争が起これば自分の軍隊で使っていた航空機と対戦する事になるのである。

その他、そこそこの性能がある事と実戦での戦果から世界中の小国が1機はこれを運用しておりなんだか言いつつ零戦は現在までに5000機が生産されている。さらに日本での記録も加えれば相当数が生産された。

大和ミュージアムにはこのほかにも技術関係の資料もあり霖之助はそのほとんどに興味を示し、最後にはこんな感想も言っていた。

「外の世界はすごい…これが何十年も前のものなんて信じられない。幻想国ではつい数年前、いや、今でも主役の座から追い出されながらも存在しているものだというのに……俺の知識は本当に浅かったのか…これは東京が楽しみだ。何があるんだろうか？」

「ははは、森近さん、私は元大学教授ですので仲間に頼めば大体の物は入手できますよ?」

「本当ですか?では東京に到着したらよろしくお願いします」

続いて一行が向ったのは海自史料館である。

どちらかといえばこちらが本命であった、海自はこれからの幻想海軍の参考の一つでもある。なので海軍でもよく研究されている組織の一つである。

その後、一行は入館する。佐世保が水上艦艇で鹿屋なこう食う気ならば呉は潜水艦と掃海である。そしてこの場所には何故かあの男が立っていた。

「閣下!」

「ん?... 豊崎大尉!？」
とよさきだいい

本名は豊崎茂、大幻想戦争中に少尉↓中尉に昇進し今では大尉、大園晃少佐に変わり海軍陸戦隊明治島警備隊長を勤めている。今日はいつものものではなく第2種軍装を着用しており外の人(日本人)は「ああいう人なのか」という感じで彼の事を見ていた。

海斗とは海斗が昨年紺碧諸島を視察した際に会ったのが初めてでありその際に島々の案内を行ったのが彼である。

「お久しぶりです」

豊崎は異世界出身の海軍少尉であったが幻想入りしてしまいいろいろあって幻想軍に協力したうちの一人である。なので異世界(我々

の)日本がどのような場所になっていたのか物凄く興味を持っておりいつかは行ってみたいと願っていた。

「久しぶりなのはいいがどうして豊崎大尉がここに？」

「はい、伊藤長官直々の頼みでして外の世界の視察に来たのです」

「軍装姿でかい？」

海斗は半分笑いながらそう言った。

「やっぱ、まずかったでしょうか？」

「いや、それだけだとバレはしないと思うから大丈夫だ」

幻想海軍の軍装は基本的に日本海軍である。

海軍上層部が日本海軍出身者か自衛隊出身者である為、当然参考となる海軍は日本の海軍であるからだろう。しかし日本海軍の反省から対潜戦略にはかなり力を入れている。

「しかし……いい潜水艦ですね…まだあんな潜水艦、研究中って話しか聞いてませんかからね」

涙滴型潜水艦はまだ幻想海軍には存在しないが研究が行われており既に建造が開始された。伊。。。となるかそれともほかの艦艇同様に立派な名前がつくかはまだ未定である。

ミサイルの搭載予定はない、そもそもミサイル自体がまだ未熟な段階で関の艦隊に所属する艦の対艦ミサイルも射程距離は短く100%命中するとも限らない。

ぶつちやけていえば関の艦隊は巡航ミサイルによる対地攻撃向きの艦隊でありまた海戦をする際には他の艦隊の補助役であった。それでも試験的とはいえ最も先進的な艦隊として重宝されている。

さて話は戻るが一行はこの海自史料館を見回った。

霖之助は先ほどよりも新しいものがあつたりするので目の色を変えて館内をくまなく見ていた。海斗と亀梨も、特に亀梨は知らない事も多くそこそこ楽しめたという。

また豊崎は自分よりも潜水艦関係者が来たほうがいいだろうと思いつつ館内のあらゆる場所を見て最終的には一行は潜水艦「あきおし」の中に入った。

「あきしお」はつい最近退役した潜水艦で現在では中を見学する事ができる。ここでは潜水艦の構造を実際に「見て」、「触って」、「体感する」という貴重な体験ができるのである。

海斗も潜水艦には乗った事がないので珍しいものを見る目で館内を見ていた。

「……見て見てママ！あの人！」

「あ、見ちゃいけません」

「……おい豊崎、お前コスプレイヤーかなんかだと思われてるぞ？」

「気にはしませんよ」

「そ…そうか」

その後も一行は呉を満喫、その後広島に戻り霊夢達と会合すると次

の目的地、東京を目指した。

第一九話 非常識探しの旅 4（後書き）

御意見、御感想等お待ちしております。

この一行に東京で少し事件に巻き込まれてもらおうと思っています。

第二〇話 非常識探しの旅 5

翌日、何故だか豊崎大尉も加わって一行は東京に来ていた。

現在一行は羽田空港に来ているのだがこれまで訪れたどこよりも都会らしいこの場所を見て一行（特に日本に初めて訪れた咲夜除く東方陣と豊崎大尉と玲奈）はなんともいえない圧迫感に圧倒されていた。

「久々に来ましたがやっぱり都会ですなあ東京は」

亀梨はかつてを懐かしがる感じでそう言っていた。

「思ったよりは変わってませんね」

「そりゃあ数年ちよつとで変わるのはめずらしい事ですよ、幻想郷は変わってしまいましたかね」

「…さて、どこに行きたい？」

「秋葉原！！！」

つと大声でいったのは霖之助であった。

確かに秋葉原には幻想郷での非常識が隠れているかもしれない……
つが霖之助には別の狙いもあった。実は霖之助、大のアニメファンで日本のアニメは良作はもちろんオタクを自称する為に糞も含めてすべてのアニメを見ているという。そんじょそこのアニメオタクとは訳が違うのであった。

そして…ゲームも大好き漫画も大好き普通のから同人誌まで大好き

とある意味どうしようもないお方であるがこれでも財界の者で今や幻想国には欠かせない人物の1人である。

「……まあ、行つて損はないだろう」

海斗は流石にあれから何年も経っているんだからオタクも減つてるだろうと思ひほかのメンバーと共に渋谷秋葉原へ向つた。霊夢や魔理沙は霖之助とのつるみによつて秋葉原が大体どんな所かは知つてはいるし咲夜も話には聞いた事があるが玲奈と豊崎にとっては初めての場所である。

特に豊崎は異世界の事なら知つていてもこの世界の事については無知同然である。なので日本がどのように発展しているのかについては非常に興味を示していた。

一行は東京モノレールに乗り浜松町へ、その後山手線に乗り換えて秋葉原へ向つた。

鉄道は幻想郷においても発展途中である。地方に行けば戦後すぐに開通した地方の小さな私鉄なども存在している。

モーターゼーションがそれほど進んでいない為、各地でかつて日本でも見られたような鉄道を見る事ができる、しかも鉄道車輛までもが外来人の影響がかつての日本風のものが多い。国鉄ではそれなりに新しい車輛も走っているが地方の私鉄などでは今では貴重な吊り掛けの車輛やレールバスなど、一昔といつてもまだ昔であるかのような車輛も未だに現役で走っていた。

道路もまだ十分に整備されておらず、車の数がまだ少ない幻想郷において鉄道は人々にとって欠かせない重要な乗り物であった。趣味としても発展中である紫と元男爵の西拓郎の間に3年前生まれた恒

仁（拓海と名乗る場合もある）親王という男の子も3歳なのでよくはわかっていないが一度見るとなかなか離れない事から鉄道が好きな様子である。

しかし発展途上の幻想国の鉄道とは外の鉄道は違った。

外ではとつくの昔に鉄道大国になったのだがモーターゼーションが進み鉄道の利用客も減り廃止に追い込まれる鉄道がいくつもあった。特定地方交通線と見なされた鉄道などかなりの鉄道路線が廃止に追い込まれ北海道では本線が廃止となったりつい最近にはピーチライナーという新交通路線が廃止になるくらいである。

それでも都市では路面電車が見直されつつあり広島などでは新型の車輛が投入されたり札幌では札幌駅まで延長の話があったりなかったりと事だ。

それでも鉄道が車より不利に見えるのは以前から変わらず油断はできない状況である。

一行は浜松町から山手線に乗り換え秋葉原へ向った。

もちろん豊崎や霊夢達がこの場所がどうなっているかなどは知らない、しかし亀梨は嫌な予感してしておらず霖之助はこれからいいものでもみるかのように目が潤っていた。

そして一行はとんでもないものを目撃したのである。

「な、なによあれ！」

霊夢は見えてはいけないうようなものを見てしまったという表情で秋葉原のとある場所に驚いた。

「……織本少将……なんですかこれ？」

「知るか。俺に聞くな…まあ霖之助の奴は喜んでるがな」

それもそのはず、ちょっとお店を除けば元帝国軍人の2人には見るだけでも恥ずかしいような絵、さらに見てて痛いアニメやゲームのキャラクターのコスプレをしている人、そしてお仕事とはいえ見て痛々しいメイドさんがそこら中にいるのである。

(…め、メイドなら咲夜には敵わん！)

海斗は頭の中でそう勝手に決めつけていた。

「っで、結局私達何しに来たんだ？」

「非常識探しでしょ？」

「おっとそうだった」

「まったく…なんかもう面倒になってきた……」

「キャー！！！！」

「何！？」

その時、背後から何か叫び声が聞こえ、あまりのうるささに趣味の世界に入っていた霖之助も足を止めた。

「なんだ？」

グワーン！！

突如として爆発が起こる。

詳細はまだ不明である。

「豊崎大尉！亀梨さん達を頼む！」

「えっ？…ああっ了解！！」

何がなんだかさっぱりわからないが、現場に行けばなんとなくわかる気がする、海斗はそう思った。しかし海斗だけでは危険と感じた3人が協力しようとした。

「海斗、私も行く」

「異変かどうかはわからないけど、面倒事は博麗の巫女が処理するわ」

「久々に腕が鳴るぜ！」

「…よし、わかった」

海斗があっさり許可したのも霊夢も魔理沙も咲夜も戦いのエキスパートであって軍人の海斗を張る力に上回る実力を持っているからだ。4人は亀梨と玲奈を豊崎と霖之助に任せて現場へ向った。爆発地点には埃が宙を漂い煙のように視界を遮っていた。

「怪我人は！？」

「誰か救急車と警察を！」

そんな声が周囲から聞こえてくる。

「…んっ！？」

なにやら鞆を持って逃げる怪しげな男2人がいた。

「海斗、もしかして？」

「奴らかもしれん、待て！」

「！？」

海斗がそう呼びかけると男達は逃走を計り加速した。

「やっぱりね」

皆睨んだ通り、男達が犯人である可能性が高い。

男達を追跡していると気がついたら路地裏に回りこむが行き止まりに来てしまい男達は逃げ場が無くなる、戻ろうとしても4人が道を封鎖していた。

「貴様らは何者だ？」

「敵に情報を教える愚か者などおらん！！」

すると相方と思われる男が発砲しようとしてきた。

突然拳銃を取りだし、引き金を引こうとしたその時、咲夜が無数のナイフを突然と用意しそのうちの3本を男に対して投げつけ両肩と男の弱点に刺した。特に後者を見た海斗は攻撃を食らってもいないのに何か痛い感じがした。

「ぐおおっ……」

「おい！！アッバティーニ！！」

「アッバティーニ？……国籍をきこつ」

「誰が言う……ひえっ！！」

咲夜が瞬間的に男の背後に回りナイフを突き付けた。

「さて、嘘を言うとザクっ……ですよ？」

「あ……ああ……ろ、ロマーニヤ人です……まあどうせきいた事もないだろう？」

「我々は幻想国出身でこちらは博麗の巫女、博麗。こっちが付き添いの霧雨、こっちが自分の女房で自分は幻想空軍少将の織本という者だ」

「く、空軍少将！？……ああ……」

男はもうダメだと思い肩を落した。そんな彼を見ても海斗はどうとも思わずに次なる質問をした。

「何をしていた？」

「……破壊工作だ。政府からの裏金でな、幻想国の影の重要拠点であるここを破壊してこいという命令だ」

（なるほど……ロマーニヤの工作員か）

海斗は本当にあのムッソリーニという、外の世界にもかつてそのような名前の独裁者が存在していたがそれとは無関係の人物であるがどっちにしる独裁者である男が本格的に動いているという事を、こ

の目で見ることが出来実感したのであった。

その後男の身柄は密かに幻想国に移送され、また今回の非常識探しの旅も無事に終了した。

その結果、ふざけているように見える霖之助もよい収穫をしたという。帰国後、早速結界の修復作業が行われ幻想郷での非常識がそれまでよりもレベルアップし、これからもある程度の進歩は大丈夫となった。

彼に問題になるレベルになってもまた外から非常識となり得る物を持つてくればよいだけ、博麗大結界の異変は幻想国の対日政策を変えてしまうほどの異変であった。

第二〇話 非常識探しの旅 5（後書き）

御意見、御感想等お待ちしております。

第二一話 遣日潜水作戦

博麗大結界の異変は霖之助が東京で発見したある物によって結界の修復が行われその作業は結界がかなりのダメージを受けてはいたものの3日で終わった。

また幻想国と日本使節団による交渉は「裏の国交」を行う方向へと向っていた。裏の国交とは夜間に日本側は日本製の製品、幻想国側は食料、石油を輸出し共に技術者を派遣し合うというものだ。

問題はルートであるが陸路では行動がしづらくなるという事から海路という所が選ばれた。確かに人目の多い陸地よりも電探などからでは丸見えではあるが大勢の人が見ているよりはマシである。また大型艦については航行回数を制限、潜水艦による隠密輸送が行われる事になった。

1週間の間に幻想海軍で話し合いが行われ軍令部の山本総長は数隻の潜水艦の手配を約束しすぐに準備に当たらせた。境目は東シナ海、太平洋にそれぞれ2個所ずつ計4個所に設置され何れも人里離れた地域に設置された。

8月6日、初の『遣日潜水作戦』が発動されたのである。

最初に遣日潜水作戦で日本に派遣された潜水艦は新鋭潜水艦が竣工すれば退役となる伊25潜水艦、艦長は村紗水蜜少佐である。

陸海空軍の将校とある極秘情報が載っている冊子などを搭載し夜の一月島を出撃、目立たないよう紺碧諸島明治島付近に設置された境目を目指し伊25潜水艦は夜の大西洋を静かに航海した。

この艦は元日本海軍所属艦で幻想海軍創設時から潜水艦部隊の主力を担い大幻想戦争では主に通商破壊、隠密輸送、索敵などに従事し

戦後も艦艇不足により速力向上の改修を受けつつ第1線に残りつい最近ではタラントを偵察、さらに領海侵犯してきたロマーニヤ艦の追撃（海戦には至らず）を行った。

「面舵30度、両舷前進微速」

「面舵30度！両舷前進微速！」

「おもーかー（じ）！！」

闇の中を潜水艦はひそひそと航行する。

「よし、とりあえず境目まではただの船旅ね。境目を突破したら潜航よ」

「潜航するのですか？」

「当然、じゃなかったら潜水艦を使う意味なんてないよ？」

「まあ…確かにそうですね」

やがて紺碧諸島明治島近海に到着、にとりが開発した特一号電探によつて境目は丸見え、難なく突破した。特一号電探は境目に働くならかの力に電波を発信しそこから跳ね返ってくる特殊な反射波を測定する事によつて境目の存在、距離、方向を明らかにする特殊電探である。

境目を突破すれば今回は佐世保の自衛隊基地が目的地、秘匿性を高めるべく水蜜は潜航を命じた。

「潜航用意！」

「潜航用意！」

艦内のタンクを操作するハンドルに兵士が取り付き、またハッチがしっかりと閉鎖されているか確認がされた。

「ハッチ閉鎖確認！潜航いつでも可能！」

「潜航開始！深度90m！」

水蜜がそう叫ぶと兵士達はすぐに行動に移った。

「了解！全バラストタンクに注水！ディーゼル機関停止！電池へ移行！潜航！」

「総員艦首に移動！」

「走れ！！」

ドイツのUボートの映画のように水兵達は艦首へ走っていった。

この命令が出たらたとえ排便中であっても移動しなければならない、特に女子乗組員には屈辱的であったが男子乗組員には天国の時間であるかもしれない。

しかしそのようなトラブルは非常に少なく特に問題はなかった。そもそも「普通潜水艦に女子は乗せるか？」という疑問もあったが人員不足の幻想軍ではそれが許されたのであった。他国の海軍からは「何故そうなった!?」「羨ましすぎる！」という評価を受けている。

やがて深度90に到達すると潜水艦は一端停止、前進を始めた。

「よーそろー！」

「ここから慎重に行かないと、幻想国と日本の関わりがバレちゃうね」

「ええ、しかし外の技術ですからもう既にバレてるのでは？」

「わからない、ただ潜水艦なら普通の艦船よりは安全だわ」

伊25は東シナ海深度90mを航行、やがて深度をあげていき、午後11時53分、潜水艦伊25は佐世保に到着した。

「浮上！」

伊25は浮上、その付近には自衛隊の護衛艦「あしがら」がいた。

「あしがら」は2008年に竣工した艦であるが時間的に言つとこの世界の場合竣工からかれこれ9〜10年が経過している。

それでもまだ10年、現役であつた。

「あたご型護衛艦より発光信号！我に続け！」

「返信、貴艦の誘導に感謝する」

お互い発光信号で連絡し合う。日本と幻想国の密かな国交は国と自衛隊と一部しか知らずもちろん公にはされていない。

やがて伊25はゆっくりと自衛隊基地に入港した。

「第2護衛隊群の津田政晴海将補です」

「第1潜水艦隊所属伊25艦長の村紗水蜜少佐です…よろしく願います津田少将」

「…女性艦長？なんだか違和感を感じるが…まあそれより自分写真でしか見た事はないのですが…まるで本物の伊25のようだ…」

「元々帝国海軍所属の艦でしたので、我が海軍創設の歴史を辿ればどうしてこの艦が幻想海軍指揮下に入ったかわかりますよ」

そういつて水蜜は津田に一冊の本を渡した。
幻想海軍のこれまでの歴史を書いた本である。

「ほう……つまり外洋諸島たるものは後から発見してもので領有の決まっていない場所でしたのか」

「ええ」

津田海将補は幻想国の歴史に興味を持っていた。

「あ、少将。この事は公には内緒ですので」

「心配はしなくても国から言われているので艦長らの事は絶対に言わない、それだけは約束する」

「お心遣い感謝します」

その後、重要書類、冊子などを持った陸海軍将校数名と一緒に同じ

く極秘情報（ただし外の世界では極秘にする必要もないような代物）が載っている重要書類、そして視察用として陸海空自衛官6名が加わった。

「陸上自衛隊1佐の本間です、こちらは3佐の高橋です」

「海上自衛隊2佐の辻本、こちらは部下の千歳です」

「航空自衛隊2佐の黒澤、こちらは部下の山口です」

「第1潜水艦隊所属伊25艦長の村紗水蜜少佐です。早速ですが身体検査を行わせていただきます」

「わかりました」

身体検査は怪しい物を持っていないかを確かめる上で非常に重要であるが自衛官6名は流石に冷静で物事を素直に受け止めてくれ、検査はすぐに終了した。

「貴官らが安全である事を確認しました。これより幻想国一月島までお運びさせて頂きます。少々狭いのですが潜水艦である故我慢して頂きたいと思っております」

水蜜も重要な場面では軍人らしい所を披露した。

「わかりました、ありがとうございます」

「出航用意！急いで、早くしないと日が登る！」

「出航用意！」

「それではこちらへ」

「了解しました」

その後、自衛官6人が乗艦すると自衛官6人、及び艦長の水蜜と数名の水兵達は帽を振った。陸自と空自も海自（海軍）の仕来りに合わせて帽を振った。

「帽振れえ！」

水蜜達はすぐに仕事を終え伊25は一晩もしないうちに佐世保を出航、幻想国への帰路を辿った。

「潜航用意！」

「潜航用意！！」

「では皆さん、潜航しますので艦内へ」

「わかりました」

6人と数名の水兵達を艦内へ入れ水蜜自身も艦内に入り水兵が作業を終えると伊25は潜航を開始、深度を深めていきやがて再び特一号電探を用いて境目を越えた。

こうして1度目の遣日潜水作戦は成功したのであった。

第二話 遭日潜水作戦（後書き）

御意見、御感想等お待ちしております。

第三二話 マダガスカル進駐

第一次派日潜水作戦が終了し一月島に帰ると軍港は慌しい様子であった。

水蜜は偶然目に入った航空母艦「千鳥」艦長杉山誠一郎大佐にこの騒ぎの原因を聞きだそうとした。

「ん？君は？」

「伊25艦長村紗水蜜です」

「千鳥艦長の杉山だ、この騒ぎかね？」

「はい」

「実はだな、ローマーニヤ軍がマダガスカルに進駐を始めたんだ」

「し、進駐ですか？」

ここの所海軍ではローマーニヤの動きが怪しいと睨んではいたが戦争中ではないので活発な行動をとる事ができなかった。それに当時はローマーニヤがどのような目的で動いているかすら情報がなかった。しかし今回の一件でそれは判明、マダガスカルへの進駐である。

マダガスカルは多世界大戦の激戦地で幻想海軍も停泊中のライデンブルク軍艦艇を空襲しに機動部隊を接近させた事がある場所である。現在では独立しマダガスカル共和国という主権国家が誕生しているが小国故に大国には逆らえずこのような結果になってしまったのだらう。

この進駐について神聖ロマーニヤ帝国皇帝ムツソリーニは市民、そして世界の人間に対して演説を行い、その肉声は全世界のラジオで聞く事ができた。

「全世界の諸君！今回我が神聖ロマーニヤ帝国はマダガスカルへの進駐を行った、だがこれは侵略ではなくマダガスカルとの正当な交渉によるもので我が軍はマダガスカルの防衛を手伝う事になった。我が神聖ロマーニヤ帝国には国際平和に向けて戦争が起ころぬよう、各小国を防衛する。その義務があるのだ」

対立している相手の国に大国の軍が進駐しているとそこを攻撃すれば相手はもちろん大国も宣戦布告を行いおまけにその大国は自国の領土にも進駐している為、国家はすぐに滅ぼされてしまう危険性があつた。これなら戦争が起る可能性も減る…とロマーニヤは考えたかのように見せかけたが実際はロマーニヤ帝国の復活を目指して覇権を得るために行った行動に過ぎなかった。

この翌日よりマダガスカルへ武器の輸出を行っていた幻想国がロマーニヤとの交渉を行いマダガスカルからの撤兵を要請した。アメリカスは経済制裁を加えたが幻想国はそのような事をしなかった。危機的状況に陥らせてしまつてはむしろ戦争を引き起こさせてしまう可能性が高いからだ。それをすでに身をもって体験した者が幻想国の中にいる。

だから幻想国は経済制裁を加えようとはしなかったのである。しかしその一方で三千院内閣は本格的な戦争準備を始めようとした。開戦を早くて翌年と予想し本格的な軍備拡張を開始したのである。

マダガスカル進駐はロマーニヤにとっては利点があった。

丁度この島は北と南の大陸、東西の大海原の中継地点に位置しこの島を押える事は制海権の確保に繋がるのである。さらに島には一応独立国であった為人もある程度住んでおりインフラもある程度整っている。小規模ながらアメリカス、イングランドの旧式艦により編成された海軍もあつて軍港も利用可能であつた。

おまけに工場もあり大国からは離れている。まさに南洋版マダガスカル島は自然の大要塞であつた。多世界大戦でも英扶軍はマダガスカル駐屯のライデンブルク軍を相手に苦戦した。補給がその場で出来るからだ。

ここを配下に押える事〃海の覇者と言っても過言ではない、ロマーニヤは早速この地で艦隊を整備しようとしていた。

この出来事は陸軍の頭を悩ます事となった。南洋…という幻想国の異世界の呼び方に従い南方軍と命名され創設された現在総数25万の大軍の司令官に任命されたアリス・マーガトロイド陸軍大将（昇進）と参謀達は本日、会議を行った。

「閣下、現在マ島にはロマーニヤ軍3万が揚陸中、今後も増援が予想され総兵力は8〜10万ほどにまで上ると予想されます。今のうちに叩けばさほどの抵抗を受けずには済みますが…そういうわけにもいかない…ですな？」

「あたりまえでしょ。ロクに戦争準備も出来ていないのだから今やつても負けは必然、ようやく内閣が動き出したみたいだけど開戦は来年と見ているようだし…この分だと開戦となる頃にはマ島は少なく見積もっても8万という大軍によって要塞化されているはずだわ。特にこういった島の戦いは上陸して叩くのは陸軍でもそれまでに妨害する敵を排除するのは海軍…つまりもしやるとすれば今回

の戦争は海軍力がものを言うわ。海軍がへまをすれば陸軍は勝てない…対ロマーニヤ戦はそんな感じになると予想する」

「問題は補給ですな」

「一応輜重兵の役目をこなせる人形を密かに開発中なんだけど残念な事に戦場は島……輸送艦の足が遅い事ぐらい私だつてわかっているから相当の難問ね……ほんとこれだつたら天界方面軍の司令官になつたほうが楽だつたかも」

「自分も、そっちの参謀となつて戦つていたほうが楽だと今頃感じています」

「まあその分天界軍はロマーニヤの比でないほど強いけどね」

幻想国の戦争準備は着々と進められていたが天界方面軍は兵力不足を訴えるのみであつた。しかしほかにはほぼ不備はなくやはり対ロマーニヤ戦を担当する南方軍は苦勞する。

まさに今度の戦争、幻想国は大東亜戦争時の日本状態であつた。しかも日本軍よりも遥かに補給などの兵站を重視する幻想軍ではまずそちらの問題を最優先に扱い非常に苦悩している。

幻想国が発展したといえどもその国力はまだまだ低い、前大戦では同盟国の全面的な支援あつての勝利であつた。だが今度はロマーニヤに最も近い強国である幻想国がもしかすると単独で作戦行動を行わなければならないかもしれない時、そうなると勢力を広範囲に広げるロマーニヤとの戦争は簡単ではなくなってしまう。

「満足な補給が受けれるかどうかという問題に加わり我が軍は少数兵力、開戦頃までにはかなりの人間が増員されるはずだけれどそれ

も大半が天界方面軍に行くものと予想され、我が南方軍には少数の増員しかこないものと私は睨んでいるわ。補給と兵力の不足、この2つの大きな問題を抱えて戦争を遂行する」

「……っということはあまりド派手にはドンパチできませんな」

「おそらく最初はロマーニヤが攻勢に出るわ、米領の島は攻略されマサール島上陸の可能性もある」

「上陸されたらどうするのですか？やはり水際で？」

「いえ、中に引き込んでから撃滅する。そのほうがおそらく効果があるわ……ただ、ロマーニヤの攻勢は長くは続かないと予想できる。流石に我が国よりは大国であると思うけどそれでも列強では最弱、ライデンブルクよりもあっさり折れると思う。それに軍備拡張も1月1日までに終わると思えないから開戦後半年、そこでようやく我が国は反撃に転じられると思う。反攻作戦としては基本的に島の攻略が我が南方軍のメインになると思うけどまず行うのはロマーニヤ本土と我が外洋諸島の中継地点に位置するスラバダ諸島攻略ね」

スラバダ諸島とは大小数え切れないほどの島が存在し8割はロマーニヤ領、2割がアメリカス領で隣には全て米領となっているアゾレス諸島がある。

スラバダ諸島には貴重な油田が存在しロマーニヤ最大の製油所が存在するロマーニヤにとっては生命線であって最重要拠点であった。従ってロマーニヤの戦争継続能力を削る為にもこの攻略は必然であった。

その為ロマーニヤはスラバダ諸島を8万の兵士で守る予定である。

対して幻想軍が用意できる兵力は最高でも5万ちよつとである。数的に不利であつた。

続いての幻想軍の攻略目標はマダガスカルである。こちらに精々5万が限界である。もし開戦となつた場合どう対処するかの会議であつたがその結論は簡単に成し遂げられるものではなかつた。

幻想軍に求められるものは旧日本軍が敢行した南方作戦のようになん少兵力で素早く確実に作戦を遂行し早期に目標を攻略する事である。

第三話 マダガスカル進駐（後書き）

御意見、御感想等お待ちしております。

第二三話　白幻合同演習

急速な人口増加、急速な様々な分野での発展を遂げる幻想国。そんな幻想国でも今最も著しい発展を遂げているのは迷林市である。迷林市は帝都よりも人口が多く経済の中心地でもあるがその迷林市の発展が今、目覚ましいほどであった。

その理由は簡単である。6956年、6年後のオリンピック会場にこの迷林市が選ばれたのだ。その為競技用施設から選手村、公共交通機関などのインフラストラクチャーや観戦客を受け入れるためのホテルに至るまでの整備が進められた。またこれらは迷林市のみならず幻想国中に整備される事になり結論としては迷林市のみならず幻想国の各地が発展途中であった。

オリンピック開催による経済効果はかなりの期待があり幻想国はなんとしてでも大会を開催する構えであった。戦争にでもならなければ絶対に中止にはさせない意気込みである。

そんなある日、幻想軍12人と陸上自衛隊12人による合同演習が行われた。陸上自衛隊はかつてこの方法で韓国軍に惨敗したという経験を持ち、ましてや相手は時代的に韓国よりも後れた軍隊である（幻想郷、南洋界においては先進国）。自衛官達は意地でも負けられないという気持ちが強かった。

また幻想兵もたとえ相手が進んだ装備をしているとはいえ、あくまで自衛隊であり軍隊ではないので軍隊でない組織には惨敗したくないと思っていた。

今回幻想軍が送り出したのは幻想軍最精鋭とまで言われている「伊吹小隊」である。これはかつての魂魄小隊であるがその指揮官であ

る妖夢は冥界に引っ込んでしまっている。しかし伊吹萃香少尉が現在指揮をとっている為正式名称ではないもののほかの部隊の人間は「伊吹小隊」と呼んでいた。

そしていつのまにかそれが正式名称であるかのように萃香も言うようになった。

僅か50人に過ぎないこの部隊だが魂魄小隊時代には華々しい活躍を見せ、幾つもの感状をもらうほどであった。そこからさらに萃香は自分を含め、精鋭戦士を12人抽出した。

対する陸上自衛隊は山田邦章^{やまだくにあき}2等陸尉率いる小隊から精鋭12人を抽出した部隊である。まずは双方、挨拶を交わした。

「幻想陸軍伊吹小隊、伊吹萃香」

「陸上自衛隊中部方面隊第10師団第35普通科連隊所属の山田邦夫です」

（相手は手強いとはわかっていても軍隊ではない…ましてやただの人間、私は鬼！負けてたまるか！）

萃香にはある戦略があった。それは自分を含めての事であるが今回合同演習に参加する伊吹小隊のメンバーはすべて妖怪で編成されている。その理由は妖怪が人間に負けるという事は屈辱である為、完全に人間だけの部隊である相手に対して闘争心が生まれ、思った以上の戦闘力を発揮できるのである。

（妖怪なめるなよ、人間！）

流石の美鈴もこの時だけは闘志を燃やしていた。彼女には以前の屈辱があるのだ。その屈辱とは海斗と初めて出会った際の戦闘で自分が有利であるにも関わらず海斗の会心の一撃でしばらく腹が痛かったそうである。

それ以来美鈴は人間に対してはやたらと闘志を燃やすようになったのである。

そして妖怪全般からしてみればこの所妖怪と人間がほぼ同等の扱いをされ、まるで人間と同レベル、もしくは人間のほうが優越されている感が妖怪にはあった。その為人間に対する感情が一部ではかなり悪化、人間を見ただけで襲い結果警察に逮捕されるという者さえいる。

軍隊内でも「たかが人間の癖に」と妖怪の上官達が人間の部下達を集団でいじめたりなどという事例がある。やはり腐っても幻想郷の妖怪、プライドは高いのである。

唯一の救いは天皇がかなりの権力を持つ妖怪である事だ。もし紫ではない人物が天皇ならば今頃内戦をやっていたかもしれない。

それはさておきまもなく日幻合同演習が開始されようとしていた。

「今回の演習は幻想軍の意向により、深いジャングルなどで戦う事を想定したサバイバルゲーム方式でいく。密林は非常に視界が悪く動きづらい、だが双方ともあらゆる事態を想定し、訓練を積んでいくはずなので特に問題はないとは思うがその事をしっかりと頭に入れ、より実力を磨くべく、双方ともこの演習に取り組んでほしいと思います。またこの演習に勝ち負けは関係ありません、お互いの弱点を見つけあい、今後の成長に繋げていくのであります」

山田2尉は幻想兵と自衛官達にそう説明した。

確かに自衛官にとっては勝ち負けはどうでもいいのかもしれないが幻想兵（妖怪）からしてみれば人間にだけは負けたくなかった。なので勝ち負けは幻想兵にとっては非常に重要であった。

ちなみに演習なのでもちろん実弾は使わず、ペイント弾が使用される。

被弾しても死ぬ事も負傷する事もないがただ染料によって真っ赤になり、もしそれがあたったら「ヒット」と叫ばなければならない。その時点で負傷とされ離脱となる。

「…もうすぐですね」

「ええ、人間なんかに負けてたまるか。たまには私達もいい所を見せてやる」

「はい!!」

伊吹小隊の士気は高い。

「あつ！時間！」

「よし！周囲に警戒しつつ前進！」

「了解!!」

一式機関銃や三式小銃を手に持った兵士達が視界が悪い中、警戒しつつ行動する。

「……!?!」

「食らえ!!」

早速美鈴が1人に弾を当てた。

「ヒット!」

「よし!自衛官に対しては初戦果!」

「シート!大声出すな中国」

「頼むから私の事を誰か名前で呼んで」

その後も幻想軍と自衛隊の間で激戦が展開された。

30分後、幻想軍は重傷5名、軽傷3名。自衛隊は重傷2名、軽傷4名と僅かに自衛隊がリードしていた。以外にも自衛隊が苦戦しているのは装備で自衛隊が勝っていても銃だけだからであらう、ほかの兵器があれば自衛隊の圧勝であらう。

さらに自衛隊も訓練だけなら回数は多いが幻想軍はそれに加えて実戦も経験している。伊吹小隊の兵士には萃香や美鈴など前大戦の生き残りも部隊にいる上に治安維持任務だけでも5年で数百回は出勤しているし市街戦や森林での戦闘も経験していた。

要は経験の差である。

さらにその後も戦闘は続いた。ちなみにタイムリミットは1時間である。

「現在敵よりも数は劣勢だけど相手は人間、負けられないと思って戦って!!」

「了解!!」

その後も激戦は続く……

幻想軍にも自衛隊にも続々と離脱者が出てしまう。
そして時間となり、双方は戦闘を停止した。

「今回の訓練の結果は幻想軍重傷6名、軽傷4名、陸上自衛隊重傷4名、軽傷7名……」

（おおお!?!）

（やったか!?!）

「よって勝者は幻想軍となります」

幻想兵達は内心嬉しかった。それは当然、自分達よりも進んでいる相手に勝ったのである。これは萃香の徹底したゲリラ戦法が功を奏したのである。そして人間と妖怪の基本的な体力の差も物をいっただけであった。

しかし自衛隊にはまたしても汚名が加わった。

異界の後れた軍隊にサバイバルゲームで敗北したという屈辱的な汚名は山田2尉らの頭にしっかりと記憶された。

これを機に陸上自衛隊は訓練をさらに強化したという。ただ言える事は一つ、これが平坦な土地での会戦ならば幻想軍はボロ負けしていたはずである。

また、たとえ森林で実戦経験豊富という自衛隊より有利な点があっ

た戦いであったにしても損害が大きく、これ以降幻想軍の目先の事しか考えていない無能軍人達が唱えていた「外界占領論」は消え去ったのであった。

第二三話 白幻合同演習（後書き）

御意見、御感想等お待ちしております。

自衛隊の敗因は幻想軍に萃香がいたから……だと思います。

第二四話・ロマーニヤの秘密と新たな火種

サバゲーでの演習では自衛隊が幻想軍に敗北するものの、二式戦車を用いた射撃訓練ではなんと自衛隊が圧勝した。幻想軍はどうせ遅れているという事で自衛隊に二式戦車を一時的に貸し、それを用いて合同で訓練を行った結果、幻想軍は惨敗した。

この結果からゲリラ戦では幻想軍が上（…）というよりほとんどあの人の活躍であの演習は幻想軍の勝利になったが…、しかし通常の戦闘ならば陸自が圧倒的に上、海と空では特に差がひどい事になっているだろう。

その頃、ロマーニヤでは。

（……まったく、余はいつまであの男に従っていればよいのだ？ 日夜戦闘を開始せよとの具申は来るが……余にそんな気はない。しかしそれを隠し通し今後戦争を遂行せねばならない。それにシルビアに侵攻したい気持ちは本心だ。だが問題はそうすれば世界が相手になる。世界を相手に我がロマーニヤはどう戦えばよいのだ？）

ムツソリーニとしてはロマーニヤ帝国の再建はしたいのだが世界と戦うつもりなどはさらさらなかった。しかしシルビアへ侵攻すればそうなるかもしれないし、それにロマーニヤはある所から支援を受けて急激な成長を見せている為、そのある場所には逆らえないのである。

ある場所は海軍力を持たない為、ロマーニヤはいい利用目標である。そのある場所とは……

（来たな……）

「どうも、御無沙汰ですねドゥーチェ……いや、今は皇帝ですか？」

「な、なんだ、天界の天川外相か……」

その正体は天界であつた。

傀儡であつたライデンブルク亡き今、そこその海軍力を持ち、それなりに野心もあるロマーニヤを天界は利用したのである。

「おやおや、随分怯えてるようで？」

「そんな事はない。余は普通である」

「そうですか……それはよかった。それで今回何故私がロマーニヤを訪れたかご存じでしょうか？」

「し、知るかそんな事は」

ロマーニヤもかつては同盟国の一員として天界と戦つた国家……それだけに天界の恐ろしさは知っており、さらに複雑な事情で支援を受けている事からその残虐さも熟知していた。

なのでいくら野心を抱いているムツソリーニといえども、天界とはなるべく関わりたくはないのである。

「ほうねではお教えいたしましょうか。皇帝陛下」

天川外相は非常に冷静な60代の日系天人である。

ユルゲンが最も信用する側近の一人でもあり、ユルゲンの命令ならばどんな残酷な事であろうとも遂行する男であつた。冷静で冷酷な

彼は同じ天界政府の人間からもあまり好かれないほどである。天界の反政府組織の暗殺リストにも彼の名前はウルゲンの次にある。それほど危険かつ大きな権力を持つ男であった。

外相だからといってなめてはいけない存在である。

「具申…ですか？要は我が国はさつさと戦闘行動に移りたい。貴国も是非南洋で暴れ、我々が作戦行動中、世界の国々を押さえていただきたい。我々の支援によって海軍力はさらに増強される。流石に陸軍と空軍は面倒を見てやれませんが工業化は進んでいるのでしよう。ならばそれは可能はずです」

「しかし…我が海軍の航空母艦はたったの6隻…この程度ではとても世の海軍と渡り合う事はできません…」

「そこで大型正規空母が来月2隻竣工でしょう。それこそ幻想海軍の飛龍型航空母艦に匹敵するもの母艦がね」

「そういう問題ではなく、余は幻想海軍のみならず世界の海軍を相手にしなければならぬ事を恐れている」

「エラス王国を利用すればいい。とりあえずここいらの国家をすべてあつめればそれなりの海軍力にはなるはずだ」

エラス王国は外の世界でいうギリシャにあたる国家だが、その海軍力はギリシャ以上である。戦後アメリカスから購入した「エンタープライズ」を「ゼウス」として、「レキシントン」を「ヘーラー」として、ヨークタウンを「アテーナー」として、「サラトガ」を「アポローン」として運用、さらにこの4隻の正規空母に加えて4隻の軽空母を保有、戦艦を2隻しか保有していない代わりに機動部隊

戦力はロマーニヤを越していた。

地球のギリシャを越す海軍力を誇っていたがその分、航空兵力は海軍航空隊のみが本格的で空軍は支援用と最低限の防空用に過ぎず、陸軍も装備が旧式化しており、ロマーニヤより強いかといえばそれは微妙なところである。

そもそもエラスは数年前のロマーニヤによる侵攻で敵対関係にあった。なのでうまく引き込めるかは微妙である。仮に引き込んだとしても有力な戦力となるのはロマーニヤとエラス、そしてマダガスカル海軍のみである。

マダガスカル海軍は前大戦で幻想軍の攻撃によって破壊されたライデンブルク軍艦艇を修復、それを運用している為、小国の海軍よりはマシという程度である。艦載機不足で一度もまともな行動をしたことはないものの、一応機動部隊保有国ではある。

残りのエルサレム共和国は陸軍国、アルバニアは哨戒艇や工作艦程度しか持たず、それどころか陸軍兵員でさえ2万に過ぎない。ユーゴスラビアは兵力こそ100万近いものの大半が老朽化した装備であつた。

海軍は駆逐艦が最も大きな艦艇で残りはフリゲート艦やコルベット艦がいいところ。あとはアルバニア同様の貧弱さであつた。

ロマーニヤは同盟国に恵まれず、しかも今度の戦争は陸軍よりも海軍がモノをいいそうであるにも関わらず、全世界を相手にするには海軍力が圧倒的に不足していた。

「ふふふ…ムツソリーニ皇帝陛下、海軍がほしいのはよくわかりますよ？……しかし米国はモンロー主義により戦争には消極的……あ

の参戦も奴ら（赤）が米国船を攻撃したからです。したがって何もしなければ問題はないでしょう」

「しかし…」

「ほう、天界に刃向かうのですかな？ そうなるとロマーニヤがどうなるかは保証ができませんがね」

「！？」

「我が天界もシチリア付近に境目を設置し、そこから天界海軍を送り込む事ができる……機動部隊はありませんが巡洋艦や駆逐艦ならそこそこの数があります。勝てはしなくとも天界陸軍を送り込む事ぐらいなら可能でしょう？」

天界との戦争…ロマーニヤにとって避けなければならないことの一つであった。

海戦なら勝てるが陸戦や空戦はどう足掻いたって勝てないのは目に見えている。だからこそムツソリーニは親天政策を嫌でも行っているのである。

ロマーニヤは数々の問題を抱えながらも開戦に向かっていた。しかし問題を抱えているのはロマーニヤだけではなく、ロマーニヤと比べて圧倒的な海軍力を持つ幻想国も問題を抱えていた。しかも本土に近い場所である。

それは幻想共和国と幻想国、西幻想国との間の問題だ。

幻想共和国はかつてのライデンブルクである。大統領はユーリ・ブレジネフ。人口は約435万人、多くがロマノフ系の人間である。「体制を変えての存続」が認められた国であるが軍備が制限され、

さらにT U加盟国のみに限られる外国人参政権すらあり、事実上幻想国と西幻想国の統治下にあった。

しかし3年前、それに反発した共和人（幻想共和国の人間の事をこいう）が軍と協力して武装蜂起、その結果外国人参政権は廃止となり軍備の制限も兵員5万以下、戦車、航空機保有禁止、重砲100門以下に緩められたものの領事裁判権はなく、おまけに協定税率。関税自主権がない状態であった。

さらに国内には幻想軍1個連隊、西幻想軍2個連隊が不平等条約により駐屯している。多くの国民同様これが気に食わぬブレジネフ大統領は親露政策を採り、兵器を輸入、また名目上はトラクターとし、軽戦車を開発させ。配備させた。

航空機に関しても1年前に民間機に関しては開発、製造の許可が下りた為、名目上は民間機としつつもいつでも軍用に転用できる航空機を開発したのであった。

現在、幻想共和国はブレジネフ大統領指導の打倒国内駐屯部隊の下、陸軍45800人、空軍4130人、T-12という主砲46口径45mm戦車砲×1、7.62mm機関銃×1、最高速度62.1km/h、最大装甲15mmといったって平凡な軽戦車60両を配備、BTR-1という装甲兵員輸送車120両、カチューシャのコピー品72両が配備されている。

無論幻想国はこの事を知っており西幻想国と共に軽戦車については廃棄を求めたがブレジネフ大統領は拒否している。また航空機についても曲芸機としてLa-7を30機、IL-4爆撃機10機、IL-2攻撃機5機、自国製小型連絡機5機に偵察機7機を保有、これらの小国の空軍となら互角に渡り合える規模であった。

もちろん戦車と同様に廃棄を求めるもブレジネフ大統領は強行的な姿勢を見せた。

既にブレジネフ大統領は戦争準備を開始している。幻想郷にて新たな火種が生まれたのであった。

第二四話・ロマーニヤの秘密と新たな火種（後書き）

御意見、御感想などお待ちしております。

次回あたりでP C 9 8版キャラを登場させようと思っています。

第二五話・天共戦争

幻想共和国との戦争が勃発しそうな今、幻想国と西幻想国は外交で問題を解決しようとするもブレジネフ大統領はただ「撤退」と「不平等条約」の改正を主張するのみであった。

その為、幻想国側も戦争の準備を一方でしていた。

幻想軍は第40師団主力と独立第1戦車大隊を送り込む事を決定、西幻想軍も第3師団と第2師団から歩兵1個連隊を送り込む事を決定、援軍の陸軍兵力は27715人に達した。

さらに幻想軍と西幻想軍合わせて300機近い航空機が最寄りの空軍基地に配置された。こうしてある程度の戦争準備は進んだが一方で未だに交渉が行われていた。

「幻想国政府としてはこちらの案をまとめてみましたので一度ご覧になってください」

その幻想案を幻想共和国のスミルノフ外相に手渡したのは幻想国の宇佐見外相である。宇佐見外相は蓮子の父の兄で60代の男である。外では本当に政治家だったらしいが蓮子同様オカルトにも興味がある。ちよつと危ない男であった。それでも能力は非常に優れていた為、今の三千院内閣では外相に任命された。

「宇佐見閣下、我が政府としてはこれを受け入れることはできません」

「ではどんな案を望んでいるのですか？」

「第1に幻想軍及び西幻想軍の完全なる撤退、第2に不平等条約の撤廃、第3に軍縮条約の撤廃或いは緩和、第4に我が国に対する内政に干渉しない事です」

「第2につきましてですが。それは講和条約も？」

「あらゆるものなので講和条約に含まれる我が国に不利なものを除外してほしいということになりますな」

それでは講和したということにならない。

それが幻想国の考えであった。

さらにその後も宇佐見外相は幾多なる交渉を繰り返したがすべて決裂、さらに多国連によつて委任統治領とされた島々の放棄と南口マノフへの返還も要求した。これに対し幻想国は「これは多国連によつて決められた事であつて一国の決断で放棄することはできない」と反論、また幻想国としては放棄する気もさらさらなかったのである。

この交渉にロマノフも仲介し、幻想国・西幻想国vs幻想共和国の戦争を阻止しようと努力するも無駄な努力に終わった。ロマノフの提案はどちらかといえば幻想国よりであった。いくら幻想共和国と友好的に見せかけているとはいえっても歴史的に友好関係になるのは難しく、ロマノフ国民も幻想国寄りの考えを持っていた。

そもそも敗北者として幻想共和国の人々をロマノフ人は見下していた。

これにより対露感情が悪化しブレジネフ大統領はロマノフとの断交を決意、幻想国と西幻想国との戦争開始を命じた。

8月20日、幻想共和国軍が突如として幻想軍と西幻想軍に攻撃を仕掛けた。これに対し両国はある程度の抵抗を見せるも現在の兵力では抵抗は不可能と見た両国は撤退を命じ、わずか1日で幻想共和国は領内から幻想軍と西幻想軍を駆逐した。

ここでブレジネフ大統領は講和を持ちかけたが両国は降伏を求め、2日後の0時までには降伏の意思を見せなければ総攻撃を開始すると通告した。ところが翌日、天界軍が突如として幻想共和国に対し、宣戦布告をし数時間後には天界軍のヨルムングントG型100機が幻想共和国を爆撃した。

幻想国の領空を侵犯しての通過であった為、幻想空軍の戦闘機がスクランブル発進をして警告を行ったが「我二敵意ナシ、通過ヲ許可サレタシ」と無電、また幻想共和国とは戦争状態であるので仕方なく幻想軍は爆撃機の護衛を行い、幻想共和国を襲った。

後にも先にも幻想軍と天界軍が行った最初で最後の共同作戦である。

さらに翌日には長距離輸送機「ナッター」が空挺部隊を幻想共和国の首都「ペトロフスク」に送り込む。その数3万という大軍であったという間に幻想共和国を屈服させた。

丁度幻想軍が「天界に先をとられたらまずい」と里香少佐率いる独立戦車大隊などが幻想共和国本土に侵攻を開始した時であった。

里香は戦車技師でもあり、語尾は「なのです」である。

この話を聞き彼女は二式戦車の砲塔から上半身を出し、叫んでいた。

「大隊長殿!!」

「なんなのです!?!」

「幻想共和国が天界軍に降伏したとの事です!!」

「…ええ!? 私はなんの為に出勤したのです!? まだ1両も撃破していないのにひどいのです!」

よっぽど彼女は戦車戦を経験したかったらしい。

ちなみに105mm砲塔の二式戦車や120mm砲塔の三式戦車の開発には彼女も関わっている…つか彼女なしでは開発できなかったほどである。

それはともかく、天界軍が空挺作戦で幻想共和国を屈服させてしまったのはあまりにも衝撃的な出来事であった。まず、幻想陸軍は久々に正規軍が相手に張り切っていたのだが空振りとなってしまう、里香少佐や第40師団の歩兵連隊長、明羅中佐も大暴れするつもりであったからか、帰国した時には戦ってもいないのに出征した際の気迫がなくなっていたという。

また、幻想共和国はその後半ば天界による（幻想空軍はなんどもスクランブル発進しては警告を繰り返し、撃墜も検討したらしいが天界との戦争を避けるために自粛）空輸が行われ、天界軍3万人が常駐するようになった。

つまり幻想共和国は天界に占領さしたのであった。天界は幻想共和国領に新たな砦を築く…その魂胆は丸見えであった為「次に航空機を通過させた場合戦闘機、ミサイルなどあらゆる手段で迎撃する」と幻想国は通告した。以降、天界軍機による領空侵犯はいつもの偵察レベルにおちついたのであった。

だがブレジネフ大統領は天界を「解放者」として迎え入れた。

いずれ事実上天界の配下になった幻想共和国が侵攻してくるかもしれない…その恐怖から幻想軍は9月に入る頃、移民により浮いた10万人を徴兵し、訓練が終了次第幻想共和国との国境に配備する事を決定、また天界に危機感を感じているロマノフとの交渉によりロマノフも数万のロマノフ軍を西幻想国に駐屯させた。

これにより、次なる戦いでもまた幻想郷が戦場になる可能性が高まった。

ちなみに今回の戦争は事実上天界と幻想共和国の戦争であった為、「天共戦争」と命名された。
犠牲者の数は以下の通りである。

幻想軍：

死者：27人

負傷者：89人

西幻想軍：

死者：25人

負傷者：82人

天界軍：

死者：28人

負傷者：90人

幻想共和国軍：

死者：少なくとも150人以上

負傷者：約150～200人

合計：

戦死：推定230人（以上の可能性大）

戦傷：多く見積もって461人

比較的小規模な戦争ではあったが兵器の進化を感じさせる場面もあった。

たとえば天界軍が使用した長距離輸送機「ナッター」はまさに天界の技術があつてこそ製造できたものであった。「ナッター」は航続距離12000kmを誇るレシプロ機であり、これに匹敵する幻想軍レシプロ機といえばス式重爆撃機ぐらいであった。

また天界軍は戦車はおろか車両すら1両も持つてきてはいないが幻想共和国軍戦車をもののみごとにフルボッコにしている。いくら相手が軽戦車であつたとはいえ、前大戦中に使用されていたものからかなり進化しており、RPG-7にそっくりな代物まで天界軍は保有していた。

その性能は幻想軍が未だ使用している二式携帯砲を上回っていた。戦場に忍び込んだ情報本部の諜報員が戦死した天界兵のそれを持ち帰って8月末に比較テストした結果がそれを物語っていた。

しかも最近になって判明した事だが幻想軍の二式携帯砲はハルシュタットで実戦配備されたものや西幻想国で実戦配備されたものに比べると劣っている。おまけに歩兵装備は前大戦はおろか戦前のものまで存在しており車両の数もほかの軍に比べると数が少なく、徒歩による行軍を強いられる部隊さえも存在していた。

今回の戦争は最初是他国よりも先進的な装備をしていた自軍が周りの進化により次第に遅れてゆく事を痛感したい機会であつた。

第二五話・天共戦争（後書き）

御意見、御感想などお待ちしています。

ちなみにPC98版は一度もプレイした事がないのでキャラが違ったりする可能性が高いですがご了承ください。

第二六話・領海侵犯

9月に入るが一月島の周辺は相変わらずの暑さを見せていた。ここは常夏の島なのである。

一月島やマサール島の浜には年間を通して海水浴に来る客が一人以上はかならずいる。特に自然が残る一月島の北部には今日も観光客や遊び人の姿を目撃できた。

また海軍軍人も気晴らしに砂浜を訪れる事がある。この日も海軍軍人の姿を見ることができた。その正体は北白河^{きたしろかわ}ちゆりである。

大学院卒であるが「可能性空間移動船」で幻想入り後、しばらくは8面ボスだったりしていたようだが幻想海軍創設となると海軍軍人になったらしい。現在の階級は海軍少佐、幻想海軍哨戒艇「白鳥」艦長を務めている。「白鳥」は白鳥型哨戒艇の1番艦で同型艦は10隻、兵装は12cm単装砲2門、25mm機銃連装1基、単装4挺、爆雷60個で最高速度は25ノット、非常時には30ノットまでの加速が可能である。

本来は20隻の建造予定であつたが終戦により、10隻に計画が縮小され10隻のみの建造となつた。なお爆雷なしならば大発が搭載可能である。

「お、誰かと思えば北白河少佐か」

「ん?...長官?私の名前を御存じ?」

「まあ、変な口調の女水兵として海軍内では有名になっているから

な」

ちゆりに話をかけたのは伊藤長官であつた。
流石のちゆりもこの人の前では敬語であつた。

「あの長官、護衛は？」

「ん？護衛か、俺は今日は一人でぶらぶら歩きたかつたものだから、まあ途中までは変装をしていた」

「そうですか…それよりも今度もしロマーニヤと戦争になったら海軍は戦えるのですか？」

「ん？なんだ今更そんな質問か？…戦えなかつたらダメだろう？今年の10月1日はその為に紺碧諸島で主力艦隊は大演習を行う事になっている。まあ他国には一切の情報を与えていないから我が海軍だけの演習になるが」

10月1日といつても半端な時ではある。しかしこの日に紺碧諸島で大演習をやる事は後の海軍の運命に大きな影響を与える事になる。

「さて、俺は帰るとするよ、北白河少佐は？」

「私はもう少しここで海を眺めている事にします」

「そうか」

伊藤長官はちゆりの前から去って行つた。

(…ふう、敬語は苦手だぜ)

ちなみにちゆりがかつて助手を務めていた岡崎夢美という教授は現在陸軍魔術将校で陸軍魔術中佐ある。魔術将校とは陸軍将校の中で技術を掌る部門にある者の事で外の世界の軍隊にはない兵科である。

その後、ちゆりは一月島呉軍港に戻り少ばかり仕事をこなす。翌日、警備任務の為、哨戒艇「白鳥」艦長として乗り込んだ。

午前4時、「白鳥」は呉軍港を出港、マサール及びモホール付近へと航行した。

「現在速力14ノット」

「風が少しだけ強いみたいだぜ」

「そのようですね」

「あゝあ！警備なんてつまらねえ！」

「馬鹿者！警備も実戦と同じぐらい重要だつて夢美も言つてたんだぜ」

「」「誰！？」「」

それは当然の反応であつた。

いくら彼女が艦長だからといって夢美の存在を知っている者なんてごく少数であろう。陸軍内ならまだしもここは海軍、さらに將軍クラスなら知っている可能性もあるが所詮は佐官である。

それからしばらく、特に何事もなく航海を行っていた。だが数時間後の事である。

「艦長！特務艦「須磨」より入電！パナイ沖で不明艦らしきものを発見！付近の水上戦闘艦は直ちに急行されたし！」

「パナイ…パナイか…」

パナイ島とはマサル諸島の一つであり戦時中はレーダー基地程度しかなかったものの戦後は開発が進み、今では2756人の島民のほか、360人ほどの独立パナイ警備隊という海軍の地上戦力や水上機基地が存在する。

「パナイ電探所より入電！不明艦は10隻！沿岸からの確認より、駆逐艦4！！潜水艦2！！補給艦らしきもの2隻！その他哨戒艇クラス2隻を認む！」

「結構な艦隊だぜ」

「艦長、我々はパナイ島にわりと近い位置にあります」

「ようし、付近の艦艇と連絡を取り合い会合、艦隊を成して不明艦への対処を行うぞ」

「了解！」

その後も電探所やパナイ警備隊、さらに特務艦「須磨」の報告やパナイ基地より出撃した偵察機の報告によりその正体はロマーニヤ海軍の艦艇である事が判明した。

ロマーニヤ海軍は幻想軍に向かって「我測量中」と発光信号で伝えてきた。しかし幻想国の領海内であり無許可、これは明らかな領海侵犯であった。

ましてや測量に駆逐艦や潜水艦クラスの戦闘艦はいらないであろう。

マサール島、マサール海軍鎮守府

ここにて、海軍鎮守府長官の田中中将はある決断を下した。

「一先ずは付近の哨戒艇や海防艦を、ただ万が一の場合、前大戦開戦前のように侵犯艦との海戦に発展する可能性がある。その場合、海防艦クラスでは駆逐艦や潜水艦を含む10隻のロマーニヤ艦隊が相手では圧倒的に不利である」

「では長官！どうするのですか？」

「第1水雷戦隊及び第1艦隊より対潜母艦「蒼鷹」を出撃させよ」

「蒼鷹」とは前大戦で活躍した改装空母であるが現在是对潜空母として艦上哨戒機を搭載している。五式艦上哨戒機「幻想」(S-2艦上対潜哨戒機の改良コピー)や七式回転機(幻想軍ではヘリの事を回転機と呼ぶ)を搭載している。なお海軍の制式名称について、。式というのに戻っている気がするがこれは間違いであり、固有名詞と。式、どちらでもよいという事に改正されたのである。

これは過去の機体との混合を避けるためのものである。

また艦名も漢字から平仮名に変更するという案もあったがそれでは自衛隊と被ってしまう事、さらに海軍上層部が艦名を平仮名にすることに對し、抵抗を持っていたので没となっただけらしい。

田中中将の命令で出撃する事になった艦艇はいずれも給油を終え、

次の任務に備えている頃であつた為、連絡を受けて出撃準備に取り掛かった。

その頃、ちゆり達はというとまず白鳥型哨戒艇の同型艦である「隼」「鷺」と会合、さらにマダガスカル進駐の件で、公海を航行するロマーニヤ海軍艦艇を電探により監視する為に作戦行動を行い、現在パナイ付近にある熱田環礁に停泊していた駆逐艦「梓」「春」「秋月」も緊急出動、遣日潜水作戦から帰還したばかりの村沙水蜜艦長の伊25も現場に急行した。

こうして集結した幻想海軍艦艇は駆逐艦3隻、潜水艦1隻、哨戒艇3隻である。

「現在のところ付近に空母は確認できません」

「つとすると水上艦艇だけか？そいつは幸運だぜ！」

「対水上戦闘用意！対潜戦闘用意！」

「総員配置につけ！！」

こうして幻想海軍は戦闘態勢に入った。

対するロマーニヤ海軍は……

「艦長！敵はやる気みたいですよ！」

「第1撃に備え、対水上戦闘用意及び対潜戦闘用意をせよ、またここは幻想海軍の巣穴といっても過言ではない。偵察・測量敢行の為に航空機にも警戒せよ」

「了解！」

こうしてお互い砲を向け合い、魚雷も向き合っていた。
さらに艦艇乗組員同士で激しい睨み合いも行われていた。

*** 駆逐艦「梓」***

「くそお！ローマーニヤめ！俺達の海に堂々を入ってきたな！！」

「撃てるもんだったら撃ってみろ！！」

「…でも、数はこっちが劣勢ね。海戦になったら不利よ」

「なあに！元帝国海軍の俺達のほうが練度は上ですよ！」

冷静な女性軍人の言葉を受けても水兵たちの自信は落ちる事がなかった。それはおろか撃ってきたら撃ち返し、幻想海軍の名にかけて海戦には必ず勝つという意気込みであった。

第二六話・領海侵犯（後書き）

御意見、御感想などお待ちしております。

第二七話 パナイ沖海戦

その頃、ロマーニヤ海軍は…

「現在偵察機の報告によりますと近海に第1水雷戦隊の駆逐艦らしきもの4隻、その他蒼鷹型航空母艦1隻を認む！」

「やはり海軍の命令は堂々すぎる……こんな作戦通じるはずがない！」

ロマーニヤの水兵も、そして艦長達や参謀たちもこの作戦には当初は反対であつた…というより今も何故行われたのが疑っているくらいである。

こんな命令を出した奴は頭がおかしい…これは彼らにとっての常識である。

一方の幻想海軍の水兵達はいつロマーニヤ海軍との海戦になるか不安であつた。ちゆりも心拍数が徐々に上がっていくのを感じていた。ただし彼女には自信もあり、不安よりかはそちらのほうが大きいくらいであつた。

「…ん!？」

「侵犯艦当艦に向け発砲！」

「面舵一杯!!!最大戦速!!!」

「おもかーじ!!!」

ロマーニヤ軍駆逐艦が放った砲弾は「白鳥」付近に着弾、激しい水柱が白鳥付近に立ち上がる。飛沫が水兵にかかり、甲板もびしょ濡れであったがそれよりも不安な事は至近弾による損害だ。

「被害状況を確認せよ！」

「浸水は見られません！」

「よかったぜ」

その頃、ロマーニヤ海軍では砲を撃った奴に対し、激しい説教が行われ罵声のような声が響いていたものの遠くにいる幻想軍水兵には全く聞こえない事、幻想軍は敵意があるものとし、特別な対処に移った。

その特別な対処とは戦闘、つまり「海戦」である。

「おゝい！！撃つてもいいですか！？」

「構わん！！撃て！！」

「ありがたい！ようし…砲弾の装填を急げ！」

「敵との距離約4000！」

作業が行われている頃、ロマーニヤ艦隊付近にて何かが投下されているのが見えた。爆雷である。

「おい！あれ！」

「爆雷か？…すると伊25が狙われている！」

「畜生ロマーニヤめ！撃つてきた事を公開させてやる！！」

こうして宣戦布告なき海戦は始まったのである。

幻想海軍とロマーニヤ海軍が初めて手を交えた戦いであった。

*** 駆逐艦「梓」***

「魚雷集中攻撃！目標先頭の駆逐艦！」

「伊25を助けるんだ！！！」

幻想軍自慢の酸素魚雷はさらなる改良が加えられ、速力の向上が図られたほか、欠点の改善なども施されている。それでも不十分な点はあったのだが他国の魚雷に比べ、威力、航続力、速力ともに高く、事実ロマンフ海軍と南ロマンフ海軍がライセンス生産を行いたいと申し出るほどである。

「魚雷発射用意！！！」

「射っ！！！」

魚雷発射管より、酸素魚雷が射出され大海原に魚雷が飛び込むと航跡を目立たせずにロマーニヤ軍駆逐艦に接近、駆逐艦1隻に1本を命中させた。

「敵駆逐艦！魚雷1本命中！！！」

「おお！敵駆逐艦の艦隊が2つに折れてますぞ！！！」

「おお？…おお！？」

ロマーニヤ軍駆逐艦は1分以内に沈没、まさに轟沈であった。

ロマーニヤ軍は「幻想海軍の駆逐艦は化け物か！？」と叫んだという逸話が後世にも残るがそれほどあっさりと「梓」は駆逐艦1隻を雷撃にて仕留めたのである。

駆逐艦1隻が撃沈されたのを境に、海戦はその後、激しさを増し、数十分後には幻想軍哨戒艇「隼」に砲弾が1発命中、さらに魚雷も被雷し撃沈される。

しかしその後「白鳥」が反撃を開始した。

「目標は敵哨戒艇！撃沈すれば昇進もあるかもだぜ！」

「ようし！」

「再装填及び修正急げ！！！」

「射っ！！！」

戦時でなければ聞くこともないほどの砲声がパナイ沖の海域にて響き渡る。幻想海軍にとってこれほどの組織的かつ大規模な海戦はヤーツク島攻略以来であった。

「左舷70度至近にて雷跡確認！！！」

「潜水艦！？取り舵一杯！！機関全速！！！」

「トーリカージ！！！！！」

白鳥は魚雷の回避にギリギリで成功、今度は逆に反撃を開始した。しかし1発、不発ながらも魚雷が命中し、白鳥は浸水を起こし始めた。だがそれも幻想海軍の水兵による果敢な修理作業によってなんとか浸水は止まる。

だが追跡は不可能であった。

その為、潜水艦撃沈を比較的近くで戦闘を行っていた駆逐艦「秋月」に任せられた。

「対潜戦闘用意！！」

「ヘッジホッグを発射しろ！！敵潜水艦を一刻も早く沈めるんだ！！」

「現在敵艦との距離約1000！」

「距離250mにてヘッジホッグ発射、接近せよ」

エンジンをフル回転にさせ、白鳥は次第に潜水艦に迫る。

「秋月」の水兵達は作業しながら何やら潜水艦のいる方向に向かって叫んでいた。

「北白川少佐の艦が被雷したらしい！！」

「おいおい！我らの北白川少佐は無事なのか！？」

「はっ！連絡によれば艦長以下数百名は無事！負傷者5名だとの事です」

「よかった！よし…「白鳥」の仇は俺達がつてやる！！」

「いや待て！あれ！！」

「…哨戒機だ！！」

向こうより3機の航空機が飛来する。

それは蒼鷹艦載機の哨戒機「幻想」であった。もちろん幻想には爆雷も搭載されている。今回が初陣であった。

「敵影なし！！予定通り敵潜水艦を攻撃する！」

「ようそろー！！」

「爆雷投下用意！！！」

「用意……」

「射っ！！」

3機の哨戒機から爆雷がばらまかれ、海中へと沈んでゆく。

すると秋月の乗員たちが一斉に海面を眺める。数秒後には一斉にその付近の海面が爆発した。爆雷の爆発である。海面には艦の破片や重油が現れ、乗員達は歓喜する。

「やったああああ！！！」

「ざまあみる！！」

一方、幻想の搭乗員達も喜んだ。

「敵潜水艦撃沈確認！」

「よっし！！初戦果や！！」

その頃、ローマーニヤ海軍は…

「報告！新たな駆逐艦数隻を確認！幻想海軍第1水雷戦隊と認む
！」

「正確な数は！？」

「まだわかっておりません…ただ数隻から数十隻の駆逐艦で編成されており、艦艇数は我々よりも圧倒的であります」

「ちっ！…だからこんな作戦はやりたくなかったんだ！…もう十分だろう…十分情報は集めた。これより帰投する！」

「はっ！しかし…」

「全滅するのと私が責任をとり、戦力を温存するの？どちらが今後の為であると思うかね！？」

「……言うとおりにしましょう」

その後、ローマーニヤ軍は一斉回頭、パナイ沖海戦は終結した。この海戦では幻想海軍の哨戒艇1隻、特務艦「須磨」が沈没、哨戒艇1隻が大破、駆逐艦1隻、哨戒艇1隻小破した。しかしローマーニヤ海軍は駆逐艦1隻、潜水艦1隻、哨戒艇1隻を失い損傷艦艇も4隻に上り、幻想海軍を上回る損害を被った。

しかし両軍ともにこの海戦から多くの教訓を学んだ。幻想海軍はロマーニャは近代化による装備の充実により、同盟国であった多世界大戦当時よりも海軍の実力が向上し、練度も予想以上に高く、幻想海軍も驚きのレベルに達していた。

しかしロマーニャ軍も幻想海軍が並大抵の海軍ではない事、練度が非常に高い事、後ろ盾（同盟国）や友好国の数から真正面勝負は難しい事、いくら改善されたとはいえども装備の差を痛感した。

今回の海戦では双方とも違う主張をした。

ロマーニャの主張は「測量中の艦艇に幻想軍は攻撃した。幻想軍は野蛮で好戦的であり幻想人はマナーも守れぬ猿である」としたが幻想国の主張は「領海侵犯を行ったロマーニャ艦隊に対し警告等を行おうとした途端に砲撃されたのでそれに対処しただけである」というものである。

しかしロマーニャの主張空しく、国際世論は幻想国を擁護する形で進んでいった。数日後、多国連よりイングランド人の調査団が派遣され、調べられた結果、ロマーニャが領海侵犯し、先に幻想海軍艦艇に向けて砲撃を行った事は確かであるという事がはっきりしたからであった。

この事件を境に両国の関係は急速に悪化、開戦への足音が近づいたのであった。

第二七話 パナイ沖海戦（後書き）

御意見、御感想などお待ちしています。
ああ忙し。

第二八話・御前会議

9月20日……この時、ロマーニヤの同盟・友好国やロマーニヤと交渉中の国々以外はロマーニヤを敵視していた。領海侵犯を行い、対処に向かった船舶を攻撃するという前代未聞の行動を起こしたからであつた。

こんな事をされれば相手がロマーニヤでなくとも非難されるであろうが、国際的に孤立してしまつたロマーニヤは天界の要請もあつて一気に開戦へ向かおうとしていた。

既に皇帝ムツソリーニは戦争準備を命じ、陸海空軍ともに来るべき開戦に向けて準備を行つていた。陸軍はメインのシルビア、陽動と中継基地の確保、防衛陣地構築の為、米領アゾレス諸島、幻領マサール諸島を、石油調達の為にエルサレル共和国からナバテア王国、ペルシア第二帝国を攻略する為の準備を推し進め、特にシルビア、中東には最新兵器を集中的に送り込んだ。海軍は船団護衛及び陸軍の島嶼攻略支援、通商破壊を主に行うとして、また強力な幻想海軍主力を早期に殲滅せんと一月島攻撃を企画していた。

空軍は低い工業力に悲鳴を言わせ、各戦線でなんとか戦える程度の航空機を揃え、実戦に備えての訓練が日夜行われていた。対する幻想軍もこのところの軍拡により人員を増やし、戦時に総動員を行つたとしても兵器が足りるようあらゆる工場が軍の発注を受けて兵器を通常よりも多く生産した。

幻想陸軍は南方軍30万を編成、準備が整っていない為始め半年は防衛に徹する方針であつた。ただしスラバダ諸島に一番近く、しかも囲まれるような形であるネグロス島、マサール、モホールに近い

ながらも地形的に防衛作戦には不利なパナイ島、その他3つのマサールより南の島（軍施設以外無人）を一時放棄という事でほとんど防衛予算を割り当てなかった。

3つの島は無防備、パナイとネグロスも少数兵力しか駐屯していなかった。

その代わりマサールに5万、モホールに3万、一月島には10万近い兵があり、ロマーニヤ軍はこれを「マサール三大要塞」と呼んでいた。このほか万が一、一月島が陥落し、本国との連絡が取りにくくなった場合を考えて海軍司令部を約1000km離れたミヤコフ諸島に設置、本国との連絡用の特殊電波受信所も設置、その他ボストーク島の港の整備も急いだのであった。

ただしロマーニヤ軍はシルビア戦線と大西洋戦線で一段落させない限りは総兵力20万近いマサール諸島を攻略できないだろうと考えていた。

この9月20日、帝都京都の宮城にて御前会議が行われた。議題は「皇国国策遂行要領」である。軍人や政治家が向かい合い、それらすべてを見渡されるように紫は椅子座っていた。室内は日本で実際に御前会議が行われた場所とほぼ同じである。

国家将校である海人と関少将、さらに宮内省の藍の姿も見られた。

会議はまず、紫に対して自軍の損害、そして今回の一件での国際的な影響を国民に知らせたものよりもさらに詳しい事を報告、またムツソリーニ皇帝からの親書も紫に渡された。

この親書にはマサール諸島要塞廃止或いは縮小、幻想国の軍縮、そしてマサール、モホール、一月島以外のマサール諸島の島の割譲、相互の不可侵条約の締結というものであった。

「……これは…明らかに幻想国に対する挑発。朕はこれを事実上の宣戦布告と見た」

立場上、紫は人前では一人称を「朕」としていた。

「陛下…確かにそのような内容ではありますがまだ宣戦布告と決ま
ったわけではありません」

「いえ、八雲藍宮内相。それは甘い考えであります。我が情報本部
の手に入れた情報によれば羅国（ロマーニヤの事）は全面戦争に向
けて本格的な準備を行っております」

「我が空軍も頻繁に領空侵犯してくる羅国機に対し、スクランブル
発進しているとの事です。詳しくは織本少将」

山口大臣が紫にそう報告すると、海人が一枚の紙を持ち、席から立
ち上がった。

「ロマーニヤは空母を我が経済水域ギリギリまで接近させ、発艦、
境目を超えて幻想郷にまで侵入した事も近年ありました。我が第一
航空団もそれに対し、発進しました。海軍や空軍の南洋諸島駐屯部
隊からも同様にロマーニヤ軍艦載機による領空侵犯が相次いでいる
との事であります」

続いて関が報告を始めた。

「海軍でも特に潜水艦による領海侵犯が週に1〜2回は必ずあり、
その度に駆逐艦が出動しております。我が艦隊も先月羅国潜水艦を
追跡し、100mまで接近したほどであります。また日本の海上自

衛隊の報告でも幻想国のものではない潜水艦をパナイ沖で探知したという報告があります」

現在海自は2隻の護衛艦と1隻の補給艦を南洋界で作戦行動に当たらせていた。その主な任務は訓練と幻想海軍の支援である。また潜水艦も遣幻潜水作戦に従事し、そうりゅう型も幻想国領海にて作戦行動を行っていた。

「藍さん…私も同じ意見です。一国の首相として…この親書を見ればどうも事実上の宣戦布告にしか見えないのであります」

「だったら…なんでこんな形で？」

「おそらくこれで挑発させ、スラバダ諸島攻略にでも乗り出すと思つたのでしょう。先制攻撃をさせ、国際世論を幻想国擁護という形からロマーニヤ擁護という形に移り返させるのが彼らの思惑であると考えております」

三千院首相の読みは正しかった。

実際にロマーニヤはそんな事をしようとしていた。もちろん軍からは折角の戦争計画を台無しにする気ですかとクレームがあつたらしいが、ムツソリーニの手によってその報告はなかつた事にされた。

ただ先制攻撃をした「悪者」というイメージがつきやすいのが今の時代、これが成功すれば確かにロマーニヤに同情的な国が増えるかもしれないだろう。しかし幻想国は騙されなかつた。似たような手口で痛い目に遭つた事がある国の出身者がいる為である。

「三千院首相、これはもしか…大東亜戦争開戦の時と同じ手口では？」

「織本少将、その通りであると思います。ハルノートの話をご存じでしょうか？」

「朕は藍から聞いたことがあるわ」

「まさにそれです。こちらに対し、挑発的、屈辱的であり、とても受け入れられない内容の最後通牒を突き付け、開戦をやむなきものとし、先制攻撃をさせて相手にとって都合のいいような自国や世界を動かす。アメリカの得意そうな事でしょう。大日本帝国はそれにまんまと引っかかってしまい、後の敗戦、帝国解体へと繋がってしまったのであります」

「ではこれは…」

「まさにハルノートと同じもの、この親書は最後通牒であり、期限を定めておらず、戦時国際法に従えば期限が定められていない最後通牒は宣戦布告と見做されるものであります」

「……！！！！」

確かにそうではあるが、そこまで言われると幻想国上層部も驚きを隠せなかった。こちらの国際法は地球の国際法にならったものであり、最後通牒の通説もそのままである。むしろこの件に関しては地球のものよりも明確に記されていた。

「従って、ムツソリーニ皇帝の親書は最後通牒であり、期限が定められていないので宣戦布告と見做されるものであるので我が国も本格的に戦時体制へ移行する必要があると自分は考えます」

あの戦争の痛い記憶がある彼らはロマーニヤの策略には騙されなかった。

むしろこの後の御前会議でロマーニヤが先に攻撃してくるのを待つ事が決定され、その方針で話はさらに進んだのであった。

この夜、直ぐに幻想国も事実上宣戦布告である最後通牒を作成し、2日後の昼にはそれが全世界に発表された。

「羅国皇帝ムツソリーニは皇国を開戦へ誘い込み、国際的孤立を図る計画的な謀略であるムツソリーニ親書を我が皇国に突き付け、挑発し、戦争へ引き込もうとした。我が皇国のこの最後通牒への回答は、最後通牒の内容は羅国の大西洋戦力の削減、戦争準備の中止、またマサル3島以外の島の割譲については残りの島を非武装地帯とする事を確認してから行うものとし、もし、上記の事が6950年12月8日午前0時まで確認できなかった場合、これ以上羅国の神聖計画の広がり阻止し、それによって苦しむ異教徒、無宗教者、何より侵略される他国の為に、我が皇国は幻想民族の総力を挙げてここに決起するものであります」

ムツソリーニもこの幻想国の声明を聞いており、室内で大声をあげていた。

「なんて事だ！！余の計画がこうもあつさり幻想人にバレてしまい、ロマーニヤが悪であるかのようなお返しをされてしまうとは！！」

「はあ……しかし確かに皇帝の親書は……」

「余に文句でもあるのかね！？」

「い、いえ……」

そもそもこの親書を書いたのは天人の天川外相であり、ムツソリーニの意思ではなく、ムツソリーニ自身もこんな文章が幻想国の連中に通じるはずがないと内心は思っていた。

だがここまで来てしまえば後戻りはできない、天界からは火のつくような要請が毎日ムツソリーニの耳に入ってくる。彼はとうとう……

「…開戦だ。開戦だ開戦だ開戦だ！！もはやあの声明をしてしまったという事は幻想国と不可侵条約を締結する事は不可能！余の気も変わった！予定通り10月1日、奴らにも攻撃を仕掛ける！」

「は、はい！！」

「己……幻想人……」

この声明は文字通り世界各地に発信され、隣国シルビア、占領下のマダガスカルはもちろん反ロマーニヤ、異教徒、無宗教者など、世界各地で多数の人々が「幻想国がロマーニヤから世界を解放する」という認識を持つようになった。これは東機関が短時間の間に考えた作戦であった。

幻想国は味方を増やすという戦略的勝利を成し遂げたのであった。

第二八話・御前会議（後書き）

御意見、御感想等お待ちしております。

第二九話・運命の開戦

…… 10月1日、幻想国民はいつもどおりの生活を送っていた。
霊夢は相変わらず神社でぐだーっと、魔理沙も怪しげな薬品作りに没頭、チルノは相変わらず？であるし、てゐるも詐欺師っぷりを見せていた。

織本家では海人は軍人として働き、咲夜は子育て、別の場所では蓮子とメリーは相変わらずであり、文も取材活動を続け、ミステリアも相変わらず焼き鳥撲滅を掲げて歌って苦しめて絶賛抗議中（ただし最近男に人気が出てきたとか）、慧音は学校教師を務めていた。

こうして挙げるときりがないが、本当にいつも通りの生活が続いていたのであった。10月1日になるまでは……

この日、ロマーニヤ海軍は空母6隻、戦艦3隻、巡洋艦4隻、駆逐艦13隻、さらに数十隻の輸送艦による大艦隊を大西洋で作戦行動させていた。6隻の空母は天界の支援で建造された正規空母である。艦載機は総数300を超え、前大戦でのロマーニヤ海軍を上回る規模の艦隊であった。

指揮官ウツツイ中将はぐつと大海原を睨んでいた。

「提督……いよいよこの時が……」

「うむ！我が神聖帝国の荒廃は実にこの戦争にかかっている！諸君も祖国をかけたこの一大の為にがんばってほしい」

「提督！」

「うむ、そろそろだな。第1次攻撃隊総数150機、発艦用意！」

……その頃、幻想軍は。

*** 連合艦隊司令部 ***

「長官！」

「何事か!？」

「新たなる船団を確認!またこれを……」

「これは…宣戦布告では」

「はい!」

「やはりこの所のロマーニヤ軍の動きはその件であつたか…」

ついに幻想国はロマーニヤから宣戦布告を受けたのであつた。

しかも艦隊の規模から一月島に襲来する空母艦載機は総勢300を超える、つまりかつて京都を爆撃したライデンブルク空軍の航空機の3倍以上である。幻想軍の航空兵力は一月島、マサール、モホールを合わせれば航空機は380機にも上る。ところが別方向から新たに2隻の航空母艦を含んだ艦隊が出撃、五部と五部であつた。

もしここで多数の航空機を失つてしまえば今後の作戦に大きな影響を与えてしまう、そこで伊藤長官は重大な決断を下した。

「当初の予定通り、航空機をミヤコフ及び紺碧諸島に退避、一月島

の防空隊に関しては一般市民の命を守るために最低限の防空活動を行うように伝えてくれ。空軍と共同である」

「了解！」

通常なら徹底抗戦を唱える場面であつたが伊藤長官はあえての退避を命じる。これによる航空機と搭乗員の温存は今後の戦局にわずかながら影響を与える事になる。

命令の伝達はまるで当初から計画されていたのではないかと疑いたくなるほど、スムーズに進み、一時間後には250機の航空機がマサール、モホールより飛び立ち、残ったのは一月島の130機のみである。

「まったく軍は狂ってるんじゃないか？」

「なんで380機も航空機があるのに俺達は退避なんだ？島がどうなつてもしらねーぞ？」

搭乗員達はこの作戦を無謀行為としたが実はちゃんと戦略的な意味がある。幻想軍は事前に暗号を解読し、ローマニア軍が攻略するのは主要3島ではない事を確認、残りの島も事実上放棄とされた。しかし陸軍の現地守備隊は自分達の島が放棄された事を知らず、この後激戦を戦う事になり、後に陸軍が海軍と空軍から痛烈な批判を受ける原因となってしまう。

同時刻、ローマニア軍を主力とするアルバニア帝国、ユーゴスラビア王国の神聖同盟軍が国境を越えてシルビアへ侵攻、その数35万、シルビア軍は国土はそこそこ広いのであるが人口が少なく、総動員した所で100万が限界、平時の兵力は38万であつた。

幻想国vsロマーニヤの戦争はネグロス島の戦いから始まった。

一月島攻撃の衝撃がありすぎた為か、こちらはあまり注目されなかったものの、それでもロマーニヤ軍1300人と幻想軍230人の間で激戦が行われた。5〜6倍の差があり、ネグロス守備隊には重砲も戦車もないにも関わらず、1日目の戦闘で幻想軍は善戦、ロマーニヤ軍は戦死135人、戦傷120人という前代未聞の損害を被ったが翌日、幻想軍の弾薬が底を尽き、指揮官の宇垣道長大尉は「我残存兵力一十九人ヲ持ツテ敵兵員ノ殲滅ヲ図リ最後ニ至ラハ潔ク玉碎シ皇国軍人精神ノ精華ヲ發揮スルノ覚悟アラントコトヲ望ム」と打電、その日のうちにネグロス島守備隊は玉碎した。

同時に上陸された3島の守備隊も1日〜2日の戦闘で玉碎、或いは降伏した。

早くも幻想軍は一挙に1130人を失った。

もちろんこれは先述のとおり陸軍の不手際とされたのである。

だが一方の海軍も……

「大型艦はおらんか……」

「やっぱり、今朝の潜水艦による偵察の通りだ。奴らの主力艦隊はこの海域には……」

「おっ！重巡洋艦クラスの艦艇を発見！」

「雷撃用意！進路そのまま高度下げ！！」

「ようし……行くぞ！沈め！！！」

「射っ！！」

ロマーニヤ軍攻撃機から魚雷が投下され、航跡を残して幻想軍重巡洋艦「三隈」に命中、轟音と水柱が雷撃成功を物語る。

「よし！旗艦に発信！軍港内二テ最大ノ艦艇雷撃ス！効果甚大！」

「やりましたね隊長！！重巡ですが主力艦艇がないこの状況では大戦果ですよ！？」

「ああ！戦艦や空母がいればよかったのだが……」

「敵機来襲！！一月島の防空隊と思われます！！！」

一月島に配備されていたのはジェット戦闘機、レシプロ戦闘機の混成部隊と雷撃・爆撃機・その他偵察・練習各種航空機である。幻想軍の戦果は撃墜29機、損傷74機、自軍の損害は撃墜38機、損傷21機とロマーニヤ軍より上であるがこれは離陸中に撃墜されたのが大半であり、空戦で敗れたのは10機に満たない。

また対処不能と判断した第1航空戦隊司令官は退避を命じ、それ以上の損害を被る事はなかった。だが軍港施設と一部艦艇に打撃を受け、一般市民に対する機銃掃射も行われ、死傷者は一般人も合わせると2000人を超えた。

これが一月島攻撃である。

しかし艦隊主力は伊藤長官立案の大演習の為、紺碧諸島付近の海域にあり、主力航空機も退避が完了していた為、幻想軍の損害はいたって軽微であった。

被害は重巡洋艦1隻、駆逐艦3隻、海防艦2隻大破着底と軍港施設の一部が破壊された事、航空機38機、記念艦大和が軽微な損傷に過ぎなかった。しかも修理が断念されたのは駆逐艦2隻と海防艦1隻のみであり、残り半数は1～2年後には戦列復帰するのであった。

この点から言えば、ローマーニヤ軍は戦術的勝利はおさめたものの戦略的には敗北を喫している。それでも軍港施設が火災を起こし、艦艇にも被害が出ており、混乱から航空機も多数撃墜、或いは撃破したと勘違いしたローマーニヤ軍は勝利を確信してしまった。それでも幻想軍はすぐには反抗できる状態ではなかった為、ローマーニヤ軍の攻勢は続くことになる。

攻撃翌日、最後通牒をローマーニヤに突き付けた後に創設された戦時のみの機関「大本営」から幻想国の重大な決断を、大本営発表にて世に流した。

「大本営陸海空軍部発表。我が国は先日未明、ローマーニヤ軍機動部隊の攻撃を受け、死傷者多数を出し、なおも戦闘続行中であります。三三院内閣は開戦を決定、本日早朝ローマーニヤ、アルバニア、ユーゴスラビアへ宣戦布告、TU加盟国も我が国救援の名目の下、西幻想国を始め各国が神聖同盟国に対し宣戦布告を行いました……朗読、宣戦布告の文。先日の羅アユ三国による宣戦布告の回答として、我が国は三国に対し、宣戦布告を決定、皇国臣民の総力を挙げて三国の攻撃に断固として抵抗する事をここに宣言する」

望まぬ戦争がついに始まったのであった。

その頃、ローマーニヤ軍が攻略しようとするマサール諸島の島、パナイ島では緊張が高まっていた。また、天界でもあの男が動こうとしていた。こうして第二次世界大戦の火蓋は切って落とされたのである。

26.

第二九話・運命の開戦（後書き）

御意見、御感想などお待ちしております。

第三〇話　パナイ島の戦い

マサール諸島パナイ島、つい最近開発が始まり、今では島民が住むがこの島を狙うロマーニヤ軍は島民の命など関係ないとかいうそう
だ。

そんなパナイ島を守備するのはリグル・ナイトバグ少佐率いる独立
パナイ警備隊360人である。リグルは虫の妖怪で力も特別高いと
いうわけではないのだが、虫を操る事が出来、また虫という事から
パナイのような南方の島では非常に元気であつた。

そんなリグルは本日気を取り乱しているようであつた。

「だからパナイに着任するのは嫌だつたのに」

「仕方ありません！」

「少佐殿！やるからには1日でも長くパナイを守り、増援を待ちま
しょう」

「万が一は少佐殿だけでもお逃げください！そして前線の有様を是
非とも軍に知らせてやってください」

部下達はリグルにそう進言する。

「わかった、万が一は脱出する。ただし貴方達も一緒よ」

「少佐殿、お気持ちは有難いのですが我々はこの命、お国の為に奉
げる覚悟であります！！」

「…わかった。私も虫虫馬鹿にされるのは嫌だし、出来る限りは戦い抜く」

こうして独立パナイ警備隊の信念は確かなものとなった。

ロマーニヤ軍はパナイ島攻略の為、1350人の兵員を用意していた。しかも戦車14両、装甲車15両も備えており、火力は幻想軍よりも上であった。

幻想軍には150mm級榴弾砲はなく、あるとすれば米国産105mm榴弾砲が6門、二式携帯砲数十、88mm高射砲8門程度であった。とてもロマーニヤ軍と真正面から戦える戦力はなかった。しかしリグルの作戦は「水際無意味」を掲げ、あえて敵を島に引き込んでから徹底した組織的ゲリラ戦で対抗し、増援を待ち、援軍到着後反抗を開始するというものであった。

10月2日午前4時、ロマーニヤ軍上陸用舟艇がパナイ沖に集結、1300人はいとも簡単に上陸した。武器を持たぬ島民は手を挙げ、戦意がない事をロマーニヤ兵に示した。この島にはそれほど若者の数も多くない為、戦闘に使える者など数百名に過ぎなかった。その数百名は各個でゲリラ戦を展開した。

「撃て!!」

パン！パン！

「敵襲!!」

「くたばれ幻想人ども!!」

しかし一般人ゲリラが持つものといえば十四年式拳銃、村田銃、竹やり、農具であり、正規軍であるロマーニヤ軍を相手にするには火力不足であった。ロマーニヤ兵は機関銃や一式機関騎銃のコピー品で討伐、さらにゲリラ徹底殲滅の為、全く関係のない村に対して迫撃砲などで攻撃し、主に民間人の犠牲者が目立ったのであった。

一方、独立パナイ警備隊は……

「距離250m！敵戦車見ゆ！！」

「砲弾装填急げ！！」

装填手が砲弾を装填する。

照準が合わせられ、士官が手を振りおろし、叫んだ。

「射っ！！」

大砲の重々しい音が南洋の島に響き渡る。

砲弾は戦車の後部に直撃し、戦車は後ろが破壊され火災を起こした。

「敵戦車1両撃破！」

「次弾装填！修正急げ！」

装填手は空かさず次の弾を装填。

そこへロマーニヤ軍歩兵が襲いかかる、今度は幻想軍歩兵の出番である。

「砲兵隊を援護しろ！！！」

機関銃でローマーニア兵を攻撃、文字通り彼らは蜂の巣となった。そしてある程度の砲撃を加えた後。

「撤収！！歩兵が時間を稼いでる間に急げ！！！」

「了解！！」

「撤収！！撤収！！」

慌しい撤収作業が行われるも、砲兵隊が撤収すると生き残りの歩兵も後退を開始し、ローマーニア兵は幻想兵をジャングル奥深くに見失ってしまう。ローマーニア軍はリグル少佐の罠に嵌り、思わぬ苦戦を強いられた。初日だけでも2個小隊が壊滅、中隊長1名戦死という損害をローマーニア軍は被った。翌日もリグル少佐指揮の下、幻想軍の組織的抵抗は続けられた。

どこからともなく現れる幻想兵はローマーニア兵を心理的に苦しめた。また、105mm榴弾砲の砲撃により本日までに戦車2両、装甲車4両が破壊されるという前代未聞の大損害を被っている。パナイ警備隊の5〜6倍の兵力を持つにも関わらず、ローマーニア軍は大変苦戦したのであった。

しかしほぼ同じころ、突如として天界が南天界、冥界に侵攻を開始。幻想国にも宣戦布告を行った。エラス王国も突如として大オスマン帝国に侵攻、その他幻想国への宣戦布告を行った。

天界が便乗してくる事はある程度予想されており、それに備えて南天界軍では準備が進められていたがエラス王国の参戦は想定外であった。これに対し、多国連では幻想国との共同戦線を築き、神聖同

盟軍に対処するという判断が下された為、多くの国がこれらの国に対し、宣戦布告を行った。ところがアメリカスは宣戦布告を行わなかった。前大戦同様に国民は反戦で中立でいたいからであった。

また他国もまだ具体的な軍事作戦を立案しておらず、この1か月ほどはU単独の戦いになる事が予想された。だが南天界軍は幻想軍の救援に頼らずとも、ある程度の抵抗ができるようにはなっている為、半年〜1年は戦い続けると予想された。

閑話休題

戦闘開始3日後、幻想陸軍パナイ警備隊はもはや風前の灯火であった。しかし敗走すれば自分達は軍はおるか、国全体の笑いものにされる。敵前逃亡は許されないと考えたリグルはある命令を下した。

「隊長殿、もはや我が軍には戦う力がございません。ご決断を」

「…各個に敵を撃滅しながら次の命令を待つて」

「…そ、それはつまり？」

「遊撃戦命令よ、いつかパナイが解放されるまで戦い続ける」

「それでは隊長も…」

「私を誰だと思ってるの？ロマーニヤ兵ごとき怖くないわ、得意の攻撃で地道に奴らの戦闘力を低下させる」

「…わかりました。我々も御供させていただきます！」

そしてこの日、独立パナイ警備隊司令部から各部隊に下された命令は「各個に敵を撃滅しながら次の命令を待て」というものであった。その後直ぐに司令部の破壊が行われ、リグル少佐ら数十名は撤退、数時間後に燃え盛る司令部がロマーニャ軍の手によって陥落した。だがリグル少佐の遊撃戦命令によって、パナイでの戦闘が終結する事はなかった。

たとえ民間人が降伏し、やむなく服従しているとしてもリグル達は戦い続けたのであった。

司令部陥落の情報を聞くと、大本営は直ちにこの事を国民に報告した。

「大本営発表、明治9年10月3日18時。1、パナイ島の我が部隊は、10月2日深夜より全力を挙げて最後の攻撃を敢行、所在の敵を蹂躪し、3日までに全員壮烈なる戦死を遂げたるものと認む！同方面の最高指揮官・陸軍少佐リグル・ナイトバグ、また同島に於いて戦死せり！2、パナイ島の島民は、終始軍に協力し、凡そ戦ひ得る者は敢然戦闘に参加し、概ね将兵と運命を共にせるものの如し！……終わり……（海ゆかば演奏）」

戦意高揚を図り、大本営は未だパナイのジャングルで戦うリグル少佐ら生き残りの98人も戦死したものとした。この放送の元ネタはサイパン玉砕である。がパナイ玉砕はサイパン玉砕が日本に与えた衝撃と同じぐらい、幻想国民に衝撃を与える出来事であった。

当然事実を知らない家族の人々は大変悲しんだ。

もちろん事実を知らないリグルの仲間も大本営によるリグルの戦死報告に大変悲しんだのであった。

さらに翌日、三千院首相は国会にて演説を行う。

「ロマーニヤ軍の攻撃は日に日に苛烈さを増していき、ついにマサール諸島の一角が陥落したのであります。このままいけばマサール島、モホール島、一月島が陥落するのも時間の問題であり、一月島が陥落すれば境目を通過し、ロマーニヤ軍地上部隊は本土に侵攻してくるのであります。また天界軍の南天界及び冥界に対する侵攻も半年後或いは1年後となれば、その2つは天界の占領地となり次は我が幻想郷であります。ですがかつて千鳥でライデンプルクの主力部隊を撃滅した時のように、我が民族が総力を挙げればこの危機も打開できるものであると我々は考えております。国家、民族の総力を挙げてこの危機に対処すべしであります」

三千院首相の演説は国民に勇気をつけた。

特にライデンプルクによる3度の千鳥侵攻を防ぎきったという出来事を思い出させた事は、特に幻想国民に勇気をつけさせた。こうして前大戦同様士気が高い幻想人達の国、幻想国にとっての2度目の大戦に突入する。

第三〇話 パナイ島の戦い (後書き)

御意見、御感想などお待ちしております。

第三一話・厳しい現実

10月7日、開戦から一週間が経過したこの頃、パナイ島守備隊は事実上玉砕はしたもののネリグル少佐率いる数十名は未だ抵抗を続けていた。特にリグル少佐はユニークな戦法で戦った。それは島の蟲を利用した戦いである。マラリア蚊を操ってロマーニヤ兵を遅い、マラリアにして苦しみ、戦闘力を低下されるというものであった。その作戦は既に始まっており、既に蚊に刺されたロマーニヤ兵はウン十人に上った。

この日、連合艦隊司令長官伊藤整一と、南方軍総司令官のアリスは博麗温泉の旅館の一室で密かに密談が行われていた。

「こんな時期に連合艦隊司令長官なんて、伊藤さんも大変そうですね」

「いやいや、それはお互い様、南方軍は少数兵力と聞きました」

「今の手持ちは25万、来年6月の反攻開始までに増員されてもいとこ30万。1人でも多く兵隊が死んでしまえば戦える状況ではなくなってしまうです」

アリスがこの事を知っているのも、2日前に行われた御前会議に出席した陸軍大臣、栗林忠道大將から話を聞いたからであった。その御前会議はまさに驚愕するような発言が飛び交う場であった。まず最初に話合われたのはいかに戦うかではなく、どうやって人的資源を増やすかであった。前大戦では異世界から説得して境目を通してさせたりなど、あらゆる手段で人口を増やした。

だがそれにも限界があり、今となつては通用しないものであつた。そこで紫は大胆発言を行ったのである。「命を投げる覚悟で大神隠しを起こし、人間、妖怪の大人は勿論将来を考えて子供とその家族も転移させる」というものであつた。確かに紫の力ならそれは可能であるが、何せ大神隠しをあまりやりすぎると無駄に体力を消耗してしまい、下手すれば死に至る可能性があつた。

その為、宮内省大臣の八雲藍は紫のこの提案に大反対し、陸海軍大臣や国家将校の海人と関でも、「陛下の命が第一でありますのでその案には賛同できません」と、反対の立場をとつた。

ところが次の紫の発言でその危惧も拍子抜けとなつてしまふのである。

彼女はこう発言した。

「それは1億とか8000万人とかなら私の命は危ない、でも5000万なら3日寝込むのみ」

そういうわけで5000万の大神隠しが行われる事になった。だが簡単に大神隠しといつてもその後の事が問題である。まずそれほど人間を住ませる家もなく、食糧自給率も100%を下回つてしまう。また予算的にも今の幻想国にとつては負担が大きすぎるのであつた。そこで紫は「皇室以前の八雲家の全財産を投じる」と発言、あまりの巨額であつた為予算の面はクリアできた。食糧については輸入で手をつつことに、衣食住は現在の都市の拡大及び新都市の複数建設などが行われる事になった。

だがそれでも追いつかない為、紫は家ごと転移させるという壮大な計画を提案した。しかし紫の体力の問題で世帯数は半分になり、またそんなたくさんの家を置く土地もなかった。だがこれも邪道な方

法で解決となった。未開地が多い西部に彼らを住ませることになったのである。

その他、多数の問題を抱えるこの計画だがこの分でゆくと、半年、1年後には国家崩壊の危機に瀕する為、戦後長く辛い処理の日々が続く事が容易に予想されたものの、この計画は決行される事になった。この計画が成功した場合、幻想国の人口は5900万人になる。イタリア以上の人口である。

また軍事力は若者が多い為、最大467万人に達すると予想された。ただし問題は装備が不足する事である。下手すれば小銃すら行き渡らない部隊が多数存在する可能性があった。だが前大戦でも施行された国家総動員法を再施行させ、根こそぎ動員を行わなければロマーニヤはともかく天界とは戦えない事が予想された。

予定としては11月1日に紫が一斉神隠しを行い、その後第1次兵備、第2次兵備、第3次兵備と増員が繰り返される事になった。また1人でも人を多く稼ぐ為にたとえ部隊にに装備が不足していたとしても、その部隊は編成が完結したと見做される事が即日陸軍内で決定となった。

6日夜に決定された事項によると、とりあえず4人に1丁銃が当たればそれでよしという事とされた。またその銃も三八式歩兵銃ならまだしも、村田銃や幕末以前に日本にあったような旧式銃、粗悪な簡易銃もやむなく倉庫から引っ張り出す事が決定となった。

砲兵隊も同様で四一式山砲ならまだいい方、かつて人間の里で使用されていたような幕末に薩摩藩で製造されたような大砲、民兵用の粗悪大砲も正規軍兵器として加える事になる。戦車に至っては生産が追い付かないであろうからと「万が一は各個でそこらのブルトー

ザーに装甲板と37mm砲を取り付ける作業をせよ」と戦車部隊のマニュアルに記載する事が決定となった有様である。

現在他国は地球という朝鮮戦争頃の技術レベルである。ロマーニヤは一步遅れているとはいえ、ジェット機の配備には成功しており。レーダーも一応存在している。そんな時代を粗悪兵器で戦えという。以前は質の向上に力を入れていた幻想軍だが今は正反対、粗悪品でも精神力で戦えと言っているようなものである。

「まったく、私も陸軍の話は今朝陸軍の友人から聞きましたがひどい内容ですな」

「ええ、どうやって近代戦を粗悪品で戦えっていうのかしらね？」

さらに根こそぎ動員によって徴兵された兵士もおそらく訓練はあまり行き届いていないはずである。練度も低ければ装備は最悪、アメリカスの州兵よりも弱体である可能性が高いぐらいであった。

「幸い私の南方軍に配備されているのは開戦前からの精鋭部隊です」

「それはよかった…しかし我が海軍はどうなるのでしょうか……まさか零戦を倉庫から引っ張り出すなんて事はないでしょうね？」

「陸軍が粗悪銃に幕末砲にブルドーザー改造戦車だったら海軍は商船改装空母…とか？」

「それなら使えるのですが…漁船に88mm砲を付けただけとかでしたらちよつと困りますよ。やれやれ、早くも幻想軍は末期日本陸軍化…いや、それ以上にひどい状態になるのですか…」

2人の密談は現実のものになるうとしていた。

11月1日、予定通り紫により神隠しが行われ、本格的な戦争準備が始まった。

この頃、開戦から1か月が経過し、主に神聖大陸と中東、天界、冥界では激戦が展開されていたものの、ロマーニヤ軍は幻想軍に対してはそれほど積極的に攻撃を仕掛けはしなかった。身の回りの脅威を取り除いてから叩く方針だからである。今ある戦闘といえば幻想海軍とロマーニヤ海軍の海戦であった。

…とはいっても、幻想国にとっての久々の戦争は前大戦ほど快調なものではなかった。

先日マダガスカルへ物資を運ぼうとする船団を撃滅する為に出撃した第5水雷戦隊の駆逐艦8隻と、船団護衛を行うロマーニヤ海軍の軽巡洋艦2隻、駆逐艦10隻とで行われたグランドコモロ沖夜戦では夜戦を得意とする幻想海軍が何故かロマーニヤ海軍に敗北し、駆逐艦2隻を失い、さらに1隻が大破するという損害を被った。ロマーニヤ海軍は軽巡1隻と駆逐艦1隻が大破したのみである。

電探により幻想海軍はロマーニヤ軍よりも先に敵を発見し、先制攻撃も幻想軍がし、軽巡に大きなダメージを与えることに成功したのだが敵の提督は名将であった。アルフレード・ガリバルディ少将指揮の下、ロマーニヤ海軍は直ぐに態勢を立て直し、反撃を開始したのであった。また運が悪かったのかこの時幻想軍が相手をしたロマーニヤ軍は海軍内でも最強と謳われる部隊であった。

また幻想海軍の第5水雷戦隊は他部隊から「かかし戦隊」と馬鹿にされている、いわゆるどこの軍にもある最弱部隊であった。開戦後、田中は「二水戦を出撃させればよかった」と後悔している。

また3日前、紺碧諸島にロマーニヤ軍の潜水艦1隻、人間魚雷3隻が襲来し、空母「千鳥」戦艦「遠軽」、駆逐艦「梨」、補給艦1隻が大破着底、さらに甲板にて待機中だった艦載機が10機ほど海に投げだされという大損害を被った。

特に千鳥は艦体が大きく傾斜する甚大な被害を被り、幻想海軍の空母機動部隊戦力は低下、開戦早々幻想海軍は正規空母1隻を失った。排水量36380tを誇るこの艦は丈夫で1本の魚雷程度なら耐えられるはずである。しかし特殊隊員6人による工作が影響して被害が拡大、6日は結局捕虜となるね、彼らの活躍の結果、この奇襲作戦はロマーニヤ海軍の決定的勝利となったのであった。

開戦から1か月、早くもピンチの幻想国、しかも天界と冥界から天界軍が迫っている。この戦争幻想国に勝ち目はあるのだろうか？

第三一話・厳しい現実（後書き）

御意見、御感想等お待ちしています。

ちよつとご都合主義すぎるので状況を少し不利にすべく、痛い目に
あわせてみました。

第三二話 / 冥界戦線

その頃、幻想郷上空6000mから侵入できる冥界にて……

幻想郷で紫の手によって大神隠しが行われている頃、冥界では天界軍と冥界軍との間で激戦が展開されていた。冥界侵攻軍総司令官として選ばれたのは出雲会戦で同盟軍を苦しめたライヒェナウ元帥である。

「このハデス要塞を守る冥界軍は総勢10万人である。敵軍はここで半年は持ちこたえると読んでいるようだが、もはや要塞は時代遅れの代物であるのは諸君も理解していると思う。まずは空軍を用い、徹底的に要塞に攻撃を仕掛け、防御力を失った所で要塞を包囲、敵を殲滅する。この任務を鑑田大将の第5軍に任ずる」

「はっ、現在我が軍には35万の兵がおります。空軍と共同で3か月以内には必ずハデス要塞を陥落させてみせます」

「うむ、一応天界大本営は半年と考えているようだが…我が侵攻軍にはそのような余裕はない。仰る通り3か月以内になんとしてもおとしてくれ」

「はっ！」

こうしてハデス要塞の戦いが始まったのであった。

冥界軍には戦車こそなかったものの、大量の重砲が配備され、さらに上から行くにしても高射砲の数が半端ではなかった。機関銃の数や兵員数もあの旅順要塞よりも多く、ライデンブルク軍が最後まで破る事ができなかった千鳥線を遥かに上回る防御力を持つ難攻不落

の主要要塞であると冥界軍上層部は期待しており、幽々子もこの要塞で半年〜1年持ちこたえ、反攻準備をする時間をくれると信じていた。

一度実物を見たアリスもこの要塞には期待しており、絶対に天界軍は破れないと内心想っていた。しかし旧ライデンブルクの鳳凰山要塞（現在も西幻想軍の要塞として存在）、かつての天界軍の武油田要塞など、難攻不落とされた要塞が陥落する事は結構あるのである。さらにハデス要塞攻略に投入される天界軍戦力は35万、冥界軍の3倍に昇り、攻撃3倍の法則が正しいのであれば十分落せる数だ。

さらに包囲されてしまえば冥界軍には補給が望めず、一時は猛威をふるったとしてもそれも一時的なものであり、陥落は時間の問題であろう。それでもこの要塞に期待しすぎた冥界は何の対策も打つことなく、戦いに突入する。

冥界空軍基地

「敵襲ー！！」

冥界軍の最新鋭戦闘機であるロマンノフ製のmig-15が発進しようとしていた。その数は70機に上る。だが天界軍は300機の編隊であった。それでも彼らは冥界を守る為に飛び立つ。だがその結果は著しいものではなかった。

「何！？帰還はてきたのはたったの15機だと！？」

「はっ！我が方の戦果は敵機89機撃墜！かなりの戦果はあげましたが…ほとんどが天界軍の護衛機にやられてしまったようです！！」

最もこれは期待の性能ではない。

天界軍の主力機であるT e 1 8 2「イルリヒト」は性能的にはm i g - 1 5とほぼ互角である。しかし搭乗員の練度と天界のミサイル技術の発達がこの悲劇を生んでしまい、大半がミサイルにより撃墜されたしまったものである。だが冥界軍側もかなりの戦果を挙げた。

その頃、白玉楼では幽々子と天子が東方議会議長を務める亀梨と会談を行っていた。彼は予備役ながら陸軍大将でもあり、ある程度の事は学校で学んでいる為、幽々子や天子よりもその辺の事には強い男である。

「ほ、ほんとなの？ハデス要塞は半年もしないうちに陥落するって……」

「嘘でしょ？だって幽々子の考案で構築されたあの要塞が？」

幽々子と天子が亀梨から聞かされた事はハデス要塞が2人の予想よりも早く陥落するであろうという予想であった。

「亀梨さん、一体どういう根拠があってそんな事をいうのかしら？」

「確かに要塞は前大戦の戦術が通用する今なら有効であります。数か月は持ちこたえるでしょう。ですが、ハデス要塞には決定的な欠点があります。高射砲の数が圧倒的に足りず、現地に配備されている空軍機の数も圧倒的に少ない、つまり制空権は常に敵のものであると考えていただきたい。いざとなれば敵は空挺作戦を敢行するのも簡単でしょうし、占領の主となる歩兵も戦車に守られ、後方からは大量の火砲が要塞を砲撃します。それぐらいなら耐えられるかもしれませんが包囲されてみれば、いずれは弾薬がつき、制空権もなく輸送機を飛ばす事すら難しくなります。従ってあの要塞は半年以

内に陥落する可能性が非常に高い。今のうちに後方にも陣地を構築するべきであると私は確信しております」

「…もしやらなかったら？」

「もしやらなかったら結果は想像がつくでしょう。仮にやったとしてもこのあたり首都が占領され、我が幻想国内で決戦が行われるはずです。そこで冥界軍の残存兵力も戦うという事を覚悟していたきたい」

亀梨の最終決戦思想によると、万が一は幻想郷で決戦するものであった。その作戦名は「決号作戦」である。前大戦のものとは違い、まずは妖怪の山に敵主力部隊を揚陸させた後、徹底したゲリラ戦を展開、麓まで降りると効果的に撤退し、首都京都近郊にて決戦、失敗すれば西に後退し戦線を縮小、魔法の森に敵軍をうまく引き込み、苦しませ、遊撃戦を展開、開けた場所まで来た消耗している敵部隊を再編した大部隊によって迎撃し、それでもダメならば西幻想国との国境まで後退し、千鳥線も含めた「第幻想線」で最終決戦を仕掛ける。

これが今大戦における決号作戦であり、戦前から万が一の場合を考えて計画されたいた作戦である。

冥界軍はかねてより天界の侵攻を危惧しており、実に997万人の人員を抱えていた。霊の数ほど動員できるとは言われているが、通常の軍隊としては明らかに過剰な数である。何故これほどまでに人員が多いのかというと所詮は幽霊の寄せ集めで練度も低い、そこで幽々子は「質がダメなら数があればいいと思うわ、飽和攻撃こそ敵に勝つ一番の方法よ」と発言、軍はその通りに動いたのである。

…とはいえ、兵器の生産が追い付かず、カスみたいに装備しかしていない部隊さえも現在冥界には存在していた。しかし開戦後、ロマノフの全面的な支援によって最近は改善の方向に向かっている。

「まああそこからここまでは1500kmもあります。例えるなら外のベルリンとモスクワの距離です。しかもロマノフのように道路網が不完全で霊の数も半端ではないこの冥界で天界軍がどこまで戦えるかは自分も予想が付きません。しかし相当な苦勞を見せるのは確かでありましょう」

「いざとなれば私が前線に、力を使って兵士達の死を操るわ」

「それはやめたほうがいいと思いますよ、霊にも効果があるように特殊加工を施した天界軍の敵弾に中ればいくら亡霊の西行寺さんと言えども無事では済まされません」

「いいのいいの、大体最近の人間は私達の力を過小評価し過ぎだわ。少しは幻想郷の妖怪やその他異界に住む者も含めた種族を信用しなさい」

「私も出来る限りはそうしたいのであります。なのですが、一部の馬鹿が最近人間優越を謳い始めております。東方議会議長の自分としてもこの状況から早く脱したいものであります」

幻想郷やその周囲の世界、そこに住む者達の事情に外来人で最も詳しい亀梨はこの一部の人間による「人間優越思想」を批判するうちの一人であった。彼はこの世界に来てからの独自の調査で、人間と妖怪は共に生きていてこそ互いに発展するものであるという結論を下している。事実幻想国の研究者や歴史家、妖怪達、そして妖怪の一時的な衰退を経験した紫達はその事を認識しており、人間優越主

義者をどうにかしてほしいと政府に進言するくらいであった。

政府は赤狩りならぬ至上（幻想郷において最近生まれた言葉で人間優越主義の意）狩りを実施し始めている。軍部も軍内にいたとすれば2階級降格処分にするという規定を制定した。最もこれは妖怪やその他種族に配慮した結果であった。政府がこのような厳しい事を行うのも彼らによる反乱を恐れているからである。

「それなら努力あるのみな、まあそれはともかく、私は今はこの戦争を戦うことに専念する。後の事は戦後に回すわ」

「そうですか、我が幻想国としても流石に人員数の関係で兵員の派遣は無理であります、顧問派遣、技術提供、各国から来る物資の輸送等、出来る限りの支援はさせていただきます」

「よろしく頼んだよ」

3人の会談はこれにて終了した。

始終亀梨は幽々子らに頭が上がらなかった。人間と妖怪の平等を謳いつつも立場を理解し、ガチンコバトルで妖怪には太刀打ちできない事を彼は理解していたからである。それでもTUのトップに立つ者としての威厳を失う事はなかった。

亀梨は昔から活躍してきた人物であり、今では彼あつてのTUであり、人間と妖怪があつてのTUであると言われるくらいである。それほど周囲からも信頼されている男であった。

第三二話 冥界戦線（後書き）

ご意見、御感想などお待ちしております。

第三三話 特殊作戦計画

11月3日、敗退を重ねる幻想国だがある作戦の準備が密に行われていた。その作戦とはムツソリー二暗殺であった。神聖ロマーニヤ帝国皇帝となったはいが天界の操り人形にされている事は既に情報本部によつて解明されてはいるものの、それを表に公開する事は勿論なかった。

しかし操り人形ながらもムツソリー二皇帝の影響力は絶大で前大戦に勝利し、今大戦でも勝てると信じているロマーニヤ国民の戦意を大いに高揚していた。集団戦が苦手と言われるロマーニヤであるが、その気になれば強いのは確かである。なので彼らに精神的にショックを与え、戦意を失わせてロマーニヤを内部崩壊させればよいのではないかと情報本部は考え始めたのであった。

そこで東機関や陸海空軍の一部と共同でこのムツソリー二暗殺計画「特殊M（ムツソリー二の事）作戦」通称「M特作戦」が立案された。旧式貨物船「東進丸」をロマーニヤ船に偽装し、出来るだけテヴィレ川河口まで近づけ、そこから特殊内火艇に羅国特遣隊^{ろこくとつけんたい}25人を乗せ、首都ロマーニヤまで行ったら揚陸させ、サンタンジェ口城に潜入させ、破壊工作とムツソリー二暗殺を行った後に再び内火艇に乗り、河口まで出て幻想軍の伊600が25人を拾うという作戦だ。

なお内火艇は証拠隠滅の為に任務終了後、爆弾を仕掛け自沈させる予定であった。

この作戦は当初、情報機関や東機関の戦闘要員が行うものとされたが幻想郷の凄腕傭兵や実戦経験豊富な軍人にやらせる事となったの

であつた。幻想郷の凄腕傭兵とはつまり東方キャラである。

情報本部は多額の報酬を条件に凄腕傭兵を開戦5日後に行われた。その結果、名無しに近い者もいたが、主な東方キャラとしては以下の者が集まつたのである。

() 内は目当て。

博麗霊夢 (お金)

霧雨魔理沙 (お金)

メディスン・メランコリー (自身の毒薬を試してみたい)

十六夜咲夜 (海斗が戦つてるんなら自分も少しは役立つ)

藤原妹紅 (輝夜にはない武勇伝をつくる為)

河城にとり (ロマーニヤの武器を出来れば鹵獲したい)

魔理沙と霊夢は流石であつた。

そしてこの特殊作戦の指揮官に選ばれたのは海軍陸戦隊明治島警備隊長の豊崎茂海軍大尉である。

以前非常識探しに参加した男であり、同時に陸戦隊の人間でヤーツク島で実戦も経験している男である。その時は海軍少尉であつたが今は昇進し、海軍大尉となっている。

M特部隊は別名豊崎部隊とも呼ばれている。

その豊崎部隊のメンバー、豊崎も含めて25人は現在一月島の呉軍港の兵舎に身を置いていた。ロマーニヤ軍の攻撃により、損害を受けていた軍港であるが早くも復旧作業が開始されている。

「はあ、いよいよ明日かあ」

「まったく、どうして咲夜がこんな所に来たのよ、海斗も娘さんも心配するでしょ」

「大丈夫よ、戦闘経験は豊富だけど？」

「ま、そうだろうけど」

お金儲けの為に志願した霊夢は夜の星空を見ていた。

…っといっても一月島はそれなりに栄えているのであまり星が見える場所ではない。それでも夜空を眺める事は心が癒される事である。

「おゝっす霊夢！どーした？元気なさそうだけど怖いのか？」

「別に、あんただって何それ？」

魔理沙は何故か人形を持っていた。

「これ？今日アリスにもらったものだけど？」

（このレズが！）

霊夢は内心そう思った。

実際の所そうなのであるが、何よりアリスが軍人になってからというものの魔理沙とアリスはなかなか出会う機会がないのである。一度でも会えればそれは魔理沙にとってはとても嬉しい事なのであった。

「なあ霊夢とついでに咲夜、東進丸ってどんな船だ？」

「私はついでかよ！」

「東進丸？知ってるわけないでしょ」

「そつかあ、幽霊が出る船だったら面白いんだけどなあ」

「出るわけないでしょ…普通の商船には」

「案外いたりするかもしれないよ？」

「げっ！毒女！」

魔理沙はメディスンの事を何気に嫌っている様子だ。

実は誰にも知られていないが3年前にメディスンの悪戯で魔理沙の飯に毒をもったらしい、そして魔理沙は一週間ぐらい寝込んだそう。でそれ以来メディスンの事を魔理沙は避けるようにしているという。

「誰が毒女かしら？ふふふ…」

「こここ、怖っ！霊夢！こいつこわいぜ」

「はいはい…」

一方妹紅は豊崎大尉と話をしていた。

「豊崎大尉はどちらの出身ですか？」

「俺は横須賀の出身だけど？」

「よこすか？」

「まあ日本の街だよ」

（日本人か…予想はついていたけど）

この日豊崎は第3種軍装を着用していた。
言わば彼の普段着である。

さらに恩賜の短刀も彼は持っていた。

豊崎大尉は海軍兵学校卒で成績優秀生であつた為、天皇より恩賜の短刀が授与されたのである。

「藤原さんも日本人？」

「まあ、一応そういう事になるとは思いますよ」

「なるほど、貴女結構お強いと噂だけど…」

「まあね、輝夜とは毎日が殺し合いでしたし」

「殺し合い…か」

ヤーツク島でリアル殺し合いを経験した豊崎からしてみれば妹紅と輝夜の殺し合いなどお遊び程度であると思っていた。それほどあの島での戦いは戦後の彼に影響を与えたのである。戦っている時は平気でも戦後に悩む…つというのは軍人にありがちな事である。彼もその一人なのであるが、軍人としてそうは言ってられないので実際の感情を表に出すことなどは滅多になかった。

一方の妹紅も戦争なんて甘いと思っていた。
それだけ輝夜との殺し合いは熾烈なのである。

「あんまり元気がなさそうですね、豊崎大尉」

「ええ、はたして俺なんかがこの作戦の指揮官に適任なのか、悩む所だよ」

（なるほど、まあ確かに指揮官には御免だけど友達としてならやっ
てきそうだわ）

妹紅から見れば豊崎大尉は少々力不足なようである。

それでも彼は任務を任された以上、羅国特遣隊を率いて任務を遂行
しなければならぬのである。翌日…

「我が豊崎部隊は0000を予定に敵地へ上陸！警備兵の密かな排除
を行いつつムツソリー二の部屋付近に時限爆弾を仕掛け、速やかに
撤退する！一見単純な任務のようだが既に東進丸に乗り組んだ時
点で作戦は発動しているものと考えていたきたい。南大西洋には
ロマーニヤ軍がうようよしており、途中で東進丸が撃沈される可
能性があるがその時は…諸君ら傭兵だけでも生き残ってほしいと私は
考えております！」

そういったのも咲夜が豊崎部隊の隊員にいたからである。

もし彼女が死んでしまえば海斗に合わせる顔がなくなってしまうか
らだ。

「きょーつけ！敬礼！！」

一応指揮官が海軍の軍人である為、豊崎部隊の隊員は海軍式で敬礼
を行った。ここで羅国特遣隊の退院の装備を簡単に説明する。

基本は海軍陸戦隊のものであるが襟のあたりに。の中に「特」とい
う時が縫われている。これは特殊部隊である証拠だ。武装は手榴弾、

十四年式拳銃、サバイバルナイフ、中には軍刀を装備する者や毒薬を持つ者、そして危険物を持つ者もいた。万が一の戦闘の為、一式機関騎銃も数十丁が用意されていた。

車両類は一切ない、一般人には可哀そうだが現地が一般人を殺害し、かつばらうという方法で車両をゲットする事になった。後は水筒と僅かな食糧である。

羅国特遣隊25人は特殊作戦遂行の為、東進丸に乗船した。

第三三話 特殊作戦計画（後書き）

御意見、御感想等お待ちしております。

今回の作戦では一応東方っぽい戦闘を予定しております。

第三四話 / M特作戦

数日後、ロマーニヤ、テヴィレ川河口。

1隻の内火艇が夜のテヴィレ河に侵入、両舷にロマーニヤ語で「我らの救世主ムツソリーニ」と書かれ、さらに国旗はロマーニヤのものを掲揚、このような小型の船舶がテヴィレ側を航行する事は戦時下の今ではごく当たり前の事であった。

しかし中に乗っているのは完全武装の幻想人であった。

「現在の所我に感づく敵なし！」

部下の1人が豊崎にそう伝える。

「よし、このままロマーニヤへ突入！」

豊崎部隊は感づかれる事もなくロマーニヤへ突入。

上陸を開始し、早速街道に25人は姿を表した。丁度いい所に水口の付きトラックが走ってきた。ここで咲夜の出番である。

「任せない」

咲夜はジャンプし、水口の上に乗っかって匍匐前進で前に行き、そのままうまくトラックの運転台の中に乗り込んだ。

「な！？わあああ！！！」

「失礼」

咲夜は一瞬の隙に男の首に刃物を突き刺し、助手席へ退かして自身がトラックを運転した。危なく建物にぶつかる所であったが一応海斗と一緒に大型特殊免許を持っている咲夜はトラックを運転できた。数十秒かけて豊崎達の所に戻った。

「この男の死体どうする？」

「朝にはおさらばだ。捨てておこう」

豊崎の方針で男の遺体は置き去りにされた。

そのままトラックはサントンジェ口城へと向かった。

途中にロマーニヤ軍の検問もなく、トラックは快走した。

ロマーニヤ側は現段階で敵が本土に来るはずがないと、本土の守りを手薄にしている事はおろか、警備すら怠っていたのである。

サントンジェ口城の裏まで到着すると、咲夜はトラックを止めた。

そのまま豊崎部隊の25人はサントンジェ口城へとこっそり侵入を開始した。まずは見張りをしていた兵士を咲夜が襲った。

シュタツ！

「ん？…おつ！？…ああ……………」

突如として後ろから斬りつけられた兵士はそのまま倒れこんでしまった。

さらに豊崎大尉も背後から忍び寄り、軍刀で敵兵を斬りつけ数人を殺害した。

魔理沙や霊夢、その他も渡されたサバイバルナイフで密かに殺しつつ、目標地点まで迫っていた。

そしてにとりはロマーニヤ軍の武器を回収していた。

「これより爆弾を設置する」

「任せてくれ、こんなのちよちよいのちよい」

にとりが設置を開始した。

そのほかのメンバーも設置を手伝う。

「なあ？マスタースパークで一気にぶっ飛ばすってのはダメなのか？」

「当たり前でしょ…… お金欲しかったら言われた通りにしなさい」

一方、ムツソリーニは

「がああ……ぐがあ……」

ぐっすりと寝ていた。

爆弾がセツトされている事など気がつかなかったのである。しかしその安眠を邪魔する電話が入った。

「ん？余だ？誰だ？」

「はっ！空軍参謀長ドウエであります！高速の巨大な航空機が我が都市上空に16機侵入！迎撃機すら今から上がっては追い付く事が難しい速度です！」

「なんだと！？…おい！どうした！？」

「ば…爆撃…ロマーニヤが爆撃されている！」

「なんだと!？」

それは一月島から飛び立った空軍の式噴進重爆撃機である。

国民を沸き上がらせる為にはよい知らせが必要だ。その為、空軍は16機編隊による決死爆撃隊を編成し、ロマーニヤ本土爆撃を行わせたのである。この作戦に慎重論を唱える海斗ら慎重派軍人は反対したものの、「たとえ全滅したとしても決死隊の雄姿は宣伝になる」という強硬派の意見が通され、作戦は発動された。

しかし結局爆撃作戦は成功し、指揮官機から「我爆撃二成功セリ、味方損害ナシ」という電報が送られた。万歳の声が司令部で響いた瞬間である。しかしこの作戦の成功はパイロットの精神力というよりも式噴進重爆撃機の恐るべき性能のお陰である。この頃の爆撃機の性能と肩を並べられる爆撃機を持っている国は限られていた。ロマーニヤのジェット戦闘機でもその高度まで昇る事は簡単で、最高速度も速いが追い付けず、取り逃がす事が多かった。

結局すべての空軍機から16機は逃れる事ができたのである。この爆撃作戦以後、ロマーニヤは防空という事をかなり重視するようになるものの、時すでに遅しという感じではあった。

そして豊崎部隊も…

サントンジエ口城内で大爆発が発生した。

「何事!？」

「爆発だ!」

「皇帝陛下!!」

ロマーニャ兵は必至にムツソリーニの部屋に向かった。
しかしムツソリーニの部屋は瓦礫の山であった。煙が漂う中、声が
聞こえてくる。

「皇帝陛下……」

「待て!よく耳を澄ませ!」

「……だ……誰かあ……誰かあ……余を助けてくれ……」

「皇帝陛下!!」

「御無事のようなぞ!すぐに救出しろ!!」

悪運が強かったのかムツソリーニは瓦礫に挟まれ、重傷を負ったもののなんとか生還した。一方25人はというとトラックが目前であるというのにロマーニャ兵に見つかり、戦闘中であった。

ドガガガ…

パン!パン!

「ええいくそ!!」

「どいて!!……ふん!!!!」

妹紅はスペルカードを使用した。

今回使用したスperlカードは不死「火の鳥 - 鳳翼天翔 -」である。炎がロマーニヤ兵を襲い、そしてロマーニヤ兵たちを焼き殺していった。妹紅の戦闘力を部隊にすると1個中隊は簡単に丸められるほどである。すなわち数人の兵士では奇襲でも仕掛けない限りとても妹紅には勝利できないのである。

「あれ？メデイスンは？」

撤退しようとした最中、霊夢はある事に気がついた。それはメデイスンの姿がない事である。

「ああ、あいつなら毒盛りにいったぞ？」

「この一大事に限ってなんでいないのよ……」

「あらあら、もういますか？」

霊夢の背後には腹黒そうな顔をしたメデイスンがいた。

「うわっ！あんたいたの？」

「撤退するよ」

「よし！総員すぐにトラックに乗れ！」

豊崎の命令で皆トラックに乗り、サンタンジエ口城を離れた。その後も数回ほど攻撃を受けたがすべて魔理沙や霊夢といった強豪達によって撃破されてしまい、最後の戦いもとりが鹵獲したロマーニヤ兵の銃を使用して戦闘、勝利した。

「全員乗ったか!？」

「点呼終了!全員おります!」

「よし!急いでロマーニヤを脱出するぞ!」

テヴィレ河を脱出すれば潜水艦が待っている。

だが武装などないに等しい内火艇ではとてもロマーニヤ軍の攻撃には太刀打ちできない。移動中に攻撃を受ければ生還の希望はなくなってしまう。まさに豊崎部隊は特殊部隊ながらも決死隊であった。

だが彼らはなんとか河口まで見つからずに到着する。

水口付きトラックを内火艇を停泊させてある場所から500mの地点に捨て、そこから移動した為ロマーニヤ軍はロマーニヤ国内を逃がっていると勘違いしたのだ。

一応海軍の艦艇も対潜哨戒を行ってはいるものの、伊600は見つからずに単艦で河口付近に接近する事に成功した。なお、陽動として数隻の幻想軍潜水艦が行動しており、そのうち伊30と伊503がロマーニヤ軍の駆逐艦に撃沈された事は戦後になるまで軍は情報を公開しなかった。

伊503は伊五〇〇型潜水艦という戦後製の潜水艦でヴァルター機関にシュノーケルといった新技術を盛り込んだ潜水艦である。とはいえ、ハルシユタットのXXI型Uボートよりも完成が遅かった為、盗作疑惑が浮上したが船体はXXI型Uボートよりも大きく、航続距離も長い。ちなみに艦載機は晴嵐1機のみである。

幻想軍には潜水空母思想がないので3機も搭載できる潜水艦は未だかつて建造された事がない。そもそもそれほど有効な手段でもない

為、幻想軍は潜水空母に興味すら示さなかったのである。

さて、豊崎部隊はというと無事に帰還、内火艇を自沈させ、伊600に乗り込み帰路を辿った。ちなみに伊600の艦長は水蜜少佐である。新型潜水艦の乗組員訓練が終了し、老朽化が進んだ伊25の廃艦が先月決定した為である。

夜

「豊崎大尉、お疲れ」

「いえいえ、傭兵の皆さんなしではあの作戦、失敗してしまいましたよ……あつ！村沙少佐殿！見てください」

「あれは夜光虫？」

夜の大海原に光るものが多数、夜光虫の光によって周囲は幻想的な雰囲気にも包まれた。

豊崎と水蜜は思わず夜光虫の光に見惚れていた。

「綺麗だね」

「はい」

「艦長！豊崎大尉！」

水兵が艦内から何かを持って現れた。

「水雷長じゃない」

「はっ！これを…無事に羅国特遣隊を回収できたのも艦長のおかげ、
どうしてもお礼がしたくて…これをお持ちしました！部下が運ぶ
と言いましたがどうしても私自身の手でこれを艦長にお渡ししたく
て…豊崎大尉もどうぞ！」

「じゃあいただくわ…このコーヒー…おいしい！」

「なかなかいける」

水雷長は笑顔であつた。

夜光虫の光はまるで伊600潜水艦を歓迎しているかのようなのである。
そんな中を伊600は祖国の港を目指して航行した。

第三四話、M特作戦（後書き）

御意見、御感想などお待ちしております。

第三五話 海斗着任

6951年11月30日、この日第5航空団司令官に織本海斗空軍少将が着任した。

第1航空団司令官からの転任で左遷のようにも見える。確かに左遷といえば左遷であるがそれにはわけがあった。第5航空団が彼を必要としていたからである。その為彼の給料などに一切の変化はなく、むしろ待遇は第1航空団時代よりもよくなったというのだ。

何故に第5航空団の司令官となったか、それはマサール諸島防空戦には彼が必要だからである。その理由は前司令官小磯達昭少将よりも熱血で部下思いで前大戦の英雄で部下の士気も上がるからであった。

「敬礼!!」

海斗に全員が敬礼した。海斗は答礼した後、話を始めた。

「私が織本海斗だ。實力不足ながら最前線の第5航空団の前司令官、小磯少将及び上からの要請によりこのたび第5航空団司令官に着任した限りである」

その後海斗は司令部入りし、雑務を開始した。

マサール諸島の一角がロマーニヤに占領されてからまもなく2か月が経過しようとしていた。パナイ島には現在ロマーニヤ軍が空軍基地を建設中であり、妨害の空襲は加えているもののまもなく完成となりそうであった。

従って今後は基地爆撃と共にマサール諸島防空を考える必要に迫ら

れた。それまで航空機の航続距離から機動部隊の艦載機以外と爆撃機以外は特に警戒する必要もなく、空中戦もそれほど回数が行われていなかった。しかし今度からはそうも言ってられなくなったのである。

用意された航空機は戦闘機だけでも210機である。

・噴零戦87機

・雛菊三型123機

雛菊三型とは雛菊の改良型であり、エンジン出力の向上と機体自体の改良が行われた。運動性能は若干低下したもののそれを搭載するミサイルでカバーする形となった。最高速度は1065km/h、なお噴零戦よりはもちろん低性能である。噴零戦は最高速度1120km/h、航続距離2000km/h、30mm機関砲×4、翼下に500kg爆弾×1ないし800kg爆弾×1、ミサイル×4、増槽上昇限度は14600m、比較的航続距離が長いのが特徴である。

天界戦線で試験的に運用されている16機のうち、2機は撃墜されたが天界軍機6機を撃墜する戦果をあげるなど、戦闘力は高い。

「敵襲!!!!P・120重爆撃機約100機!!!!P・108重爆撃機100機!!!!マサール南南西100km付近!」

P・120はピアッジョ社が開発したロマーニャ版B-29である。P・108はリアルイタリアにも存在した機体で簡単に言えばイタリア番版B-17であり、この世界の場合はロマーニャ版B-17である。いずれにしてもオリジナルよりは性能も低いが如何せん数が多い。

これまで生産した爆撃機の大多数を投入してきたという感じである。

「護衛機はいないのか!？」

「はっ!護衛はいません!」

すると海斗はにやつと笑った。

彼はどんな爆撃機だろうと護衛がいなければ戦闘機の餌食である事ぐらいわかっていた。ましてや相手はレシプロ機、幻想軍はジェット機で距離も離れていた。

「すぐに敵機を迎え撃て!護衛はおらんようだが一応注意せよ!」

「了解!」

すぐに一月島、マサール島、モホール島の空軍基地から150機のジェット機が出撃した。

そもそもロマーニヤがこれほどたくさんの爆撃機をマサール諸島に飛ばしてきたのは何故であろうか、時は少し遡る。M特作戦の際にロマーニヤ本土が幻想軍機に爆撃されたのは世界中に大きな衝撃を与えた。

ロマーニヤはその報復の為に数百という編隊で向かわせたのである。護衛機は航続距離不足でついてこれなかったが、B-29のコピー機は防御火器が豊富だから大丈夫だというムツソリーニの勝手な命令が下された為、このような無謀な作戦が結構されたのだ。

もちろん空軍上層部はこの作戦に難色を示した。なんたつて爆撃を加えるのはあのマサル要塞である。護衛機なしの爆撃機などこの時点ではたいして強いはずもない。

「現在高度11000!……」

「高度8000にて敵編隊を確認!」

「でけえ……」

パイロット達は大型爆撃機の編隊を見て圧倒されていた。

だがそんな雰囲気余所に流し、士気を高めさせたのは隊長である。

「俺達は狼だ!小柄ながらも集団で戦えばロマーニヤ人よりも遥かに強いって所を見せてやれ!」

「了解!」「」

無線機からそのような声が聞こえてくると、隊長は命令した。

「よし!突撃!!高度8000まで降下!上空より襲撃する!!」

ロマーニヤ軍

「ん?…お、おいあれ!」

「…ま、まさか!?」

「ぐわあああ!!」

1機に次々と穴があき、エンジンから火を吹いて高度を下げ、しばらくすると爆発した。

そのようにして撃墜されてゆく爆撃機はさらに増えていった。幻想

軍機の襲撃である。

「皆冷静になれ！弾幕を張るんだ！」

「助けてくれ！死にたくねえ！」

外から見れば幻想軍機から凄まじい勢いで葉莢が排出されていた。それほどの攻撃を加えて爆撃機を撃墜するのである。さらに爆撃機を襲うのは機首の機関砲だけではなく、各機に搭載されているミサイルであった。この時点でミサイルをまともに運用できるのは幻想国と天界とハルシュタットのみである。最近はそれにアメリカスやイングランド、天界の支援を受けているロマーニヤも入るうとしている。

「誘導弾発射！！」

バシュツ！！

幻想軍のミサイルはスパローと似たようなものである。なおサイドワインダーと同じようなものもあるのだが、赤外線追尾式のミサイルではジェット機と比べて排熱が少ないレシプロ爆撃機を撃ち落とすにもなかなか追尾してくれないであろう。

その点からすればレーザー誘導型のスパローもどきミサイルを選んだのは正解であった。

「ふう、撃っちまった。結構値が張るんだよなあ誘導弾は……」

隊長がそうボヤキながら機体を上昇させた。

幻想軍の攻撃は凄まじかったがそれでもロマーニヤ軍は数にモノを

言わせ、一月島上空付近に差し掛かっていた。いよいよ追加のジェット機やレシプロ戦闘機「瑞雷」も出撃した。また街の中では空中に備えて軍が一般市民を安全地帯まで誘導した。

目標の少ない北部や戦前から造られた防空壕なら多少の爆弾ぐらいなら大丈夫なはずである。少なくとも生身で街中にいるよりは遥かに安全だ。

陸軍と空軍の高射砲部隊、海軍の艦艇も対空戦闘用意を開始、特に期待できるのは陸軍の高射砲部隊だ。陸軍は大口徑高射砲に対空射撃管制装置「河城二号電探」との組み合わせにより、有効な対空戦闘を展開できるほか、三式地对空誘導弾の改良型である七式地对空誘導弾の発射基地も南部にあった。

「目標我の航空機と交戦中なれども接近中！まもなく上空に到達します！」

「誘導弾発射用意！」

幻想兵が操作しているのは戦後造られた高速電算機である。

「敵高度5000m飛行中！！」

「用意……射つ！！」

ボタンが押されると、1本のミサイルが火を噴いて離陸していった。さらに2本、3本……次々とミサイルが基地から発射された。そしてミサイルはロマーニヤ軍編隊を襲う、しかも彼らは既に幻想軍機と陸軍の高射砲部隊の激しい攻撃に晒されている状態だ。

「くそ……流石はマサール要塞だ。凄まじい対空砲火だ！」

「……あつ！指揮官機被弾！墜落します！！」

「何！？高射砲弾か！？」

「……いえ！おそらく地上から発射されたミサイルです！！」

「奴ら……ミサイルを地上から発射して航空機に命中させられるのか
……うっっ！！」

……

……

……

ロマーニヤに帰還できた爆撃機は200機中たったの36機であった。

そのほとんどが航空機と高射砲とミサイルによって撃墜されたのである。一回の空襲でこれほどの損害が出るとはロマーニヤも予想外であった。ただ幻想軍側もミサイルの不発が予想よりも多発したりなど、新たな問題点を見つけた上に一月島の街も無傷ではなかった。しかし死者320人、負傷者580人と比較的少人数の犠牲で済んだのは空襲直前の懸命な避難のおかげであろう。

一方幻想軍の損害は航空機18機（ほぼ誤射による）、軍港施設一部破損、陸軍要塞一部損傷、軽巡洋艦1隻大破などである。だが大編隊を迎撃し、壊滅状態にさせ、こっちの損害を比較的少なくてどめる事ができた海斗はやはり幻想国民から英雄視されたのであった。そして他人を重んじてすぐに避難させるよう陸軍に命令した南方軍司令官のアリス大将もまた英雄視されたのであった。

第三五話 海斗着任（後書き）

御意見、御感想などお待ちしております。

第三六話、作戦計画と小国からの訪幻者

12月8日：今日は外でいう真珠湾攻撃の日だ。

もはや生き残りも少数であろう。そんな中、異世界では戦争が続いていた。先の空襲で200機近い航空機を失ったロマーニヤ軍だが天界の支援を受けている為、戦力の復活は半年ほどであろう。それに重爆撃機がなくなっただけでほかの爆撃機はまだまだあるし、何よりもマサル要塞を爆撃したというよい宣伝題材が生まれたわけなので先の空襲は戦術的大敗を喫するも戦略的には一応勝利をおさめたのだ。

そこがM特作戦との大きな違いだ。

M特作戦は戦術的勝利は収めたもののムツソリーニの暗殺失敗、「卑怯な手段を使う異端者がいる」とむしろロマーニヤ人の戦意を高揚させてしまい、戦略的には失敗した部分が多い。なんたつて当初の目的を達成する事ができなかったのである。しかも貴重な艦艇（潜水艦）を2隻も失ったのである。

ただし明治島奇襲攻撃の報復にはなった。

だが、ここの所いい話が全くといっていいほどない幻想軍はどうにかして、戦意高揚の為に勝ち戦を作る必要があった。つとすると相手を作る必要がある。天界は手強いうえに現在の戦力ではとても太刀打ちができない、ならばロマーニヤ：しかしパナイ島などの島を奪回する準備はできていない。

おまけに大オスマン帝国がエラスに降伏し、逆に幻想国に対して戦線布告を行ってきた為、南大西洋の守りは余計に固められてしまった……つとすると、幻想国が狙ったのはコモロ諸島である。

コモロ諸島はマダガスカル島北西にあるゴール領の島々だったが開戦早々にロマーニヤ軍によって占領され、少数兵力が駐留している島々である。ロマーニヤ軍の占領目的は将来ゴールによって基地が建設されるのを防ぐためであった。当初はコモロ諸島の人々もロマーニヤ人を「解放軍」の人間として歓迎したが、異教徒を弾圧し、圧政を引き、早くも反ロマーニヤ感情が表面化しているとの噂だ。

これに目をつけたのは南方軍のアリス大将であった。

「つまり閣下、この現地民の抵抗をうまく利用すると？」

「絶好のチャンスよ。早期に占領してインフラを整えてあげればあとは政府がゴール政府との交渉を行い、独立させる……そうすればあそこの人たちは私達に協力的になるはず」

「なるほど……しかし我が南方軍は総反攻までは……」

「わかってる。だからこそ私はこれから鎮守府に行くわ」

「マサールのですか？」

「いいえ、ミヤコフのよ。海軍陸戦隊の派遣を要求しに行く。あんな遠く離れた島の面倒をみる余裕は陸軍にはない、だからこそ海軍陸戦隊よ」

海軍陸戦隊……前大戦での大西洋戦線にて陸軍部隊と共に少数ながらも大活躍した海軍の陸上戦闘部隊である。山本総長らはこの陸戦隊

を海兵隊という独立した軍にする計画を立てているが未だに実現の目途はたっていない。しかしその装備は少々時代遅れながらもロマーニヤ軍と戦うには十分なほどであった。

その陸戦隊にコロモ諸島占領を具申する為、アリスは単身航空機に乗り、ミヤコフ島の鎮守府を訪れた。ミヤコフ鎮守府は戦後間もなくに新設された鎮守府である。鎮守府司令長官はかつて戦艦「日向」艦長を務めていた草川淳中将である。

「誰か？」

ドアはノックする音が聞こえると、草川はドアのほうを見てそう言った。

彼はどうせ部下であろうと思っていた。

「幻想陸軍、南方軍総司令官アリス・マーガトロイド大将」

「南方軍の軍司令官閣下でありますか、失礼しました。どうぞ」

身分を聞くと草川の様子が180度変化した。

「そんなに固くなくてもいいよ」

「はっ！恐縮であります。ところでマーガトロイド閣下、どのような御用件でしょうか？」

「実はね、最近幻想軍がほとんどいい活躍をしていないのはご存知でしょ？」

「確かに、我が海軍も小規模な海戦で負け続きで、ダメージコント

ロールが優秀であるお陰でなんとか失う艦艇を最小限に留めさせておりますが……」

正直に言えば海軍もこの所不調であつた……つというより海軍が一番不調であつた。その為、陸軍や空軍の一部将校からは「腰抜け艦隊」「かかし海上警備隊」とまで馬鹿にされる始末であつた。そういうわりには陸軍も緒戦で玉砕しており、その後は対空戦闘以外の戦闘を控えており、いい所がまるでなく、今大戦で今までで最も活躍している空軍に「臆病師団」「口だけ軍団」などと馬鹿にされている。

「うん、しかもそういった敗北は国民の戦意にも関わるわ。そこで勝ち戦を作り、一部の目先の事しか考えていない将校たちに海軍もやればできるという所を見せる為にコモロ諸島の攻略を具申します」

「コモロ諸島！？……確かに情報によればたいした敵はいないようですな……しかし、マ島も近い故に敵機による空襲や敵艦の艦砲射撃が恐ろしい所でありますな」

「そこが問題だけど……陸軍もあの島々是对ロマーニヤ反攻作戦の拠点として使いたいわ」

「……わかりました。確かにあのコモロ諸島は中継基地としては少々遠いかもしれませんが必要でしょう。航空機で飛んで行けない距離ではありません。検討します」

「わかりました」

こうして海軍でもコモロ諸島攻略の計画がたてられる事になった。そんな中、1隻の艦船が一月島に寄港した。

マスカリン王国の艦船である。

マスカリン王国とはマダガスカルの東方にあるマスカリン諸島（地球のモーリシャスがある場所にあたる）にある国家で独立を維持してきたが現在はロマーニヤの脅威に晒されており、しかも王室に跡取りがおらず、国家存続の危機に立たされている。

人口約88万人、四面海なる国家である。

この艦船に乗っていたのはマスカリン王国の国王ナツサウ16世。この王室は遡れば数千年、ハルシュタット系の人間である。しかし唯一の息子であった王子ハインリヒが6年前に乗船していた艦船がライデンブルク軍の潜水艦に撃沈されて死亡してしまった。

兄弟は病死しており、残されたのはこの1年後に生まれたヴィクトリア・アウグスト・フォン・ウルリッヒ・ナツサウのみである。現在5歳で幻想国皇室の事実上皇太子である恒仁親王の2歳年上である。

だが3歳の恒仁親王も今や幼稚園に通っている、しかし誘拐を避ける為か拓海という偽名を名乗っている。人間と妖怪のハーフで年によりにはしっかりしている男の子であった。

ナツサウ16世を港で迎えたの紫の夫で貴族出身の拓郎皇配殿下である。

彼は黒い大礼服に身を包み、儀礼的に敬礼をした。

「Welcome to the fantasy country（幻想国へようこそ）」

カタコトの英語でそう言った後、彼はナツサウ16世と握手を交わした。

さらに喇叭手が旧陸軍の喇叭「君が代」を演奏し幻想国とマスカリン王国の国旗を掲揚した。それと同時に港に集まった陸軍、海軍、空軍の軍人達は敬礼をし、政府やその他の人々もその様子を静かに見ていた。

「余がマスカリン王国ナツサウ16世であります、皇配殿下、本日幻想国に上陸できた事を私は非常に喜んでおります」

「そうでありますか…それでは、こちらへどうぞ」

「はい」

その後、ナツサウ16世は紫と拓郎の間で会談を行った。

その内容は恒仁親王とヴィクトリアの縁談、幻想国とマスカリン王国の連邦化、経済的、軍事的支援である。しかし現在の幻想国にそのような余裕はないが数日後、紫は「検討しましょう」と返答した。

これには幻想国の思惑があった。

マスカリン王国を海軍の根拠地として利用できる可能性があるからである。

この話題の正式な回答は海軍によるコモロ諸島攻略後であった。1月24日、ようやく作戦の具体案が決まり、軍令部を通過、1月8日作戦が開始される事になった。

これが今大戦で幻想国最初の攻勢作戦である。

第三六話、作戦計画と小国からの訪幻者（後書き）

御意見、御感想などお待ちしております。

第三七話、コモロ諸島攻略作戦 1

1月8日午前3時05分、ミヤコフ島を出撃した艦隊はコモロ諸島マヨット島約50kmの地点を航行していた。

空母3隻、戦艦2、重巡洋艦4隻、軽巡3隻、駆逐艦16隻の大艦隊、それに護衛されるのは役8620人の海軍陸戦隊を乗せた輸送艦である。

以下がコモロ諸島攻略作戦、幻想軍作戦名「コ号作戦」の参加兵力である。

GF長官：伊藤整一大将（一月島）

艦隊司令長官：近藤憲弘中将。

・第四艦隊

第一戦隊：戦艦「大和」「金剛」

第四戦隊：重巡「最上」「鈴谷」

第五航空戦隊：空母「瑞鶴」搭載機84機「龍神」51機「武蔵」48機……159機。

第一五駆逐隊：駆逐艦「梓」「雪風」「春」「夏」

第一六駆逐隊：駆逐艦「秋」「冬」「照月」「松」

・第五艦隊

第一戦隊：重巡「南」「青葉」

第二戦隊：軽巡「大淀」「仁淀」「伊吹」

第一七駆逐隊「雷」「電」「五月雨」「曙」

第一八駆逐隊「村雨」「春雨」「夕立」「霧雨」

第三駆潜隊：駆潜艇3隻

戦艦隊は前大戦に参加し、予備役であつたものの緒戦の敗退で余つ

た乗組員を動員し、それらの乗組員を乗せて予備役から現役復帰した艦艇である。

また記念艦であった大和は損傷部分を修復した後、不足する艦艇を補うべく戦列復帰したものである。万が一の事を考え、大和はいつでも実戦部隊に復帰可能な状態で保存されていたのであった。

老朽化はしているものの電子装備は改装によって新鋭化され、ついでに性能も多少向上している。また武蔵が空母に改装された理由としては艦齢が比較的若い事と艦体が巨大で丈夫である事、そして戦艦のままでは使い道がほとんどない事である。

幻想海軍の艦艇は日本海軍でも使用されたような名前のものが数多くあり、艦影も微妙に似てはいるがこれは海軍上層部には日本海軍出身者が多い為である。

艦載機については当初は艦載機の大形化により削減されていたものの、その後の改良によって搭載機数が増えたのである。理由は簡単、地球の米海軍艦載機のように翼をかなり折りたためるようにした事であった。「コ号作戦」に投入される空母は3隻とも前大戦で活躍し、ジェット機を搭載する事を想定していない空母である。その為、艦載機は艦上戦闘機「瑞星二一型」艦上攻撃機「流星」艦上偵察機「彩雲」とレシプロ機ばかりである。

*** 旗艦「大和」 ***

「電探、感はないか？」

「今の所全周感はありません」

大和は修理時の改装により、新型のレーダーを搭載していた。

しかし感はないという、周囲にロマーニヤ艦隊はいないのである。

*** 艦橋 ***

「そうか、電探に感はないか」

彼はコモロ諸島攻略部隊を護衛する艦隊の司令長官である近藤憲弘だ。彼は率先して指揮官先頭を実践するタイプであるが普段は温厚な性格である。それ故に部下からは慕われている男であった。

「はい…やはり、敵艦隊は撃滅しておいたほうが」

「いやいや、その必要はない。いつかはその日が来るが我々にそのような戦力は与えられていない。大切な事は、迅速にコモロ諸島を攻略する事ですよ」

「ではもし敵艦隊が襲撃してきた場合はいかがされるのですか？」

「参謀長、その時は盛大に歓迎するものですよ」

「ハッハハ、長官流石ですな！」

「普段から硬かったらやつてられないからね。気楽な時間は必要だよ。それにあんまりピリピリとした空気を作るなと女房にも言われておるからな」

「そうですか」

一方、ロマーニヤ軍はというと潜水艦の報告により、幻想軍の接近に気がつき、空母3隻を中核とする機動部隊を幻想海軍に向けたの

であった。艦隊司令長官ナポリターノ中将は勝算はあると考えていた。
ちなみに潜水艦は魚雷を発射したがすべて外れてしまった為、幻想軍に損害はなかった。むしろ幻想軍の警戒を強めてしまったに過ぎなかったのである。

大和

「電探に感あり！」

「なに！？敵艦隊か！？」

「はい！かなりの艦隊であります！」

艦橋

「長官、電探に敵艦隊が映ったようであります」

「駆逐艦を輸送船団の護衛にあたらせ、主力は母艦を護衛、敵艦隊迎撃を手伝う」

いち早く敵の姿を発見した幻想軍はすぐさま艦載機の発艦準備に取り掛かった。また、駆逐艦4隻と駆潜艇3隻と輸送船団はコモロ諸島へ向かい、主力は転進してロマーニヤ軍部隊の迎撃に向かった。ナポリターノ中将率いる艦隊の規模は空母3隻、重巡4隻、軽巡5隻、駆逐艦15隻である。数字だけの戦力ならば幻想軍よりは上であつた。

それからしばらくし、空母「瑞鶴」甲板では…

「搭乗員整列！」

午前4時10分、瑞鶴飛行甲板に掛け声が響き渡る。

艦上偵察機「彩雲」がロマーニヤ軍の大部隊を発見、近藤艦隊よりも数が多い事を痛感した瞬間である。しかし幻想軍はめげず戦う事を決意した。…つというより最初から戦うつもりであった。もはや戦いを躊躇う者などいない。我に攻撃する敵は皆撃退するという考えを全員が持っているのである。

搭乗員達は慌てた様子で集合し、攻撃隊隊長村田少佐の目の前に集合した。

「諸君、今度の海戦は我が海軍にとって最後のチャンスであると考えてもらいたい。ここで負ければ確実に海軍は世の中の笑いとされる。諸君ら私も含めた航空機搭乗員は任務を全うし、敗北の道をたどる海軍の起死回生を現実のものとしてほしい。それとも一つ、絶望的な状況となっても敵艦に体当たりするという事はないように。我が軍には搭乗員をすぐに補充できるほどの余力はない。温存しなければならぬ、よって体当たりは禁ずる！何か意見のある者は？」

村田は一同を見まわす。

しかし誰一人と質問はしない。皆真剣な表情でそれぞれの想いを胸に、隊長の村田の姿をぐつと見ていた。

「…では解散！総員搭乗せよ！」

「敬礼！！」

搭乗員達は敬礼をした。

村田も答礼し、総員なおると慌しく搭乗員達は航空機に乗り込んだ。

飛行甲板を見てみれば艦上戦闘機や艦上攻撃機がズラリと並んでいた。それも現在の幻想軍の主力となりつつあるジェット機ではなく、旧来のレシプロ機ばかりであった。

「村田少佐」

「ん？…はっ！長官ではありませんか！」

なんと近藤中將が飛行甲板に現れ、村田に話をかけた。

それに気がついた周囲の整備兵達は一斉に体を近藤中將のほうへ向け、敬礼をした。

「これを持っていてくれないか？」

「これは…妙が作ったお守りではありませんか！」

妙とは村田の妻である。

ちなみに種族は魔法の森出身の魔法使いであり、前大戦の時に工場へ動員された経験を持つ女性である。

「妙さんは村田少佐が家に忘れたと言っておった。だから私が届けると約束したよ。これを持って、必ず生きて帰ってきてくれ。奥さんを悲しませるなよ」

「はい！ありがとうございます長官！」

近藤は微笑みながらお礼を言う村田を見つめた。そして近藤は大急ぎで艦橋に戻った。

「攻撃隊発進！総員帽振れー！！」

艦内スピーカーが攻撃隊の発進を告げると、見送りの乗組員たちが帽を振り始めた。それと共に艦橋横からモールスでチカチカと信号が出された。

「発艦始め、発艦始め」

その信号の後、艦載機は発艦を始めた。

まずは戦闘機が発艦する。明灰白色に塗られた瑞雷二一型が次々と発艦してゆく。続いて濃緑色に塗られた流星が発艦、先頭には村田少佐機があった。彼は艦橋のほうに敬礼、艦橋からは近藤中将とその参謀などが攻撃隊に対して敬礼をしていた。

村田少佐機は朝焼けの大西洋へ、それに続く海鷲も舞った。

一方、ローマーニヤ軍も索敵機が近藤艦隊を発見、双方ともほぼ同時に第1時攻撃隊を発艦させたのである。一方、攻撃隊がお互いに目標である艦隊を目指している間にも戦いは始まっていた。コモロ諸島上陸前の艦砲射撃、及び奇襲上陸作戦である。マヨット島には多数の上陸用舟艇が砂浜を目指していた、これに対して大した火砲を持っていないマヨット島守備隊は水際防衛が出来ず、指揮官はやむなく島に敵を上陸させてから攻撃を開始する作戦をとろうとした。

海における大海戦、陸における戦い…

幻羅両国初の本格的な激戦はまさに今、始まろうとしていた。

第三七話、コモロ諸島攻略作戦 1（後書き）

御意見、御感想などお待ちしています。

… なんとというか、最近東方キャラが… 前作からそうなのですが余計に影薄になってきている気がします（汗）。

第三八話、コモロ諸島攻略作戦 2

機動部隊本隊から発進した第一次攻撃隊は会敵予想海域に到達し、眼下にロクーニヤ軍機動部隊を捉えた。だが機動部隊上空には直掩戦闘機隊が待機していた。この直掩隊と艦の高角砲を避けて通らねば攻撃は出来ない。久々の機動部隊同士の戦いで幻想軍はどこまで戦えるであろうか。

ロマーニヤ軍は新鋭艦上戦闘機を装備していた。

MC212ファイアンマである。最高速度715km/h、航続距離1600km、12.7mm機銃×2、20mm機関砲×2、爆装320kg、運動性能、操縦性良好と瑞雷にも引けを取らない航空機である。

「…少佐、2時方向に機影！おそらくロマーニヤ軍機です！」

「瑞鶴に打電、敵攻撃隊多数我が方に接近中、警戒を厳とせよ」

村田機からそう打電された直後、瑞星数十機は増槽を捨てて攻撃機のほうに向かった。瑞鶴の制空隊であった。上空からの奇襲攻撃によりロマーニヤ軍は攻撃機4機に損害が出た。ちなみにこの制空隊にはレイセン少佐も参加していた。レイセンはジェット機もレシプロ機も操れるベテラン搭乗員として幻想軍では重宝されている。

襲撃を受けたロマーニヤ軍はすぐに直掩隊を向かわせた。

ついに幻想軍vsロマーニヤ軍の本格的な戦いが始まったのであった。

(…噂の新型機ね)

格闘戦に持ち込んだレイセンは敵の背後につき、照準器を除いて未
来予測位置に機銃を撃つ。その為に発射レバーを引いた。曳光弾が
彼女の目に映り弾は敵機に吸い込まれていった。やがてフィアンマ
は炎上を起こし、それを確認したレイセンは操縦桿を引き、上昇を
開始させた。

「少佐！後ろ！」

無線の声を頼りにレイセンは機体を反転降下させた。

しかしMC212フィアンマはレイセンの背後を離れようとはしな
い、相手はかなりのベテランであった。背後から撃たれる曳光弾が
操縦席から見える。いよいよレイセンは最期を悟り始めたのである。

「少佐！」

しかしレイセンは運がよかつたのか味方の瑞星によって難を逃れら
れた。味方の瑞星は上空から一撃離脱を仕掛けたのである。レイセ
ンは機体を上昇、続いて降下させ眼下に見える攻撃機に機銃を浴び
せた。今度は戦果も確認せぬまま直にフットバーを蹴り、隣のもう
1機にも機銃を浴びせて上昇させた。

レイセン得意の一撃離脱である。

しかし瑞星にも損害は生じていた。はつきり言えば瑞星とMC21
2の戦いは機体の性能ではなく、パイロットの腕である。そこまで
2機の性能は近い物であった。ただ航続距離と攻撃力で瑞星が少し
勝っているのみである。

一方、攻撃隊は眼下に見えるロマーニャ軍艦隊に攻撃を仕掛けよう

としていたがロマーニヤ軍の直掩機と対空砲火の前に行く手を阻まれていた。

「敵機は大暴れしております!!」

「護衛機はどうした!？」

「自分の身を守るので精一杯なようです!なんせ敵は新型の戦闘機ですから」

「くそっ!なんとか敵艦までは耐えてくれよ皆…」

村田はそう呟いた。

村田機からは操縦者が戦死し、後部銃座の人間のみが死ぬとわかって空しく戦う姿が見えた。村田は神社でいつか遭おうと心で言った。

いくら流星が高性能でも所詮は攻撃機、MC212の敵ではない。出来る事は回避行動と後部の銃座からの射撃のみ、爆弾や魚雷を抱えた機体は重く、とても空中戦は出来ない。何も搭載していない場合でも流星でMC212と戦うことは無謀そのものである。

爆撃隊

「敵艦直上!」

流星4機は急降下を開始した。

しかし1機は高角砲によって撃墜される、右翼が?げて炎を噴き、くるくる回りながら無残にも海に墜落する。残り3機は対空砲火を潜りぬけて爆弾投下地点まで到達した。

「射っ！」

爆弾は僅か5mという至近弾であつた。

ロマーニヤ軍航空母艦「カヴール」は艦内に浸水を起こすも損傷は軽微、さらにもう1機が投下した爆弾も左舷20mに落ちた。

「くそっ！！敵はこの対空砲火が恐ろしくないのか！？」

ロマーニヤ軍が張る弾幕は確かに恐ろしい。

しかし幻想人は何の躊躇もなくそれを突破しようと必死であつた。軍人はそうでなくてはならないと教え込まれているからである。

「文句垂れてる場合があつたらお前はもつと砲弾を渡すペースを早くしろ！」

「はっ！すみませんでした！！」

「敵2機！新たに急降下！！！」

「よし！！1機撃墜！！！！……いや、もう1機が！！！」

艦に振動が走り、カヴール飛行甲板にて炎上が確認された。

とうとう被弾したのである。さらに急降下してきた1機の爆弾が艦橋付近に命中した。

「うわあっ！！！」

「提督！」

「私は大丈夫だ！被害を報告せよ！」

「…て、提督！報告です！！敵雷撃隊接近との事です！」

「なにいつ！？」

一方、3機の流星が「カヴール」に向けて魚雷を海に投下、雷跡は「カヴール」を目がけていた。しかし「カヴール」は左に急旋回した為、魚雷はギリギリ命中しなかった。だが、今度は村田達がカヴールを狙っていた。さらに損傷していた流星が1機特攻してきたのである。これは幻想軍の命令に背く行為であったがカヴールは大ダメージを受けた。

「よし、沈めるぞ！！後ろはよく見ている！」

「了解！！」

村田達は高度を下げ、水平に飛行した。

しかし魚雷を投下した直後、村田機に砲弾が命中し、翼から炎を噴いていた。

「くっ！！」

操縦桿が全くきかない。

「…ダメだ、突っ込むぞ！」

2機目の流星…つまり攻撃隊の指揮官機が突入した。

カヴールは艦首にもダメージを受け、さらに投下された魚雷が2本も右舷に被雷したのである。大きな水柱が数秒違いで轟音と共に中部大西洋にて立った。

丁度同じころ、幻想海軍機動部隊もロマーニヤ軍の攻撃を受けようとしていた。

幻想軍の対空砲火も近代化され、近接信管を使用、さらに砲自体もレーダーとリンクされていた。その為、ロマーニヤ軍よりも正確かつ効果的な対空戦闘が行えるようになっていた。

「対空戦闘用意！対空戦闘用意！」

大和の艦内で声と喇叭が響き渡る。

一方艦橋では近藤中将が報告を聞いていた。

「敵機方位0-4-0、距離2万、高度4000。現在直掩戦闘機隊と交戦中」

「母艦は死ぬ気で守れ。最大戦速！ようそろ！」

「最大戦速！ようそろー！」

一方、上空では幻想軍とロマーニヤ軍の空中戦が行われていたが攻撃機はそれほどの数が撃墜されていない。瑞星自体がMC212と戦うので精一杯だからである。だから攻撃機が恐れるものといえば幻想軍艦艇による対空砲火のみである。

*** 駆逐艦「梓」 ***

「敵大部隊接近！対空戦闘用意！」

「大丈夫でしょうか？」

「なあに！梓は幸運艦だ！前大戦だってほぼ無傷で生き残ったじゃないか！」

兵士たちの士気は高い。

やがてロマーニヤ軍の編隊は射程距離内に入り、幻想海軍による対空戦闘が始まった。戦艦「大和」では主砲弾の装填が行われていた。しかし……

「やめてください！主砲はやめてください！！」

「何故だ！？」

「他の火器が使用できなくなります！！」

「なんだと！？」

大和型戦艦の欠点は主砲の威力があまりにも高すぎて、一発撃ちや他の火器が使用不能になるほどであった……だがそれは覚悟の上であつた。

「射ッ！」

ドドン！！！！

「うわぁっ！！」

あまりの衝撃に水兵達はなんらかの構造物にしがみついた。帝国海軍が生んだ最強の戦艦は最強の欠陥艦でもあつた。しかし結果的には幻想海軍の対空戦闘はかなりの戦果を挙げた。既にロマーニヤ軍は18機を高角砲や機銃によって撃墜されている。

龍神

「面舵一杯!!」

「左舷100m爆弾確認!!水柱立っています!!」

「敵3機我に接近中!!」

その時、爆弾1発が飛行甲板に命中。

さらにもう2機が投下した2発も命中し、龍神甲板では大火災が発生していた。その損害は予想を遥かに上回るほど甚大なものであった。

「1缶使用及び着艦不能!現在速力32ノット!」

「通信室より!送受信不能!」

「梓に通信代行させよ」

「了解!」

一方近藤も大和艦橋から燃え盛る龍神を見ていた。
このままではお国に帰れないと彼は思っていた。

「長官!武蔵も被雷したようです!」

「それで?」

「現在離脱中。復旧作業を行うべく速力を低下させております」

「そうか……」

…しかし、この時点ではまだ、幻想軍第2時攻撃隊がロマーニヤ艦隊へ向けて飛行していた。

その後もロマーニヤ軍は激しく抵抗した。また2隻が中破した今、瑞鶴単艦の艦載機による連続攻撃が行われた。ロマーニヤ軍のナポリターノ中將は戦闘力の低下を痛感、コモロ諸島攻撃部隊への攻撃を中止し、撤退を決意した。

午前10時、伊603潜水艦が曳航中のカヴールを雷撃、1本を命中させた。しかしロマーニヤの水兵の頑張りや元々の艦の丈夫さから辛うじて沈む事はなかった。だが浸水が激しく、ロマーニヤ軍はカヴールを自沈処分としたが悪夢は再来した。既に空が赤く染まっている頃、幻想軍の主力艦隊とロマーニヤ軍は遭遇したのである。

第三八話、コモロ諸島攻略作戦 2 (後書き)

御意見、御感想などお待ちしております。

第三九話、コモロ諸島攻略作戦 3

旗艦「大和」…

「見えるか？」

「ばつちりです。敵さん自分の母艦の自沈に必死なようです」

「GF司令部からは事情許さば敵空母を拿捕、曳航せよとの事らしい…まったく、南太平洋かここは？」

「…しかし」

幻想軍が見たものは激しく燃えるカヴールである。

おまけに傾斜も大きく、とてもではないが拿捕して曳航できるものではない。確かにかつて幻想軍は大破した敵艦を拿捕した事があるがその時はカヴールほどの損傷ではなかった。しかしあのカヴールは今にも沈みそうな様子であるし、曳航は不可能に思えた。

「…やむを得ん、撃沈しよう。砲撃用意！！」

「方位2 - 3 - 0！距離20km！！」

「撃ちー方始めえ！」

「射っ！」

ドドン！！！！

大和の46cm砲が火を噴いた。

その後も大和と金剛はカヴールを含む敵艦隊に対して砲撃を続け、いつしかロマーニヤ軍水上部隊との海戦に発展していたものの、ロマーニヤ軍は現在の戦力比から敵わないと判断し、迅速にこの海域を離脱した。結果、駆逐艦1隻が轟沈と大破していたカヴールを撃沈という戦果を挙げた。

海戦全体としては幻想軍の損害は空母2隻、軽巡洋艦1隻中破、重巡洋艦1隻、駆逐艦2隻小破、航空機80機以上損失。ロマーニヤ軍も空母1隻、駆逐艦2隻沈没、空母1、重巡1中破、駆逐艦1小破、航空機100機以上という損害を受けた。幻想軍は大損害を被ったがどうか海戦には勝利、コモロ諸島付近の制海権を握ったのであった。

その頃…海軍陸戦隊上陸部隊はグランドコモロ島に全力を挙げて上陸を開始していた。

「敵上陸用舟艇多数襲来!!」

「撃ち方始め!!」

火力で劣るロマーニヤ軍の砲兵部隊も水際で抵抗を試みたが兵力では幻想軍が圧倒していた。ついに幻想軍の上陸を許し、砂浜での激戦が始まったのである。ここグランドコモロ島には歩兵部隊200人と砲兵中隊1個、戦車12両が配備されていた。その為海岸で敵軍を食い止めようとしていた幻想軍とは壮絶な戦闘が行われたのである。

「伏せろ!!」

「ようし！歩兵の為にもひとあばれするぞ！」

幻想海軍陸戦隊の戦車中隊には四式中戦車が配備されていた。そこでロマーニヤ軍のM13/40中戦車との戦車戦になる。

「右30度！距離600羅軍戦車見ゆ！」

「弾種徹甲弾！砲撃用意！！」

「照準よし！！」

「装填完了！」

「射っ！！」

四式中戦車の75mm戦車砲が火を噴く。

放たれた徹甲弾はM13/40中戦車の最も厚い部分に直撃したが対戦車戦闘を本格的に想定したこの戦車の主砲はM13/40中戦車の装甲を貫くには十分すぎる威力であった。四式中戦車の主砲は日本製の一式徹甲弾を用いた場合でも1000mで75mmの装甲を貫通させられるのである。幻想軍の場合は徹甲弾の性能も当時の日本製よりも良いものである。

即ちオリジナルよりも多少攻撃力が上がっているのである。

M13/40中戦車は被弾するとすぐに燃え上がってしまった。それどころかM13/40中戦車は幻想軍歩兵相手にも負けてしまった。歩兵が装備する二式携帯砲によってその薄い装甲をあっさり貫通させられてしまったのである。

「俺達が思っていたよりもロマーニヤ軍は弱い」

幻想兵の率直な感想である。

確かに緒戦の快進撃を見ていた幻想兵からしてみればロマーニヤ軍はあっけなく敗退した。

「前へ！」

砂浜とその周辺は僅か数時間の戦闘で占領されてしまった。

その後、海軍陸戦隊の野営地では報告が行われていた。

「全軍！上陸完了しました！」

「その後の戦闘は？」

「はっ！我が部隊は順調に進撃しております！……いえ、順調すぎるぐらいの進撃ぶりです！この分ですと明日には全島が占領できるものと思われます！」

「そうか……コモロ諸島攻略に最低3日は掛かると思っていたが……そうではなかったか。いや、以外にロマーニヤ軍が大したことがないという事か？」

「ええ、おそらくかつての南ライデンブルク軍のほうが強かったでしょう」

その話を聞き、今回の司令官の本庄海軍少将はしばらく目を瞑るがその後、目を開ける。すると、本庄少将は落ち着いた様子で部下に語った。

「順調なのは良い事だ。自分はこの戦いの戦死者を双方ともに最小に止めたい。戦いは殺すものではない、双方とも少ない損害で敵を降伏させる事だ」

「はっ」

この本庄少将は人命を重視するタイプの軍人である。

それは味方だけではなく、敵であってもという事であり、なるべく戦いによって戦死する兵隊を少なくしたいと考えていた。

その頃、グランドコモロ島ロマーニヤ軍司令部では……

「隊長殿、敵軍の総兵力は5000を超えるものと思われます。このままでは全員戦死してしまいます」

「……」

「隊長殿、貴方は前大戦を経験されたのでしょうか？南ライデンブルク軍は全滅するまで戦いました。しかしそれで勝てるわけではありませんし、恐らく何の名誉にもなりません。我々は降伏すべきです」

「そうしたい所だ。だが皇帝陛下が文句を言うぞ。反乱が起こるかもしれない」

とはいえ戦争目的が曖昧なうえに兵力も少なく、島嶼防衛戦の緒戦で大敗し、海戦にも負け、本国からかなり遠く離れているコモロ諸島守備隊の兵隊達の士気は極めて低く、直ぐにでも投降したいと考える兵士の数も半端ではなかった。

さて、一方は幻想軍。

彼らはロマーニヤ司令部を目指して進撃を続けていたがなんと彼らに協力する人々がいた。それは現地民である。現地民はゴールに続いて次はロマーニヤと頭を悩ませていた。既に独立運動は始まっていたが軍によって抑えられているのが現状である。そんなときにやってきた幻想軍は彼らからしてみれば救世主であろつ。

ドドド...

パン！パン！

バシュツ！

「10m前進しろ！！負傷者は後方へ！！」

後方へ運搬された負傷者は軍のみならず、島民からの手当ても受けていた。

女性や老人も負傷した幻想兵の手当を行った。中には恋に落ちる若者同士もいたという。やはり幻想軍の狙い通り、島民は幻想軍の味方についた。さらに島民から好感を受けるべく、軍旗のほかには後に国旗となる緑に三日月と星という彼らの旗が掲げられた。

さらに戦闘を見た島民は幻想軍の強さに圧倒された。

自分達が敵わなかったロマーニヤ軍をいとも簡単に倒してしまったのである。これを見て彼らは「最新最強軍隊」と幻想軍を称した。しかしその実態は旧態依然のものである。

一部部隊を除けば装備は旧式のものも多いのが現実である。

グランドコモロ島守備隊は司令部付近に集結、最終決戦に備えていたがロマーニヤ兵が望んでいた思わぬ命令が下されたのである。

「降伏する、武装を解除せよ」

勝ち目がないと解りきっており、早く国に帰って家族と会いたかった兵士達はこの降伏命令に大喜びであった。しかしロマーニヤ軍としては非常にまずい事態でもあった。兵士がこれほど降伏を喜ぶほど士気は低かったのである。隊長は他部隊もこのような調子では戦争は負けると確信した。

1月9日早朝。

本庄少将らとの会談によってロマーニヤ軍は降伏、昼にはコモロ諸島の戦いが完全に終結した。

幻想軍は62人の戦死者と86人の戦傷者を、ロマーニヤ軍は238人の戦死者と350人の戦傷者を出した。行われた戦闘はどれも小規模なもので決戦前に戦いが終結した為、双方とも本庄少将の望み通り戦死者の数は比較的少なかった。双方或いは片方が大兵力を持ちながらも出血が少ない戦いとしてこの戦いが挙げられる事が戦後世界でもあるほど、この戦いの死者は少なくそして短期決着であった。

第三九話、コモロ諸島攻略作戦 3（後書き）

御意見、御感想などお待ちしています。

こここの所多忙につき更新ペースが日に日に落ちていきます。

今後数週間はさらに多忙につき更新ペースが大体週1レベルまで低下しますがご了承ください。今後とも駄文ではありますがよろしくお願ひします。

b y 栗林

第四〇話 西南情勢

先のコモロ諸島攻略戦は幻想軍の圧倒的勝利に終わった。

予想外の楽勝は幻想兵の士気を大いに上げたと共にロマーニヤ軍が実は弱体であるという事を知る結果となった。実際にロマーニヤ軍が勝ち進んでいる戦線での相手は旧式装備がほとんどのシルビアや中東の小国、あるいは植民地軍である。

これらが相手ならば旧式装備でもある程度は戦えるだろうし、陸戦は多少の装備の差があっても勝つことがある。たとえば旧日本軍は大東亜戦争緒戦でM3軽戦車との戦いで非常に苦戦している。それどころか対戦車砲相手にすら9両が撃破されて中隊が全滅したという出来事もあったがいずれも戦いには勝利している。

装備から何まで不利な状況でも勝ってしまう事があるのが陸戦であるが、あくまでそれは可能性であって絶対とは限らず、結果的にロマーニヤ陸軍の装備は前大戦よりは改善されているものの貧弱である事には変わりなかった。またコモロ諸島での圧勝によって幻想軍は少数兵力でもロマーニヤ軍と戦えると認識した。

しかしアメリカスでの反応は冷たいものであった。

アメリカスのとある新聞では「雑魚同士の戦いに強い雑魚が勝利した」と紹介された。確かにアメリカスの軍事力があれば幻想国などは敵ではないだろうがこの記事は幻想国の怒りを買うことになった。三千院首相は「これは我が国に対する侮辱である。確かに我が国は小国ではあるが弱いとは思っておらん」と語った。

強気の主張ではあったが強ち三千院首相のいう事は間違いではなく、現に幻想軍は現在総兵力が100万を超えており、6月までには根

こそぎ動員による兵隊の基礎訓練が終了して300万を超す予定であった(ただし以前語った通り残された課題は多い)。ハルシュタットでは「幻想国は建国から間もない小国であるが軍事面では大国である」と言われている。事実大西洋の制海権を握る幻想海軍に對抗しうる海軍は数えるほどしかない。

1月15日、ローマニヤ軍は質も量も劣るシルビア軍の凄まじい抵抗によって進撃速度が低下しているものの勝ち進んでおり、すでに首都まで100kmの地点に迫っていた。それでもシルビアがここまで持ちこたえたのは周辺国家と在留アメリカス軍と在留イングランド軍の善戦であった。さらにシルビア軍は打撃を与えつつ効果的に後退し、首都まで30〜80kmの地点にある数か所の防衛線で決戦を仕掛ける作戦を立案、シルビア軍を主力とする各国連合軍は総兵力86万に上った。

これで数力月は持ちこたえる見込みである。丁度同じころ、幻想郷西南部でも戦争が勃発しようとしていた。天界の支援によって幻想共和国軍が息を吹き返し始めていたのである。天界は空輸によって支援を行い、ほぼ毎日のように幻想軍の戦闘機に数機が撃墜されるものの長期にわたって行われた空輸作戦は成功であった。

幻想共和国軍は根こそぎ動員を行い来月までには総兵力が20万人に達する見込みである。これに天界軍歩兵2万人が加わり、いまや幻想共和国は侮れない国となっていた。なお装備はまだロマノフ製が大多数を占めるが天界製のものに更新されつつあり、近代化が進んでいた。

さらにこれだけならまだしも、軍事力の増強ばかりか幻想国&西幻想国との関係はより悪化していた。

この日、三千院首相と幽香は幻想共和国問題に関して実験農場にて会談を行った。現在もこの地には研究所と兵器生産工場（西幻想国では実験工廠）がある。西幻想国の中心的な兵器生産地である。

「そうですか？ そちらも幻想共和国との交渉は難航しておりますか」

「まあね。天界とは絶対縁を切らないらしいわ。経済的にも軍事的にも支援を行い発展を約束するっていう悪い条件ではないのにな」

「そうですね……しかし彼らの我々に対する憎悪はこの短期間の間に凄まじいものになってしまった。まあ無理はないでしょうが……このままですと戦争は回避できません。我が幻想軍は確実に規模を拡張しておりますが……どうも陸軍の話によれば増設師団の多くには旧式装備が配備されているようであります、いくら幻想共和国軍が相手であっても苦戦は確実との事であります」

海軍出身の陸軍とは離れた存在である三千院は陸軍の話信じざるを得なかった。しかも陸軍の言うことは真実であり、増設師団の多くは旧式装備を配備しており、練度も高いとはいえなかった。まさに数だけである。

「どうでしょうか？ まだ交渉する余地はあるけど……」

「とにかく、戦争にならない事が一番です。現状ではこれ以上我が国は戦線を拡大できません。かといって西幻想軍に迷惑をかけるわけにはいきません」

「でも戦争になる可能性のほうが高いわ。私は勘弁、幻想郷の花が荒れちゃったら大変ですもの」

幽香はやはり花の事を第一に考えていた。

なので幻想郷での戦争は極力避けたいと考えていた。戦争を避けたいという考えは概ね三千院首相とは一致していた。ただ両者の戦争回避目的は根本的には違っていたが。

「あゝとにかく、幻想共和国による越境攻撃の可能性は大であります。楽観的に見ていてはまさかの敗戦もありえるでしょう。天界が背後にありますからな。我が国として、対幻共交渉を続行、一方で戦争準備をより本格化する事になるでしょう。陸軍側は歩兵二個師団の増強を考えております」

そうなれば幻想陸軍西南軍の総兵力は6個師団78000人になる。ただし主力は天界戦や南洋戦線での戦いに参加するのでそのうち4つが新設された歩兵師団であり、残り2つの内訳は第62師団（戦車）や第65師団（砲兵）、このほかには二つの連隊が加わりその内訳は独立工兵第4連隊と第29師団輜重兵第29連隊である。この西南軍の編成は陸軍が幻想共和国問題を楽観的に見ている決定的な証拠であった。しかも歩兵四個師団の装備は装備品不足により概ね昭和初期レベルとやや旧式装備である。中には明治期の武器も混ざっていた。

戦車師団と砲兵師団は戦後兵器も混ざってはいるが大戦中の代物も混ざってはいる。ただし幻想共和国は軽戦車しかもっていないはずなので十分ではあった。

ここ、国境より僅かに100kmの地点にある西南軍司令部では兵力不足の中で万が一幻想共和国軍が幻想国か西幻想国に侵攻を開始した場合、どう対処するかが話し合われていた。西南軍司令官にはかつては封印されていた聖白蓮が着任していた。彼女はかつて帝都

で神社を開いていたが空襲を受けて焼失した為、本拠地を一月島に移した。

しかし「天人こそ至上である、続いて妖怪、最も下劣なのが人間である」との考えを持つ一派が天界に台頭しているという話を聞くと、自身の理想である「人間と妖怪の完全平等」のために軍に志願、実戦経験者で部下もいた事、当時の軍は將軍不足であった事から海斗同様昇進は異様に早かった。結局前大戦で実戦は経験しなかったが今回も急激な軍拡によって將軍が不足し始めた事から中将昇進、海斗を追い抜く形となったのである。

「敵総兵力22万では多面作戦は行えません…とすると陽動作戦部隊がもう一つあるぐらいが妥当であると思われます」

「そうですね…陽動作戦は確実にあるでしょうね。とするとその目標がどこであるかのほうが重要ですね」

「聖閣下、動員兵力まではわかりませんが、おそらく陽動兵力の矛先はこちらに向けられているのではないのでしょうか？」

その可能性は大である。

しかも西南軍は兵力の問題上数万の軍が侵攻してくれば対処できるか怪しいものであった。装備は主力よりも劣悪かつ人員は工兵隊や輜重隊を含めても8万に満たないのである。

「3万もいれば場合によっては我が軍は負けますよ。こっちの決号作戦や外のマレー作戦という歴史上の出来事がありますからね」

「聖閣下！そのような弱気でよいのですか！？」

「そんな事はいつてませんよ？一応大本営には兵力の増強を要請しています」

「それで？…やはりダメですか？」

「こつちも必要な兵力が不足しているんだって…一発ですね。最近
は門前払いですよ。はっきり言って大本営は今回の問題を楽観視
していますわ」

幻想共和国の人口はレソトの大体倍レベルである。

レソトでさえ28万人が適合者であり、しかも幻想共和国にはライ
デンブルク軍での軍歴がある人が多かった。なのでざっと40万ぐ
らいの動員は可能であった。

実際幻想共和国では人員の面ではすぐに動員できるようになってい
た。武器の不足がなければかなりの大規模な作戦が行えるのである。
現在もライデンブルク軍にて軍歴があった者を中心に動員が行われ、
日に日にその規模は大きくなりつつあった。

「もし幻共が侵攻してきた場合は如何に対応すればよいのでし
ょうか？」

「聖閣下、一度西南軍の総力を挙げた会戦を試みては如何でありま
しょうか？」

「私も大体その考えです。敗北した後は遊撃戦を展開して援軍の到
着を待ちつつ敵の進撃速度を鈍らせ、一日でも長く戦い続けるとい
う作戦でいきましょう。石田参謀長、司令部の移設作業は？」

「現在工程80%、順調でございます。またこれまでの重要書類も

すべてまとめてあります。あとしばらく経てばいつでも司令部を移す事が可能となります」

西南軍は北東約380kmの地点に司令部の移設作業を行っていた。これは万が一に備えてである。流石に国境から100kmは近すぎるのであった。

「そう…一番いいのは戦いを未然に防ぐ事ですが、それは政府に頼るしかありません」

「そうですね…我々軍隊は所詮戦争屋でありますからな」

「今までの平和主義的なものは通用しない…ですか。近代化以前はそれこそ小競り合いが関の山で平和そのものだったらしいですからね…まあ近代化を怠っていた場合は今頃ライデンブルクの圧政に苦しんでいたのでしょうかね」

「…やはり人間が介入するとロクな事がないのでは？聖閣下…」

石田参謀長がそう訊く。

彼は妖怪の山出身の妖怪であり、妖怪至上主義者で人間の部下に冷遇した事もあり、一度罰金と重労働という処分が科せられた事もあるほどである。

「そんな事はありません…物事負はつきものです。それを言えば我々妖怪の古臭い考えこそ発展の妨げになっているのではないでしょうか？少なくとも私は人間は戦争という負と同時に多くの利点も持ってきてくれました。この近代軍隊というのもそうではないかと思っていますよ」

「どういう意味ですか？」

「我々に一方的に意見を押しつける為に侵略を行う輩に抵抗する為の軍事力を与えてくれた、私はそう認識しています。人間も妖怪も私だって正しいわけではないと思っています。正しい物が何かを探すのが我々に課せられた一種の任務だと私は考えています。だからこそ私は人間と妖怪の完全平等を訴えているのですよ。何が悪い何が悪いと人間に言いがかりをつける妖怪による無意味な差別こそ、それに異を唱える人間との無駄な対立を生むのですからね。私、正直に言えば戦争とか、争い事は大嫌いです。しかし人間も妖怪も物解りが悪い、だから内部での争いは絶えないのです」

「は…はあ……自分には聖閣下の仰る事がわかりません」

「詳しく語れば時間がかかるのでこの場では割愛させていただきますわ。まあ暇なときにお二人でお話ししましょうか」

「は…はあ…」

この笑顔が石田にとってはすごく恐怖に感じられた。

結局白蓮の理想のすべてを理解するものは西南軍にはいない。現実彼女の言いたいことをすべて理解できる人などいないであろう。しかし何を言いたいのだろうか。

要するに人間にも妖怪にも負はあるがそれをお互い認め合ってこそ、双方の完全平等は実現するという事であった。白蓮は双方の完全平等を目指す今の国にとっては必要な人材であった。

第四〇話 西南情勢（後書き）

御意見、御感想などお待ちしています。

多分明日には復旧、やっと遅くて打ちづらいノートから解放されます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8540j/>

新・幻想の零戦

2010年10月9日14時36分発行